

これにより、宮城尋常高等小学校の校舎は完成され、翌年一月十九日校名変更され一村一校となつて新発足することになった。これまでの各校の児童数を表示すれば、次表のようである。(表)

こうして新校舎の落成はみたのも東の間当時の児童数の増加は、たちまち校舎の狭隘を来したようである。即ち、明治三十四年ごろから二部授業を余儀なくされた。以下、その状況を摘記する。(上野教育会雑誌二〇四号、明治三十七年十月十五日発行)

宮城尋常高等小学校の二部教授 上野 福松

数年この方就学奨励の結果として吾が校も年々児童の数を増加し、校舎の狭隘を告げ学級を増加したきも教室なく為に明治三十四年度より、百名内外を以て一学級を編成するの己むを得ざるに至れるも、器械器具教室之に伴なわず為に二人机に三人以上を椅らしむるの不都合を演ずるに至る、而して本年度は特に其増加を見るに至り当事者亦是に見るあり、増築の協議を屢し議は一昨年にて決し居るも不作の為延期と



苗ヶ島出身・上野福松校長

なり今回又も空前なる大事業の為着手などは思ひもよらざるの悲運に遭ひ如何にしてこの排列の混雑なる児童を完全に

教へ進めんがとは実に学校の頭痛なりき、然るに本部視学根岸氏一度余が校を巡視するや本校こそ二部教授の必要あり速やかに実施せられてはとの勤めにより直に当事者にも謀り先ず尋常科第一学年に試みに実施せばやと其運びに着手せり(中略)

二部教授実施に関する規定

第一条 本村中文字三夜沢村市之関村柏倉村の寺以北、大前田村横通り下を除くの外各大字尋常科第一学年児童を二部に分ちて二部教授を行ふものとす。(本条の除きたる大字小字は通字距離三十町以上なるが為たり)

第二条 前条の部を定むること左の如し

甲組 大字鼻毛石村柏倉村市之関村の児童及大字大前田村の男児

乙組 大字苗ヶ島村馬場村の児童及大字大前田村の女児

第三条 毎日の教授時間の終始は左の通定む。

四月一日より七月五日に至る

前部 午前八時より十一時に至る

後部 正午より午後三時に至る

七月六日より九月十日に至る

前部 午前七時より九時三十分に至る

後部 午前十時より午後一時三十分に至る（昼食時一時

間）

九月十一日より九月三十日に至る

前部 午前八時より十一時に至る

後部 正午より午後三時に至る

十月一日より三月三十一日に至る

前部 午前八時三十分より十一時三十分に至る

後部 午後零時三十分より三時三十分に至る

第四条 甲組及乙組児童を一週間毎に前部或は後部に交代し

教授を受けしむるものとする。

（以下第八条まで後略）

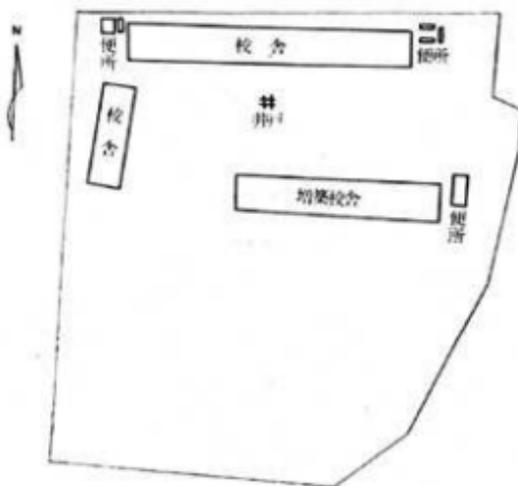
他に三夜沢村市之関村柏倉寺以北、大前田村横通下の児童約三十名は特に一学級を編成すること。

こうして充足した二部教授は三十七年六月には

甲学級五十名乙学級五十八名（普通学級三十名）で井上嘉重郎調導がこれに当った。

内容は修身(2)、国語(9)、算術(4)、体操(2)、唱歌(1)の計十八時間であったが、この実施に当っては範を東京高等師範

宮城尋常高等小学校校構内補図明治四十一年十二月現在
面積三千四百二十八坪四合八勺
(老町老段四畝八步四合八勺)



学校に求めたという。

その出席歩合をみると

二部教授七八・二%、非二部教授七四・三%であり、その効果が指摘されている。

こうして児童数の増加に対処していたが、明治四十一年十月、ようやく懸案の増築がなされ（間口二十七間、奥行五間、建坪一三五坪）この方策も解消されたものと考えられる。

明治末期における学校の状態を次の資料でみてみよう。

私が小学校にあがつたのは、明治四十五年でくす家の校舎があつた。茶番さんが鐘を引るとカンカンと鳴つて始業や休みを知らせてくれた。井戸は鎖の釣べで鎖がはずれると大変苦労した。昔はカバンなどを背負つて行く生徒はなく地蔵の風呂敷を横に背負つて小鉢の弁当をもつて来るものもあつた。宮城の生徒は上から下まで黒づくめで衣服は地蔵の手紙であつた。

上野丑之助（宮小PTA白球十一号）

ともあれ、明治期における教育界の状況は新施策としての学制に対処しての就学奨励とそれに対応しての児童数の増加にともなう校舎建築の繰返しであつたといえよう。



明治31年度卒業生

群馬県学事関係職員録

(明治三十八年五月)

◎宮城村

村長 前原芳雄
 助役 長岡道三郎
 学務委員 上野東太郎
 同 上野福松

○宮城尋常高等小学校 大字鼻ヶ石村

学級数 尋常九学級

高等三学級

訓導兼校長 (六級下傳) 上野福松
 訓導 (七級下傳) 桜井豊躬

明治期における教員は地域毎に参集して研修する機会をもっていた。その組織は乙種学事会であった。県は明治二十八年七月八日、学事会についての訓令を発したが、それは甲乙二種に分かれていた。甲種学事会というのは村当局、学務委員、学校長等で組織され、村教育の大綱を議するもので会合も定期的ではなかった。甲種学事会の例を挙げて次のようなものであった。

明治四十四年十月二四日 甲種学事会ヲ開ク

会則制定ノ件、就学及出席奨励会

設置ノ件協議決定ス

十一月七日 特別教授ニ関スル件ヲ議定ス

四十五年二月十七日 学令児童保護会規定及細則ノ件ニ

ツキ協議ス

(沿革誌)

教員研修に直接関連をもったのは乙種学事会であった。これは数ヶ村の教育現場の者の横をつなぐ機関で毎月少な

くとも一日は学校を休みにして、研究会やら講習会を実施し、教員の資質の向上に資するところが大きかった。勢多郡十七ヶ町村を五つに分け、大胡・宮城・粕川・新里の四町村で第四部乙種学年会を構成していた。

活動をみると教授法講義を師範指導を招いて実施したり、講義を受けたりした。またお互いの教員の中から代表がでて授業を行ない批評会を開いた、宮城小治革誌によれば明治三十四年以降特に流行するようである。

また教員の団体としては他に教育会があった。これは明治十九年一月五日、「本県教育ノ改良上進ヲ謀ルコト」を目的として設立された。当初は東群馬、南勢多教育会をして、親団体である上野教育会に加盟していたが、明治三十一年十月勢多教育会として再編された。これも講習、研究会・講話・雑誌・教科書編さん、調査研究等を事業としていた。これが毎年一回十月を中心に郡役所等を中心に開かれた。

その他、学校を中心とした集会をみると、父兄母姉会、学芸会、運動会等があった。

父兄母姉会は現在のPTA活動の前身であるが、その初現は明治三十八年十一月四日である。そこでその内容をみると

明治三十八年十一月四日 母姉会ヲ本校ニ開ク土方女子師範

会議員諸氏ノ臨席アリ

学校教諭ノ母姉ニ対スル演説アリ、母姉ノ会スルモノ数

三十九年一月二十七日 会スルモノ五百余名金森通倫氏

百名福田郡長、牧大胡小学校、阿久沢郡会職員、本村々

ノ勤儉貯蓄談モアリタリ

等が見え、成人教育的な内容がうかがわれる。また次のように学習発表参観のようなものも開始される。

明治四十年二月二十日 父兄母姉会兼生徒学芸会ヲ開ク、会

校、高島月田尋常小学校長

スルモノ百八十余名、及び根岸郡視学林茂蔵第一小学

この年には、七月、十二月にも学芸会が催されている。この頃から学芸会が開催されるようになったものである。四十五年九月二十三日からは各部落毎の巡回父兄母姉会ももたれた。

運動会は、明治三十九年から開始されたが、学事会の活発化と相まって、明治四十二年には学事会区内の児童を集めて盛大に行なわれた。

明治四十二年十月二十六日

第四回秋季運動会ヲ舉行ス、来会者左ノ如シ

- 一、滝窪小学校ヨリ職員二名
- 一、粕川小学校ヨリ職員一名、児童百名
- 一、月田小学校ヨリ職員三名児童七十余名
- 一、新里校ヨリ職員六名児童百余名
- 一、花輪校調導生形沢入校長桜井
- 一、村会議員、駐在巡査、保護者等無応一千余名

このように運動会が次第に盛大化し、秋季大運動会と銘打って展開されだすものと考えられる。また、乙種学事会部内における児童の運動会も開催されるようになり、各学校の成績を競うようになっていった。

児童数の変遷

年度	尋常科		計	高等科		計	合計	学級数
	男	女		男	女			
二六	一六七	八八	二五五	九三	一〇三	三五八		
二七	一八七	九九	二八六	九五	一一一	三九七		
二八	一六一	七六	二三七	七六	七五	三二一		
二九	一九九	一一九	三一八	九六	一〇九	四二七		
三〇	二二七	一一五	三六二	八〇	九三	四五五		
三一	二一四	一一五	三四九	八四	一〇三	四五二		
三二	二〇二	一一三	三三五	八九	一〇五	四四〇		
三三	二〇〇	一一〇	三三〇	八二	九三	四二三		
三四	一九一	一四八	三三九	一〇四	一二一	四六〇	一〇	
三五	二二三	二六六	四八九	一三三	一六三	六二五	一一	

累年予算表(その二) 明治

年度	給料	雑給	需要費	修繕費他	合計	児童一人当	備考
八					七二円二五六		
九					一一・八五〇		
〇					一九五・六七〇		
一					二一〇・二七五		
二					二七五・九八〇		
三					三七五・三八〇		
四					四四四・三八五		
五					四五二・一五七		
六					四五三・〇九五		
七					四二〇・一三五		

三六	二四七	二三五	四八二	一〇八	一四三	六二五	〇
三七	二四一	二三四	四七五	一六	一五一	六二六	一
三八	二五七	二三六	四九三	二六	一八一	六七四	一
三九	二五七	二二六	四八三	二〇	一七三	六五六	一
四〇	二四七	二三〇	四七七	二三	一六七	六四四	二
四一	三二一	二六〇	五八一	五〇	一六七	六四八	三
四二	三四二	二八五	六二七	一七	一六七	六四八	三
四三	三五一	二九五	六四六	五五	一六九	六九六	四
四四	三四四	三二四	六六八	六九	一九二	七三八	四
四五	三三六	三四七	六八三	七八	一九〇	七六八	四
				七二	一九六	七七九	四

(尋六・高二年となる)

四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八		
二、八九二	二、六七六	二、〇七六	一、九六八	一、九二〇	一、六八〇	一、八七二	一、八九六	一、六〇八	一、四二二	一、二五八	一、二四二	八八六	八五三	八四八												
二〇六・三〇	二二六・三〇	二二四・八〇	二〇〇・八〇	一八二・五四	一四六・六五	一五一・九三	一五三・一二	一三〇・三二	九五・七〇	一五七・六二	一二八	一一四	九五	八三												
五二四・七〇	四九七・四二	三六二・四〇	二六八・一九	二七〇・二五	一六七・九五	三一二・二〇	三八一・七五	三七五・五五	三四一・五〇	二七三・一三	二九三	一五四	一三四	一四二												
一八六・九〇	一七〇・五〇	一三三・七〇	一六二・八〇	三七〇・五七	四七・三五	一四一・六六	七四・六六	五九・六〇	七六・三〇	八五・五七	九六	六四	八八	九三												
三、八〇九・九〇	三、五八〇・二二	二、七九六・九〇	二、五九九・七九	二、七五五・二七	二、〇四一・九五	二、四七七・七九	二、五〇五・五三	二、一七三・四七	一、九三九・五〇	一、七七四・四二	一、七五一	一、二一八	一、一七〇	一、一六六	一、一八七・九五一	一、一六一・一七六	六二二・〇〇九									
五・四七	五・五二	四・一九	三・九六	四・〇九	三・三六	三・九六	四・〇一	四・七三	四・五九	四・〇三	三・八九	二・六八	二・七三	三・七四	二・九四	三・二四										
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
																	宮城尋常高等小学校								宮城尋常小学校	

第二節 明治期の小学校

三九	2 東宮徳次郎
四〇	6 阿久沢友次郎
四一	2 堤 八千代
四二	
四三	
四四	6 東宮徳次郎
四五	5 長岡朝太郎

参考 小学校令の沿革

- 一 明治五年八月、学制頒布、小学校は人民の必ず学ぶべきもの、小学校を上下等に分ち八級より一級に至る。
- 二 明治十二年九月、学制を廃し教育令を発す、各町村に小学校設置、学令を定め、十六ヶ月の普通教育を受けるよう定む。
- 三 明治十三年十二月、改正教育令、三ヶ年の義務教育を定む。
- 四 明治十四年五月、小学教則綱領、小学を初等、中等（各
- 三年、高等（二年）の三等に分つ。
- 五 明治十九年四月、小学校令、尋常科（四年義務制）高等科（四年）とす。
- 六 明治二十三年十月小学校令、教育の本旨示す教育勅諭下賜
- 七 明治三十六年四月、教科書国定となる。
- 八 明治四十年三月、小学景令改正、尋常小学校六年、高等小学校二年となる。

四 小学校経費予算調製表ニ付向

小学校経費予算調製表ニ付向

明治二十一年度第三拾学区公立尋常小学校経費収支予算別紙

以下次の例をひいておく。
之通調整候条施行致シ可然ル設此段相候也

二六	5 村長 前原甚太郎	二七		二八	4 高橋新三郎	二九		三〇		三一		三二	7 前原 芳雄	三三		三四	4 上野東太郎	三五		三六		三七		三八	4 星野 三郎
	5 長岡道三郎 阿久沢友次郎											4 阿久沢源三郎													3 上野 福松
	3 校長 鳥居忠亮							4 秋山金次郎 伊東保乃磨	6 37 4																

南勢多郡鼻毛石村外四ヶ村

戸長欠ニ付

用保田島義方禮

金拾八円

書籍器械費

但シ教科書参考書用書籍一ヶ月平均五拾錢理化其他
諸器械博物標石等買上及修繕一ヶ月平均老円

金貳拾三元六拾錢

雜費

明治廿一年三月五日
群馬縣知事佐藤与三殿

明治二十一年度第三十学区南勢多郡鼻毛石村尋常小学校經費予算

金五百四拾七円

支出額

一金五百四拾七円

収入額

内訳

金五百四拾七円

鼻石尋常小学校費

金五百四拾七円

鼻石尋常小学校収入

内

金四百五拾六円

職員俸給

金百円八拾錢

生徒授業料

但校長兼調尋月俸給四円調尋八月一人此金貳百六拾四円
授業生、月俸五円一人三円五拾錢一人三円二人此金百七
拾四円

事務係月俸一円五拾錢一人此金拾円

但シ月賦寄附

学費収益

金三拾七円四拾錢

雜給

但シ学資金利子

但シ小使一人一ヶ月老円五拾錢此金拾八円臨時雇夫一
ヶ月一人日当貳円四拾錢校長以下職務勉勵ノ者慰勞手当
金三円優等生褒賞費金貳円校長以下職務旅費(赴任郡御
諮問会比較試験等)一ヶ月平均老円此金拾貳円

書面之趣認可ス(朱書)

明治二十一年三月十三日

群馬縣知事佐藤与三代理

金拾貳円

借地借家費

但シ一ヶ月金老円

群馬縣書記官 渡辺 清 印

とあることから執行されたものと考えられる。

第三節 大正期の小学校

大正期における県下教育界の趨勢は、明治四十四年六月の「教育ニ関スル訓令（四大方針）」の実施に糾々としていたのが実情であり、教育事象そのものも概ね、この訓令にそつて実施されていったとみることが出来る。

そこで、それらの問題に多少ふれてみよう訓令の内容は、

- 一 学令児童就学出席ノ成績ヲ良好ナラシムベシ
 - 二 小学校基本財産ノ増殖ヲ計ルベシ
 - 三 内容ノ充実ヲ有スベシ
 - 四 小学校ヲ以テ教化ノ中心タラシムベシ
- であつた。

これが実際に如何に各学校におろされていったかについて巡視簿から拾つてみる。

大正元年九月十日 県視学 柳井松次郎

郡視学 桜井菊次郎

県視学ヨリ

一 教育方針ノ研究徹底ヲ望ム

本校ノ現況ヲ視テ出席ノ督励ニ努力セラレンコトヲ望ム

二 基本財産ノ件

有力ナル方法立チタリト認ムルコト能ハズ

三 社会教育ノ件

間接直接ニ成績ヲ挙グルニツキテ必要ナリ

四 内容ノ充実

甲 訓育ノ方面

実践要項ノ実現ニ向ツテ共力シテ当ラレタシ

南勢多郡磯毛石村外四ヶ村

金拾八円

書籍器械費

戸長欠ニ付

但シ教科書参考書用書籍一ヶ月平均五拾錢理化学其他

用係田島義方助

諸器械博物標石等買上及修繕一ヶ月平均老円

明治廿一年三月五日

金貳拾三円六拾錢

雜費

群馬縣知事佐藤与三殿

但シ郵便脚夫運送等一ヶ月平均拾錢其他筆墨紙白墨類

明治二十一年度第三十学区南勢多郡常小學校經費予算

教授用藥品及炭油等一ヶ月平均老円五拾錢此金拾八円卒業進級及奨励試験免状用紙等金四円拾錢

金五百四拾七円

支出額

一金五百四拾七円

取入額

内訳

鼻石尋常小學校費

内訳

鼻石尋常小學校取入

金五百四拾七円

職員俸給

金五百四拾七円

生徒授業料

内

内

金四百五拾六円

但校長兼訓導月俸拾四円訓導八月一人此金貳百六拾四円

金百円八拾錢

但シ一人一ヶ月金七錢此人員百貳拾人

授業生、月俸五円一人三円五拾錢一人三円二人此金百七拾四円

金百拾六円貳拾錢

室附金

事務係月俸一円五拾錢一人此金拾円

但シ月賦寄附

學資収益

拾四円

金三百三拾円

但シ學資金利子

但シ小使一人一ヶ月老円五拾錢此金拾八円臨時雇夫一

書面之趣認可ス(朱書)

明治二十一年三月十三日

金三拾七円四拾錢

雜給

群馬縣知事佐藤与三代理

群馬縣書記官 渡辺 清 印

ケ月一人日当貳円四拾錢校長以下職務勉勵ノ者慰勞手当

語問会此較試験等)一ヶ月平均老円此金拾貳円

借地借家費

金三円優等生奨励費金貳円校長以下職務家費(赴任旅費)

借地借家費

但シ一ヶ月金老円

語問会此較試験等)一ヶ月平均老円此金拾貳円

借地借家費

但シ一ヶ月金老円

借地借家費

とあることから執行されたものと考えられる。

第三節 大正期の小学校

大正期における県下教育界の趨勢は、明治四十四年六月の「教育ニ関スル訓令（四大方針）」の実施に料々としていたのが実情であり、教育事象そのものも概ね、この訓令にそつて実施されていったとみることが出来る。

そこで、それらの問題に多少ふれてみよう訓令の内容は、

- 一 学令児童就学出席ノ成績ヲ良好ナラシムベシ
 - 二 小学校基本財産ノ増殖ヲ計ルベシ
 - 三 内容ノ充実ヲ有スベシ
 - 四 小学校ヲ以テ教化ノ中心タラシムベシ
- であった。

これが実際に如何に各学校におろされていったかについて巡視簿から拾つてみる。

大正元年九月十日 県視学 柳井松次郎

郡視学 桜井菊次郎

県視学ヨリ

一 教育方針ノ研究徹底ヲ望ム

本校ノ現況ヲ視テ出席ノ督励ニ努力セラレンコトヲ望ム

二 基本財産ノ件

有力ナル方法立チタリト認ムルコト能ハズ

三 社会教育ノ件

間接直接ニ成績ヲ挙グルニツキテ必要ナリ

四 内容ノ充実

甲 調育ノ方面

実践費項ノ実現ニ向ツテ共力シテ當ラレタシ

持統的努力ヲ望ム生キタル模範ヲ示スコト

乙 一般ニツイテ

準備ニツイテ十分ノ力ヲ注グベシ、直視的ニ教材ヲ取扱フベシ

教材ノ要点ヲ補足スルコトニ努ムベシ細目ト進度トノ並進ニ注意アリタシ、教案ハ更ニ応用ノ故ニ有力ニ適切ナル教材ヲ提ゲテ学習態度ニ注意散漫ノ観アリ、板

等が見られ、その実施に遺憾なきよう努めた。更に逐年の指導を列挙すると、

○大正元年十月二十二日

郡長ヨリ(石川泰三)

一 内容ノ充実ニ向ツテ努力ヲ望ム(中略)

六 青年ノ指導ニハ精神的統一ヲ計ルベク希望ス

○大正三年十二月十一日 県視学高橋朝吉(抄)

二 出席ノ成績ハ一段ノ進歩ヲ認ム

三 基本財産ノ蓄積ニ関シテハ良方ヲ工夫スベシ

○大正五年六月十五日 横尾雄弥郡長

とあり、大正期を通じてこの訓令が実施されていたことがうかがわれる。しかし、この訓令も当初の四項目から、特に形式的な出席督促に重点がおかれてきていることは推察に難くない。

また、教育の内容面については大正期が大正デモクラシーの風潮にのって自由主義教育が叫ばれだしてきたために、明治期の教育と大きく変化してきた点が指摘できる。

書ノ方法ニ工夫ヲサレ時間ヲ空費スルコトナキ様ニ簡明ニサレタシ(以下略各科毎ニツキ記述)

郡視学ヨリ

一 出席奨励ニ全力ヲ尽サレタシ

二 保護児童ニ対シ其程度ヲ教師ノ立場ヨリ調査サレタシ

(以下略)

二 就学出席ニ就キテハ高一層ノ努力ヲ望ム

○大正六年九月六七日 郡長郡視学

三 就学出席奨励ニツキテハ熱心ニ努メツツアルモ一層努力ヲ要ス

○大正十五年十月十三日 県視学、小林岳二

三 児童ノ出席奨励ニツキテハ継続的ニ努力セラレタシ

(宮小治筆誌)

明治末年における指導は形式的な施設、設備、調育面の指摘がめだら、清掃、態度、教師心得、事務処理等の問題が取り上げられている。

これに対し大正期には児童の自発活動を重んずることに指導が傾き、教授内容面に立ちいったものが目立つ。

「形式ニ拘泥スルノ教授ヲ避ケ且ツ児童ノ学習ニ万全ヲ期ス」(大正三年六月郡視学新井友吉)

「教授ハ須ク全般児童ヲ活躍セシムベシ」

(大正三年十二月高橋県視学)

「学習ノ動機ヲ惹起サレタシ」(大正五年六月狩野郡視学)

「附属小学校ト連絡シ教育ノ實際的研究ヲ行フ本日ノ如キ催ハ大イニ可」(大正六年一月狩野郡視学)

「動的教育ヲ研究シテ盛ナラシムベシ」(大正六年九月狩野郡視学)

「教育方針中ノ自己活動ノ重視、創作的活動、個性尊重ノ三項ハ現代教育

習モ児童ノ自學自習ナルコトヲ忘ルナ」(大正十二年六月荒木郡視学)

等を挙げることができ。これをもても地方の学校が統出する大正新教育の波に左右されていた様子をうかがい知ることができて興味ぶかい。

県下全般に新教育が流布されだすのは附属小、同志小の動的教育であるが、この動きが視学にすぐ影響を与え、新教育に関する形式打破、学習の動機重視」という指導となって現われ、動的教育の研究をすることを指導している。

大正六年以降は新教育運動の蒙出期で、所謂の新教育運動全校の主張を綜合した自発活動重視がうたわれている。更に施設面と関連して、大正十年に学校図書館の設置の必要が述べられているが、これはダルトンプランの流入との関連であろう。こうした動きに対して教師は「実地授業ノ研究ハ誠ニ結構ナリ」(大正十三年)と視学を喜ばせる程盛んであり「教育ニ関スル深キ研究」(大正十年)を奨励された。そして「児童ノ態度少シ自由ニ過ギハセヌカ」(大正十一

年)と思われ、自由教育が宮城小学校まで浸透してきたことをうかがい知ることができる。こうした新教育も大正末年には既に視字の指導からは姿を消しているが、これも本県における趨勢と合致している。

大正期の教育内容で特筆すべきもう一つは、体操の隆盛である。佐波郡東小学校における矢島鍾二教諭の体操は全国的にも知られ、県下全域を激流の如く席捲し、特に器械体操や固定施設を利用したこともあって、各地にこうした器具を設置させるまでになった。

宮城小では

大正三年四月 運動具置場設置

五年九月 体操器具助木ヲ運動場南東隅ニ造営ス

が見え、更に

大正三年九月十九日 乙種字事会ヲ柏川校ニ開キ矢島教諭

ノ体操講習アリ

二七・二八日 同右

十月二五日 乙種字事会ヲ本校ニ開キ矢島教諭ノ

体操講習アリ

一月一八日 柏川校同右

大正五年九月七日 部内職員体操講習会ヲ向フ四日間開

ク(柏川)

六年一月 銃置場ヲ建造ス

六月 運動場西隅ニ平行棒二間ヲ増設ス

六年九月九日 全校体操ヲ矢島教諭ノ指導ヲ受テ

一〇月一四日 部内体操連合会ヲ行フ

大正八年一月二三日ヨリ三日間柏川校ニ於テ体操講習ヲナ

ス

一〇月一九日 体操連合会ヲ柏川校ニ開ク

大正九年五月一三日 体操講習会(柏川小)

大正一一年六月二六日 同右

等の記述が見え、三年から十一年頃まで、重点的に体操指導が行なわれた。特に兵式体操の採用により銃置場の設置がみられたり、助木、平行棒の設置がみられ、教員も、こうした波によって講習会によって、矢島式体操をたたきこまれた。

このように大正期は教授内容面での激動期であり、教師もまたこうした研究に好むと好まざるとにかかわらず投げこまれて教授面での進歩は著しかったものと思われる。

一方大正期は経済界の変動も激しく、特に教員の交替もはげしかった、特にこの様態を物語るために、退職教員の年度別における推移を表示してみよう。

大正期教員交替の様相(宮小沿革誌より作成)

年 度	M四五	T二三	三三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	S二三
全教員数	二四	二四	二四	二四	二四	二五	二五	二六	二七	二七	二九	一九	二〇	二〇	二〇	二〇
退職教員数	一	一	三	三	一	二	三	五	六	五	四	八	四	三	四	四
男	〇	一	一	二	〇	〇	一	一	三	三	二	四	三	一	〇	〇
女	一	〇	二	一	一	二	二	二	三	二	二	四	四	二	三	〇
退職者平均在職年数	〇年八	一年三	二年一	二年六	〇年八	一年〇	二年九	三年〇	〇年八	〇年八	〇年七	二年五	二年四	一年八	一年二	三年五

これで見ると、大正九年以降、退職者の増加がめだつ。これを特に教員種別で見ると、代用教員がほとんどで(男子、女子別は特に傾向はない)、更に退職者の在職年数を見ると一年未満のものがめだつ。このことは当時の経済界の動向と軌を一にしている。

即ち、第一次大戦を契機にして軍需産業を中心に好景気がつづき、米価の急騰が続いた。大正五年から八年にかけては前橋では四倍強にはね上がった。(群馬県統計書)他県では米騒動がおこったところもあった。この米価の急騰につれて生活必需品の値上がりがつづき、俸給生活者の生計も圧迫されていった。更に、第一次大戦が終る大正九年

(一九二〇)には輸出が減少し、県内では製糸業を中心に経済界は大打撃を受け、十年以降も多少の好況はみられはしたものの長つづきしなかった。

この波から教員も逃れることができず、大正七年国では市町村義務教育費国庫負担法を公布し、小学校教員の給与の一部を国庫で負担しようとしたがこれでもまかないきれず、全県的に教員の退職者が相つづく状態であった。宮城小の教員動向をみるとこの間の世相をうかがい知ることができる。

学校の施設面では沿革誌によれば次のようである。

大正五年三月竣工

御真影奉安庫 一棟瓦葺

間口一間、奥行五尺、建坪八合三勺三才

御真影奉安殿輪宮、板葺、一棟

間口二間、奥行二間建坪四坪(東宮佐七翁寄附)

大正八年三月増築竣工

間口二十七間、奥行五間、建坪、百三十五坪

大正十四年六月竣工

右校舍ニ二階ヲ附加ス

桁行二十七間梁間五間

階段室桁行四間梁間三間建坪百四十七坪葺作付



大正期の卒業生と校舎

校舎は平家、女子の髪型に注意

大正十五年七月竣工

附風木造平家建切妻造一棟

桁行八間梁間二間三尺建坪二十坪

附風木造平家垂鉛葺一棟

桁行四間梁間二間三尺建坪六坪（農舎）

明治二十三年三月、県下各小中学校に御真影の下賜が令達されていたが、明治天皇が崩御され、改元と共に新兩陛下の御真影が下賜された。大正四年十一月、大正天皇即位の大礼が行なわれ、拝戴した。この御大典記念の生徒文集の中から宮城関係のものを挙げると次のようなものがある。

御大典の日

今上天皇御踐昨の御時より國民こそぞつてお待ち申した御即位の式は盛大無事に終りました、十一月十日此の日風無く空に雲無く絶好の天候で有りました、私達全校千余の生徒は双手に日の丸の国旗をひらめかしつつ、黄色く袖を垂れた田圃道をうねり歩きました。沿道の家に半紙を貼り合せ絵具にて日の丸を画きしを軒に掲げて有るを見て此れも一に國民が君を思ふ熱誠の表れであるを悟りていやが上にも感激を高めました。午後一時頃より式は始りました、静に吹く秋風に落葉はらはらと頭上に散りて諸人のえりを正さしめました。オル

ガンの音につれて起る君が代の合唱が終つたが何ともいへない荘厳な感にうたれましたがやがて三時になれば村長さんの指揮により全国の万才に和して万才を三唱した。
千古に変わりなき我が國体の尊さを祝い万世に変わりぬ皇統を祝し

天皇皇后兩陛下の御健康と御幸福とをお祈り致します

群馬縣勢多郡宮城尋常高等小学校

男児童代表 東宮満寿次

—奉祝文（小学校男）—

この御真影奉安殿は終戦まで校内の最も清浄な地として登下校時に児童が敬礼するところとなった。

一方児童数も増加した即ち大正元年から十五年に七七九名から一、一一三名へ、学級数も十四から二十学級となった。校舎の増築はこれに対処したものであり、特に二階の附設はこの頃の学校建築の一つの流行であり、後の学校建築の型がほぼ完成した。

こうして大正期には教育の内面、外容とも整備され活気ある状態を醸したとみることができよう。

附 学校管理者一覽(その二)

児童数一覽(その二)

年度	村 長	学務委員	校 長
T 二	(長岡朝太郎)	(堤 八千代)	(上野 福松)
三		5 石橋多喜次	
四			
五	5 小池 一郎	4 北爪 徳衛	11 亀井林次郎
六			
七			
八			
九	5 前原 勝馬		4 石川 淑人
一〇			
一一			
一二			
一三	5 阿久沢源吉		
一四			
一五			

年度	尋常科		高等科		合計	合計 学級数
	男	女	男	女		
二	三九	三三	一	一	七三	四
三	三九	三三	一	一	七三	四
四	三九	三三	一	一	七三	四
五	三九	三三	一	一	七三	四
六	三九	三三	一	一	七三	四
七	三九	三三	一	一	七三	四
八	三九	三三	一	一	七三	四
九	三九	三三	一	一	七三	四
一〇	三九	三三	一	一	七三	四
一一	三九	三三	一	一	七三	四
一二	三九	三三	一	一	七三	四
一三	三九	三三	一	一	七三	四
一四	三九	三三	一	一	七三	四
一五	三九	三三	一	一	七三	四

予算表 (その1)

年度	給料	雑給	需用費	修繕費他	合計	児童一人当
二	三、三三六	三〇七・〇〇	六九四・〇〇	二五五・〇〇	四、五九二・〇〇	六・二六
三	三、三三六	三一〇・〇〇	六八一・〇〇	二二〇・〇〇	四、五五七・〇〇	五・九七
四	三、三六〇	三一〇・〇〇	六七一・〇〇	二二〇・〇〇	四、五七一・〇〇	五・七七
五	三、三六〇	三二一・〇〇	六三一・〇〇	二四〇・〇〇	四、五五二・〇〇	五・四一
六	三、五四〇	三三三・〇〇	六五九・〇〇	二七四・〇〇	四、七八六・〇〇	五・五二
七	三、九四八	三六三・〇〇	九四四・〇〇	一一九・〇〇	四、三七四・〇〇	五・七五
八	五、三七六	一、四九九・〇〇	一、四〇八・〇〇	一四七・〇〇	八、四三〇・〇〇	八・五二
九	六、五六四	五、八九五・〇〇	二、一一一・〇〇	二二〇・〇〇	一四、八〇〇・〇〇	一四・四一
一〇	一、九〇四	一、二二五・六〇	一、七七〇・〇〇	一六〇・〇〇	一五、五〇九・〇〇	一〇・五二
一一	二、三一二	一、三四八・一〇	一、九〇四・三〇	一〇五・〇〇	一五、六六九・四〇	一四・六〇
一二	二、三七八・六四	一、四七七・二〇	二、二五七・〇〇	一四五・〇〇	一六、二五七・八四	一四・七一
一三	一三、六二〇	一、三九四・〇〇	二、三四二・六〇	一五五・〇〇	一七、五一一・〇〇	一五・九九
一四	一三、六二〇	一、三八二・〇〇	一、八八九・三〇	一一五・〇〇	一七、〇〇六・三〇	一五・四七
一五	一三、八三三・七九	一、三八六・〇〇	二、三七九・八七	一九五・〇〇	一七、七九四・六六	一五・九九

	記 事	県 下 記 事
二		
三		
四	一 御大典記念	群馬県教育会発足 社会教育盛んとなる
五	三 奉安殿竣工（東宮佐七翁寄附）助木設置	県内務部長遠奉安殿の葉美を成める
六	六一 鉄置場設置 平行棒設置	各地に新教育運動盛ん
七		米価急騰三「市町村義務教育費国庫負担法」
八	三 木造瓦葺平家一棟新築（間口二七間・奥行五間）この年より教員退職者多し	不景気 物価騰貴
九		
一〇	四 便所一棟渡廊下一棟附設	
一一		
一二		各地に青少年赤十字団
一三		四 郡制廃止
一四	六 大正八年校舎に（二階附加一四七坪）一四、〇〇〇円	
一五	七 農舎物置新築	青年訓練所令

第四節 昭和前期の小学校

昭和前期は前半の経済恐慌と戦時体制の確立と第二次世界大戦への突入、敗戦による終結という過程であったといえる。こうした中において、本村の教育はどんな経路をたどったのであろうか。

児童数の漸増は二十学級から三十一学級になった。この結果増築が行なわれた。

木造瓦葺二階建一棟 昭和四年十月竣工

桁行五十六間 梁間五間三尺支関付

此建坪三百九坪五合（沿革誌）

この間の事情を摘出すると次のようである。

昭和三年十二月二十五日

地目	止積	地価	代金	地主
山林	一畝十五歩	〇円一八	五五円〇〇	吉田岩吉郎
山林	二・六	〇・二六	八〇・〇〇	北爪六郎次
山林	二・二二	〇・三三	一〇〇・〇〇	前原 光男

昭和四年二月二十三日

小学校舎増築ノ件議決ス

設計者 県土木課

設計料 金五百円也

請負人 勢多郡北橋村真壁 小林浦吉

請負金額 金五万六千五百円也

工期 四月一日ヨリ十月三十日

三月十二日〜十六日

校舎整地ノ地均ヲ行フ青年団員分会員出勤

経費金四百円也支出

六月十八日 上棟式

十月十四日 竣工

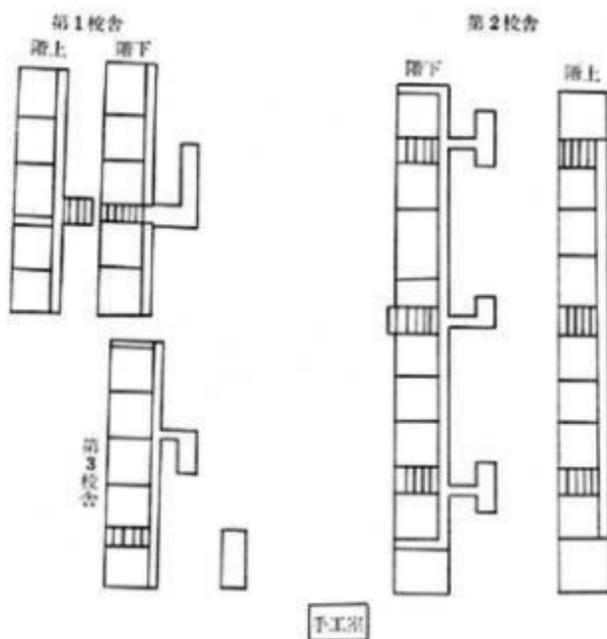
十月二二日 新校舎ニ移転使用ヲ開始ス（沿革誌）



小学校開設八十周年記念

この新校舎は県視学界をして「新校舎ノ清潔ト整頓ハ本部ハ勿論、本県ニ於テモ稀レニ見ル所ナリ」といわせ
た。(巡視簿)

この新校舎の完成によって旧校舎の取払いが行なわれ金子一正氏(苗ヶ島)に一二五〇円で売却された。



宮城尋常高等小学校校舎略図(昭和五年一月現在)

こうして昭和四十年までの校舎がすべて出そろい、学級増に対処することができた。

学校経費の面では経済不況を如実に反映して大変動があった。即ち、米価は昭和二年には一石四十円のものが、六年には十五円に下落している（県統計書）が、これが農村の窮乏につながって六年から十一年にかけて費用も減ぜざるを得ない状態であった。こうした中で学校に弁当を持参できない児童がふえ、昭和七年十一月二十一日、学校給食を開始した。こうした状態に対して視学は

時局ニ関スル件

ズ各位ハ慎重ナル態度ヲ要ス（昭和五年九月・巡視簿）

(一) 農村不況ハ学校教育上ニ悪感ヲ感ズルニ至ルヤモ計ラレ
と指導している。

十二、四年ごろ、やや持ち直したものの戦時体制の強化と共に十五年ごろから急速に窮乏の度が強まり、学校教育は庄迫されていった。

教員の給料も六年、七年ごろは減額されている。県下各地では不況のため租税収入の減少が目立つようになり、このため教員給与の支払いが過重負担となり、不払いや一部強制寄付などの措置がとられた。

一方内容面では戦時体制の強化によって精神面の強化が目だった。それらを列挙すると次のようである。

精神教育ニ十分努メラレタシ

(昭和五年九月巡視簿)

教育ハ教師其ノ人ニアリ修養ニ努メ言動ヲ慎ミ其職計ヲ自覚
シ以テ職務ニ努メラレヨ（昭和三年七月巡視簿）

時局問題ニ関スルコトハ単独ナル行為ヲ避ケヨリ学校長ノ指
揮ニ従ヘ

職員各位ハ良ク学校長ノ意志ヲ尊重シ教職ニ尽粋セヨ

就学状況ハ尋常科ノ就学ハ可ナレトモ高等科ノ入学歩合ハ都
内平均位ニ在レト男生ノ入学歩合ガ悪ク、将来農村文化ノ中
心ハ高等小学校卒業者ナル故其ノ入学歩合ニ努力セラレタイ
県ノ希望ハ尋常科九八・〇〇、高等科九九・〇〇ヲ望ム御真
摺ノ奉護ヲ一層注意シ過ナキ様ニスベシ児童ニ対スル態度動

ノ根性ヲ去リ教育愛ニ燃エテ活動セヨ（昭和六年七月巡視簿）

昭和九年には大演習が挙行されたがこれに対しての指導も当時の教育に対する考え方を知る上で参考となると思われるので、次に挙げる。

昭和九年二月八日 巡視官 木暮国広
県視学

訓示 一 今秋本県下ヲ中心ニ大演習挙行セラルルニツキ不

訓練上

敬ニ互ルガ如キコトナキヲ期ス教育内容ノ充実並ニ

各字別ニ校外指導ヲナシ学校教育ヲ家庭生活ニ及ボシ

自己ノ充実ヲ期シテ臨ムベキデアル

テ居ルノハヨイ訓練ノ効果ハ毎日ノ訓練ノ効果ノ集積

二 御真影ノ御警護並ニ火災盜難ニ対ス注意ヲ一層慎

デアル故着実ニ指導スヲコト

天皇は当時における現人神でありそれに対する配慮は並大抵ではなかつた。そうした人々の考えは、次の一文をみても明らかである。

全国小学校教員御親聞感激録群馬県（昭和九年十月）天顔に咫尺し奉り且つ優渥なる御勸諭を賜ふ、誠に恐懼感激の至りに堪へず、唯粉骨碎身育英に精進し以て皇国に赤誠を捧げ奉らん

人の子の師としてわれはあるゆゑに
今日の上き日にあひにけるかも

教員 松村春美

清浄の千代田の城の広場にて、至尊の君を伏し拝みおり、雨煙る大内山の畔にて、大詔いとも畏し

宮城尋常高小学校長 日野原 芳三郎

まのあたりすめらみかどをおろがみつ
おのづからにし頭下るも

大君のみことかしこみひたぶるに

己が努めに励まむと思ふ

春雨潤々として下り冷気膚寒き四月三日
天皇陛下親しく臨御あらせられ御親聞を賜ひ刺へ優渥なる勸諭を賜ふ、玉音いとも朗らかに瑞氣洋溢し祥雲たなびきる渡大内山にこだまして感銘心胆に深く感激只湧沓たる感涙あるのみ、今天顔に咫尺し奉る無上の光榮に浴し刺へ聞勸を拝し奉る我等教育の任にあたる者の計務益々重大なるを覚ゆ。益々国民精神を作興し至誠一貫師表たるの自分を完うして涖埃の力を致し国民教育の上に光輝あらしむべく、身を献げて

教育報國の実を掲げ宏大なる理想の万分の一に報い奉らんとす。

教員 前原 きち

他に同様な文面のものが、船津幸太郎・阿久沢福松・大崎毅夫・青木秀清・藤川多津雄・山中正章の文がのつてい

る。当時の教員が天皇に対して抱いていた感情や、教育に対する考え方をうかがうことができる。

(昭和十三年巡視簿)

国家ノ目標に向ツテ日常手段方法ヲ考ヘネバナラヌ国民教育
デアルカラ国家ノ目的ニ合フタ仕事ヲ行ヒタイ

ではより一層、国家的方向が打ち出されている。

時局ヲ充分認識シテ教育ニ当ル

群馬県学校教育刷新要項ノ具現徹底ニ努力セラレツツアル点

可ナルモ更ニ之ガ実践の部面ノ指導ニ就イテハ一層ノ留意ヲ
望ム(昭和十五年七月巡視簿)

と教育の官制化が進んでいった。

戦雲急をつげたと昭和十八年になると、県視学の指導はより一層具体的になる。

昭和十八年二月八日(月)

群馬県視学 吉田 茂 平

一 県方針並御意見

各自ノ位置使命ハ竹ノ節ノ如ク
縦ノ連繫ハ……命令即応 緊密ナル連絡
横ノカ……戦友愛

(1) 時局ノ緊迫ニ伴ヒ決戦下ニアル所謂決勝徳制即チ決戦

生活ノ全般ニ互リヨリ以上ノ苦難ヲ克服スベキ覚悟ヲ堅

持スベキデアル

学校長ヨリ一児童ニ至ルマデ滲透シテ命令一下起チ上リ
得ル時期應制デアルベキコト

(2) 保有米ノ供出強調ニツイテ現状ト覚悟

(4) 学校内ノ研究ハ単ナル学校ノミニ止マラズ民衆ニマデ
教化ヲ及ボスコト街頭進出ヘノ教育

(3) 教育決戦徳制ノ樹立最後ノ教育的良心ニヨル

(5) 節電ノ実行

例 校長ヲ中心トシテ

昭和十九年十月三日 高橋県視学

一 学校長を中心にしてやること

(前略)

国民学校と云えば国民学校の制度を指導するのではなく、村全体を指導することだ、児童も教員も学校長中心であれ、教頭教科主任係を中心に各々なしそれを中心にも全力を発揮することだ。

二 決戦即応の教育について

戦争もいよいよ決戦期になつた思想戦にも勝たねばならぬ、その中心は教育者にあるのだ、教育者として教育の仕事の尊さをよくつかんで、その地位の重大なることを考へていくこと最も大切である。教育者には物質的待遇以上の尊さのあることを常に感じていくことだ。

児童に対しては自発的に勉強させることだ、掃除、勉強、勤労仕事等のしつこくしたのしみつつやるようにさせることである「魂の教育」をすることだ。

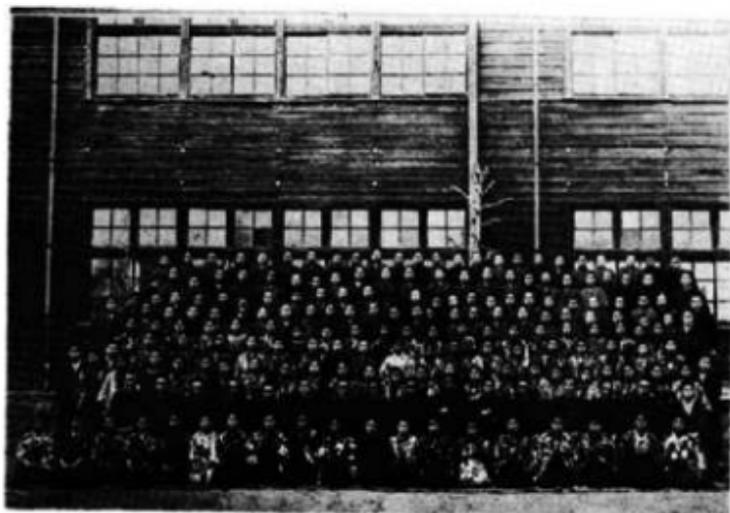
常に戦場の気分をもつてやること大切である。

三 教科内容の充実発展を計ること

授業を徹底的にやることである。今は四十分の授業だけでなく休み時間、家庭へまで手を伸ばしてやること大切である。

授業は重点中の重点をとつてそれを細り下げていくこと、鈍成することである。行事も出来るだけ簡素化すること

ある。(以下略)



昭和12年の卒業生校舎は2階建て。人数も多い。

このように見てきただけでも、昭和前期の教育は戦時体制の強化という一本の筋でつらぬかれていたとみることができよう。

即ち昭和六年の満州事変以来右翼の国家主義や軍国主義の全盛時代となり五・一五、二・二六事件等を経て次第に軍部の政治支配が露骨に現われてきた。それに歩調を合せるように国内体制も一億一心、国民精神總動員、八紘一宇等の標語や合言葉で体制の強化が図られていった。

小学生も出征家族宅への勤労奉仕、慰問文函画の発送、干草梱包どんぐり集め、桑の皮供出等、できる限りの協力を行なった。そして「欲しがりません勝つまでは」の合言葉で課業に、訓練に、作業にと大東亜戦争に協力したのである。

昭和十九年、この頃より敵の反撃が激しくなり、空襲が必至の情勢となり、東京の小学生を疎開させることになり、宮城村へも集団疎開児童を迎えることになった。所謂集団疎開である。

またこれとは別に都市の学童を田舎の縁故先に疎開させる。縁故疎開があった。縁故疎開先については一々書くことができないので、ここでは前者の集団疎開について述べることにする。

群馬県では主として、東京都王子区学童をほぼ全県的に散らしている。

宮城村関係では、苗ヶ島の金剛寺に瀬下欽栄を宿舍主に、針生幸雄を学寮長として八四名が教員二名、寮母四名と共に疎開してきた。

この集団疎開は生活の食費・燃料・借受料等一人月二十五円位で、ほかに保護者は生活費として月十円を負担した児童は常時食糧や薪炭の調達に使役され、教職員は生活物資の収集に東奔西走した。

しかし、これもすぐ終戦を迎えるところとなり、県教学課では縁故関係は別として集団疎開は即時中止することに

なり続々引き上げていった。一方縁故者の方は、戦災等で家を焼かれたりしたものもあり、保護者をなくしたものもあり、食糧事情もからんですぐには引き上げきらなかったのが実情であった。

第五節 現代の小学校

昭和後期の小学校

日本の敗戦によって終結したその結果、教育も大きな変革を余儀なくされた。

昭和二十年十月十六日（火）の巡視簿には次のように誌されている。

巡視記録（高橋県視字）

一 戦争終結と今後の教育

(一) 連合国は真の世界平和の樹立を考えている。

(二) 今の日本の教育をどうするか。

連合国は日本の文教方面に手を入れはじめた點として

は「大詔勅発と学校教育」により指示する。

1 教育の重要性が愈々加わつたこと

今までも教育は重要であつた教育者は随分苦勞し

た、今後は軍隊は解除され学校教育のみとなつた。（中

略）

・ 外国人と親しくすること。

・ 日本人としての態度を忘れないこと。

・ 皇室中心であり国家中心の教育をして世界をよくする人を作る。

・ 立派な日本人であり、立派な國際人となることが大

切である。

・ 道義を守れば世界の人々に好かれる。

・ 米國の軍隊は立派である。

2 國民の向ふべき道が詔書によつておさとしがあつ

た。

教育の目標もここにあり。

3 教科教授に格段の努力をすること。

勤労働員によつて教育がおろそかになつた、教科書の削除は連合国の指示によつて果より近く通牒を出す。

緊急なる勤労に従事すること。

・軍人援護については一層重視していくことと遺憾をい

は今までよりも盛大になせよ思想問題になるから増

産の方も農業者と連絡していくこと。

二 連合国の態度と学校教育

このように従来の徹底した軍事教育から一変して、所謂「新教育」が始められた。しかし現実には教師も生徒も同一人である、そこには多くの混乱があつたことは否めない。例えば、教科書に墨線を施すことや、「浜田弥兵衛」の取扱ひについては、国際人として扱えとか「戦争気分をもつて緊張が連続している点がいい」というような表現も見られる。

更に二十一年六月の巡視簿をみると次のような内容があり、新教育が学校におろされてくるさまをよみとることができる。

昭和二十一年六月十四日（金） 群馬県視学 福田 安蔵

一 新日本の教育方針（略）

二 実際面について

1 学校経営ニ関シテハ経営協議会ノ形式ニ依ルシ工場

1 軍国主義、極端な国家主義を取除くこと。

2 日本敗北の事実を明確にすること。

3 健全なる経済を育成すること。

4 国民に対して責任をとらせる、自由な政治をとらせる。

三 米国の教育と日本の教育

1 米国の個性教育を学べ。

2 日本人は島国根性である。

四 連駐軍と教育

1 敗戦国の民なりという卑屈な考へを持たぬこと。

2 貞操観念が少ない—青少年団について

経営トハ自ラ差異アルヲ認め、常ニ変化アルコトヲ考ヘ改善研究ニ努メルコト。

2 教育ハ環境ニ左右サレルモノデアル授業ヲナス前ニ環境ヲ整備スルコトガ肝要デアル、自発学習責任学習ヲナ

スヨウニ環境ガツクテラレテキナイノハ残念デアル、即チ
学習意欲ヲ触発スルヨウナ環境ヲツクルヨウニ

(中略)

実情ニ即サズ概念ダケダ進ンデハ不可、食糧危機ニ便
乗シテ教育サボノ傾向ガアル、個々ニ即シテ真剣ニ考へ
ネバナラス

6 学童栄養問題ニツイテ

更に昭和二十二年になると次のように誌されている。

昭和二十二年十月二十八日群馬県視学福田安藏

一 教育の場（環境）を作ること

- 1 PTAの重要性
- 2 校舎を真に活かしていく（施設・設備）
- 3 教室（備品・学習環境としての教室）

二 教育の使命

- 1 児童との接触により伸展向上は図れる。
 - 2 民主主義の教育（個人を基盤としその判断批判の重視）
 - ・講演式講話式授業は絶対不可といわれている。
 - ・自主的（自律的）学習を行う目的計画遂行反省の過程を通らすことが肝要。
- 授業面について
- 1 身についた教育をつける。児童の考える手順を考へてなす。
 - 2 学習の集団について

・個人学習を基礎としへて考えてから集団学習に入る

・集団学習は社会の緒図と考えられるに協力

民主的授業（責任学習）について

1 社会科 ・ 全体のもので参画する。

・問題を分に応じて分担させる。

・能力・個性に応じて責任を必ず荷はせる。

・責任ある学習ノート検閲。

2 人格尊重

・基本的人権を尊重

・賞讃してやり伸す

・児童作品は全部揭示してやる

以上巡視簿の中から新教育への移行をみてきたが、実際にはまだまだ多くの問題を含んでいた。御真影、勅語類の奉還、奉安殿の解体、教員適格検査、修身・国史・地理科の廃止と社会科の発足等、現場における混乱は想像を絶するものであった。

六三制教育制度の発足と小学校

宮城村国民学校は、昭和二十二年三月三十一日に公布された学校教育法の示すところに従って宮城村立宮城小学校となり（四月三十日開校式）新たに宮城村立宮城中学校の創立をみるところとなった。ここに、六三制教育が発足し



新設された小学校のスプリンクラーと体育館
(昭和45年度)



給食センター内部 (昭和40年完成)

たのである。しかし、教育界の混乱は、世相の混乱と同様に混沌たるものがあった。それが社会のおちつきと共に整備も進み、今日のような郡下随一の校舎をもち、その成果も上がってきた。以下沿革誌の中からその経過を抜粋してみることにする。

昭和二十四年 五月 一日 学校給食を実施す

二六・六・一五 宮城小学校子供信用組合設立す

二六・一〇・一 群馬県指定実験学校研究発表会開催す

概す

注 (新しい学校教育のあり方、地域社会の啓蒙等があったが、宮城小は二五・六年度にわたり学習指導に関する研究を行なった)

二七・一・二五日 学校給食県教育委員長より表彰状を受く

二七・二一 宮城村教育委員会発足す

二七・一一 木造瓦葺小使室一棟竣工

二七・一二・一七 子供信用組合知事賞を受く

二八・一一月 学制頒布八〇周年記念事業として

校歌設定校旗制定、歴代校長写真

する研究を行なった)

校歌設定校旗制定、歴代校長写真

作成す

宮城小学校々歌 作詞 斎藤玉男
作曲 井上武士

一 七つの字から集つて

一つの庭に朝の礼

直く明るくすこやかに

今日も学ぼう元気よく

二 ほこりに輝く学舎の

しずまるまどにとりのうた

校庭にバレーの白球は

赤城をしのぐ高さまで

三 直く明るくすこやかな

農村の児のそだつ場

皆の心のふるさとの

しるしは宮城小学校

新学制十周年記念式挙行 (講堂)

記念行事群馬ファイルハーモニーの

演奏

記念式典

表彰 一〇年勤続者、施設特別寄

付者 (深町隆誠・田村佐七両氏)

講演 斎藤玉男医学博士 (苗ヶ島

出身)

農繁休業を今春より全廃する

三八・一・二五

三八・七

三八・七

三九・一・二八

三九・三・二〇

三九・八・三一

一・二七

四一・一四

三九・一〇

四四・三〇

勢多郡音楽教育研究指定校研究発

表を行う

学校保健委員会発足す

林間学校創設

第一一回学校保健大会を本校で行

なわれ学校保健委員会について発

表す

文集みやぎ創刊す

新校舎起工式

学校保健委員会表彰さる (県教育

委員会)

新校舎上棟式

東京オリンピック大会見学

新校舎竣工 (福川興業施工)

整地面積二〇・八七二・五平方未

(六・三二五坪)

建物 一、七八三・二〇 坪

(五四〇・五坪)

構造 鉄筋コンクリート二階建一

部塔屋付陸屋根防水モルタル

塗

高さ 七・七 米塔上まで一・

四米費用四・四八六万円

三二・一二・五

三七・六

第七章 教 育

四〇・五・一 新校舍移転、学習開始PTA校庭

整地造園奉仕始まる

四〇・五・二九 給食センター起工式

七・三二二 赤芝林間学校創設

四〇・九・二六 完全給食開始

一一 小学校創立九十周年記念事業推進

委員会発足

村内外に募金を開始する

四〇・一一・一一 新校舎給食センター落成式

給食センター（鶴川興業施工、器

具福田屋）

建物面積二五三・七四平方米（七

（六・八九坪）

鉄筋コンクリート造平家建カラー

開板葺

器具 回転釜、ミルク二重釜、ポ

イラー、フライヤー洗濯器、

コンテナイ調理台、切断機カ

リハンヤ、皮むき機運搬車、

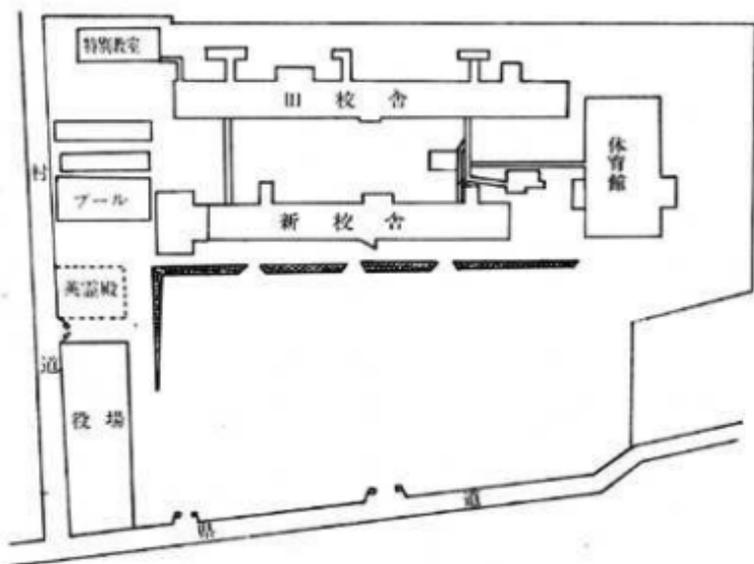
消毒機自動車

工事金 六一二万円、器具三八〇

万円計九九二万円

四一・二・一一 小学校創立九十周年記念式典挙行

校舎配置図昭和四十四年度現在



四一・四 各教室テレビ設置
県教育委員会より学力向上研究指定地区の指定を受く

四二・二一・一 付小合同訪問研究会
四三・二・二九 学力向上研究で県教育委員会より感謝状を受く

四一・四・五 プール起工式、特殊字級創設

四三・四 特殊字級増設
四四・四 体育館、小使室直直室起工

四一・五・二三 宮城村学力向上対策委員会発足
五 県教委指定(PTA家庭教育学級)

四四・九・三〇 体育館竣工(鶴川興業施工)
経費(備品共二四〇万円余 面積八〇四平方米)

四一・七・七 プール竣工プール開き

四一・七・二六 鉄筋コンクリート、鉄骨スチール
四一・二一・二三 プール体育館竣工式(鶴川興業施工)

四一・二一・二八 第四部学年別研究会開催

四五 四七・二 裏新校舎落成

四二・三・一七 特殊教育育成会創立総会

四二・一〇 除鉄除マンガン浄化槽設備竣工

学校管理者一覽(その二)

T二		三	四	五	六
5石橋喜多次		4 3		5小池 一郎	
農具置場設置 具置場設置					4北爪 徳衛
御真影季安所倉庫一棟(開口五尺外廊舎一棟(東宮佐七寄贈)) 奥行六尺					11-10-3 亀井林次郎
肋木設置 銃置場設置 平行棒 堆肥舎					7 6 1 9 4

七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	S二	三	四	五	六	七
		5 前原 勝馬				5 阿久沢源吉				5 北爪 徳衛		11 東宮瑞一郎		
										7 北爪 井上 正作 一郎				
			4 S 4・3 石川 淑人							4 8・3 森 織衛				
3・7	5・7・2023	21 8				12 11・3・4	6・24	10 7・31	11・20	6・20	10 10・2・23			
裏山買取前原光男氏所有一段三畝四歩四一〇円	新築校舎落成ニツキ式禮了ス	萱葺校舎ヲ西方ニ移転 増築校舎起工式			大正八年校舎ノ上二階増築決議 契約請負人白石勇松 工費 一四、〇〇〇円	増築校舎落成	宿直室小便室収農舎増築工事落成 旧木造校舎取払う	学校衛生研究会	手工室落成	小学校舎増築認可(三〇九・五坪二階建) 竣工 旧校舎取払イ				

二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八
4 前原英四郎			4 東宮 祐吉				3 阿久沢武雄							
					6 堤 謙一郎 天川 甚平								3 阿久沢城男	4 青木忠一郎
4 3 · 4 丸山 良象	3 22 · 4 塚越 保						3 20 · 3 中島正三郎					4 15 · 3 塩沢金重郎		4 11 · 3 日野芳三郎
	8 · 15				123 · 28	11 · 18	3	7			4 · 1			
新制教育開始	終戦 戦事教員補充	応召教員多数 学童集団疎開(金剛寺)			国民学校令 大平洋戦争始まる	青年学生連台大演習	青年学校義務制	日華事変			青年学校令		陸軍大演習舉行サル 天覽成讀品展覧会出品	

児童数一覽(その四)

年度	男	女	合計	学級数	年度	男	女	合計	学級数
二二年	五六三人	五六一人	一一二四人		三四年	七二三人	七七一	一、四九三人	二九
二三	七〇一	六七九	一、三八〇	二八	三五	六八八	七二一	一、四〇九	二八
二四	七〇三	六七七	一、三八〇	二八	三六	六八五	七一七	一、四〇二	二九
二五	六五四	六四四	一、二九八	二九	三七	六五九	六八八	一、三四七	二九
二六	六六〇	六二二	一、二八三	二九	三八	六一〇	六五八	一、二六八	二九
二七	六三三	五六二	一、一九三	二七	三九	五七四	六〇六	一、一八〇	二八
二八	六三〇	五七七	一、二〇七	二七	四〇	五三八	五四六	一、〇八四	二七
二九	六四四	六二二	一、二六六	二六	四一	四九七	五一六	一、〇一三	二六(特一)
三〇	六四八	六二一	一、二六九	二五	四二	四五八	四七七	九三五	二五(特一)
三一	六八五	六五五	一、三四〇	二五	四三	四二〇	四一六	八三六	二三(特二)
三二	七〇七	六九二	一、三九九	二六	四四	三八三	三七七	七六〇	
三三	七二〇	七四九	一、四六九	二八	四五	三七二	三六八	七四〇	

混乱の中から

歴代校長 丸山良象

昭和二十年敗戦の後はマツカーサー指令の中で教育界も混乱にあけられた。新里小学校だから、アメリカ軍教育担当の新教育についての講演があり、西部の全教員が召集されたことがあった。十一時から始まるのに会場校から「十時から講演があります」と連絡が出され、各校では九時から始まると伝えて二時間も早くから集って待つうちに十分ぐらいの簡単

な話で終わったという状態を経験したという。

私は敗戦を勢多郡東村沢入小学校長として迎えたので先の話は伝え聞いたものだが、どこでも大同小異の悲喜劇であった。

宮城小学校長には芳賀村嶺小学校から昭和二十二年に赴任した。ちょうど六三制により新制中学校発足という時期で、四月八日に新学期を迎えねばならないのに十九日になってようやく始業式を実施することができた。小学校二棟のうち、

前校舎を中学校、後校舎を小学校と分けた。なんということはない。小学校が二つに分かれて雑居している。教科書もそろわない建物は青葉部隊が使用していたあとでさんたんたるもの。工作機械や医療器具は破損し、その他ガラタと化したものが山積していた。校長としては全職員とともに新教育の勉強に当ると同時に教育教材を整備することに努めた。幸いに当時の村長前原英四郎氏は新しい国づくりは教育であると非常な熱意で学校問題を考えてくれた。何もかも不自由な時代であつただけに今でも感謝している。中学校舎も氏を中心とする宮城村民の格段の尽力により郡下でも最初に建造されたのである。

さらに忘れられないのは九月十五日にカスリン台風の襲来による大被害を受けたことである。宮城村では死者十名、流

第六節 宮城中学校

昭和二十二年、国民学校の名称がかわり、新制の小・中学校が発足することになった。所謂、六三制の実施である。ここに義務教育九ヶ年の大改革が実施されることになった。

新制の中学校設立については県下各地で大きな混乱をまきおこしたが、本村においても大きな問題であった。その第一は校舎の問題である。そこで、その間の事情を沿革誌からひろると、次のようである。

失家屋十五軒、流失田畑三百四十町歩、山林は計ることができない被害を受けた。学校もしばらく休業して勤労奉仕を続けた。私は大胡町の自宅から歩いて通勤する日が毎日続いた。道路もあれはてしまつたからである。

学制改革の新しい動きのなかで新しい人間像をえがきながら、日本人としての本当の教育を求めてゆく意欲だけは強くもつていたつもりであつたが、混乱から混乱へと続き、在職一年無為に時間が過ぎてしまつた。かえりみて残念でたまらない。

なお、私は宮城小学校長を最後に教育界の第一線を引いた。現在七十才で大胡町に住んでいる。過去をしのぶ、まだまだ将来を談じたい村友の清遊を歓迎する。

(「みやぎ」三号昭和四十一年二月発行より)

設立並名称

22・3・31 教育二法に基き新学制実施準備協議会が結成さ

れその設置基準に基いて数次に亘る協議を経て

校舎については小学校（当時は宮城村国民学

22・4・29

開校式を挙行す

(沿革誌)

初代校長、塚越保、他に教職員十三名、生徒数三九九名、九学級、この中第一学年のみが義務制というわけである。

こうして間借り状態で発足した中学校にも新校舎建築がはじまった。

昭和三年五月三十一日 新築校舎起工式挙行

九・六 新築校舎上棟式

一一・二二 新校舎へ移転

一一・二六

新校舎落成挙行、記念文化祭本日より三日間

(沿革誌)

かくして宮城中学校はその礎がきざされたのである。以来、着々と整備されていったがその様子を年を追って記述すると次のようである。

23・11 校舎総建坪五二四・二五坪 総工費五二五万円

附属建物附帯工事費 八一〇、二三五円

24・9 校庭整地（整地・石垣積） 三二八、〇〇〇円

農地一、五六〇坪

24・4 学校林設置 西伴木、向松 四町一反

25・3・25 講堂新築 総坪数九七・五坪ステージ並照明付

昭和二十四年二月二六日 村会にて議決

二五年一月五日 着工 二月一日上棟式工

事概要 一、一〇〇、〇〇〇円

25・8・20 校門新設

31・6・8 特別教室八教室坪数二九五坪（借沢工業）

一月五日着工

経費内訳（みやぎ情報）

収入の部

並木 売却代

財政調整積立金処分

四、〇九三、八九三円

一、四〇〇、〇〇〇円

村基本財産積立金処分

六〇〇、〇〇〇円

一般寄付金

五九〇、二六〇円

一時借入金

一、五〇〇、〇〇〇円

一般歳入

一、二八四、九四七円

計

九、四六九、一〇〇円

支出の部

整地関係請費

五三五、〇〇〇円

請負金

八〇、一八〇、〇〇円

設計変更分

二二〇、〇〇〇円

電気工事金

一九八、〇〇〇円

設計監査料

一六〇、〇〇〇円

校用備品代

一九八、一〇〇円

雑費

一五〇、〇〇〇円

計

九、四六九、一〇〇円

32・11・1 講堂移転

四七五、〇〇〇円

36・5・11 三教室渡廊下八六坪

二、七〇〇、〇〇〇円

37・6 技術室

六十坪

41・11・20 体育館

一、二六〇、〇〇〇円

面積 一、四四七・〇二平方メートル

(四三七・七二坪)

工費 三・七七三万六九五円

寄附金二〇〇万円

42・4・11 松苗植林 黒松一万本(二町歩)

現在進行中のものは、校地西に五十米プール建設計画で四十六年度着工の手定である。

次に、沿革誌の中から各年度における主要事項を抽出して

みると次のようである。

沿革誌抄

72・10・16 第一回秋季大運動会実施

23・12・20 校章パッチ制定

24・3・15 生徒会誌「宮城」創刊

24・4・28 学校植林実施

24・7・11 学校給食開始

24・9・30 「学校経営と理科教育研究会」

24・10・23 校庭開き

25・2・4 郡内中小学校合同芸能祭(群馬会館)にて女子

合唱団、郡代表となり中毛地大会に出場

「学校植林運動」(文部省初等教育局編)の資料中に本校学校林の状況紹介する。

25・3・30 学校植林実施

25・4・18 相関カリキュラム全体計画表並学習計画完成

25・8・5 群馬県教育委員会指定同中体連共催による「中学校保健体育研究会開催」「相関カリキュラム

に立脚せる本校保健体育科学習の展開」の主題

にて発表五市九部に亘る小中学校長保健主事体

育主任を集め発表す。

25・10・24

- 26・3・1 昭和二五年一月一〇日執行、群馬県教育委員会委員選挙に関する啓発宣伝並に棄権防止に力を尽しての功績顯著であつたことに對し、伊能知事及び選管より表彰を受く
- 26・4・4 桜苗記念植樹実施
- 26・5・5 理科学習気象観測所工事着工（6月完工）
- 26・10・26 「学校経営と理科教育」公開研究会実施、研究結果は「新しい中学校」27年2月号に紹介さる
- 26・12・1 本村青年学級開校式
- 27・1・15 宮城村第一回成人式舉行
- 27・4・11 学校植林経営につき、地方事務所長表彰を受く
- 28・4・20 P T A改組準備委員会 宮中P T A発足
- 28・5・13 学制頒布八十周年記念式典舉行
- 28・12・3 学校保健優良校につき県表彰を受く
- 30・5・27 航空写真撮影
- 30・12 学校増築着手
- 31・9・28 文部省全国学力テスト実施（昭和四一年度まで）
- 22・11・24 宮城中学校々歌発表
- 歌詞選定斎藤孝次、作曲井上武士
- 32・12・5 宮城村新学制十周年記念式典舉行
- 24・3・28 県指定科学教育研究校発表会
- 37・9・10 都研究指定校数学教育研究会県指定となる

年度	生 徒 数			学級数	職員数
	一 年	二 年	三 年		
三三	二二六	一四四	三九	九	一四
三二	二〇七	二〇二	九八	一〇	一八
三一	一九八	一九一	一一二	一三	一八
三〇	二六四	一九一	一九八	一三	一八
二九	一八七	二五八	一八五	一三	二二
二八	二一九	一八三	二五〇	一四	二四
二七	二二二	二二八	一七六	一四	二四
二六	二二二	二二八	一七六	一四	二四
二五	二二八	二二二	一七八	一四	二四
二四	二二七	二二二	一七八	一四	二四
二三	二二七	二二二	一七八	一四	二四
三〇	二二七	二二二	一七八	一四	二四

年度別学校規模表

- 39・10・14 オリビツタ見学
- 39・11・25 道徳教育公開研究会
- 40・3・29 校旗樹立式（阿久沢侯夫殿寄贈八万五千円）
- 41・11・16 都指定クラブ活動発表会
- 41・11・23 体育館学校プール落成記念行事体操模範演技音楽発表会
- 41・11・30 子ども銀行地方表彰を受く
- 41・12・21 第一回校内弁論大会
- 42・2 昭和四一年度優良道路愛護団体として表彰を受く

三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	年
一〇六	一〇七	八八	一二九	九六	九四	一〇二	四四	二〇	男
一〇五	一〇七	八八	一六	八九	一〇三	一〇八	五四	九	女
二二一	二二四	一七六	二四五	一八五	一九七	二一〇	九八	二九	計

卒業者一覽表

四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一
二一七	一九九	二三二	二三五	二五二	二六二	二二三	二八四	二二四	一五〇	一八三	一九三
一九九	二三二	二三五	二五二	二六一	二二三	二八三	二二四	一五〇	一八二	一九三	二一一
二三二	二三五	二五一	二六〇	二二二	二八二	二二五	一五〇	一八〇	一九一	二二〇	二二三
六四八	六六六	七一八	七四七	七三四	七六七	七三一	六五八	五五四	五二三	五八六	六二七
一六	一五	一六	一七	一七	一七	一六	一四	一二	一一	一一	一一
二八	二六	二七	二八	二七	二七	二六	二二	二〇	一九	二二	二〇

四	三	二	一	代
茂木	沢田	長沼	塚越	氏名
寅次	孝	寿郎	保	
40	22	24	22	在職年月
4.1	4.1	3.31	4.19	
	3.31	3.31	3.31	
	八	八	二年	期間
時沢小より	退職	荒砥中へ	荒砥中へ	備考

歴代学校長

四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一
〇九	三二	二四	二二	三五	〇五	八五	〇五	九三	一〇〇	二〇〇
二六	一九	三六	〇八	四五	二〇	六五	七三	九八	〇〇	〇三
二三五	二五一	二六〇	二二〇	二八〇	二二五	一五〇	一七八	一九一	二一〇	二二三

代	氏名	在任期間	期間	代	氏名	在任期間	期間
一	前原 英四郎	28・4・29	一年	八	大崎 信男	41・4・42	二年
二	神尾 平吉	29・4・31	二年	九	田島 時男	42・4・43	一年
三	樺沢 映夫	31・4・33	二年	十	阿久沢 重悦	43・4・44	一年
四	阿久沢 俊夫	33・4・34	一年	十一	宮田 善雄	44・4・45	一年
五	豊島 源之助	34・4・35	一年	十二	深沢 善安	45・4・47	二年
六	田島 清一郎	35・4・39	一年	十三	家合 英雄	47・4・47	一年
七	東宮 満寿次	39・4・41	一年				

第七節 その他

一 宮城幼稚園

- 一 設置年月日 昭和三十五年四月一日
- 二 設置場所 勢多郡宮城村鼻毛石一、五三一
- 三 設置者 松山 雷可
- 四 設立の趣旨

幼児教育の必要性和その重要性が叫ばれ全国的に幼稚園又は保育園が設立されている時期に、農村とはいえ、宮

ている。

今後、幼児教育に対する評価の高まりと共にその果す役割は大きいものがある。

二 父兄会からPTAへ

(1) 父 兄 会

家庭と学校の連絡のため、父兄会というものがあって、教育効果を挙げるのに役立っていた。

宮城村における父兄会の記録が最初に見えるのは、明治三十七年のことである。

明治三十七年六月一日 尋常第一学年児童父兄会ヲ本校舎ニ

根岸郡視学・前原村長・本校職員一同出席ス

開ク

これでも、出席者からみて相当重視されたものの如く考えられる。尚これより先三十六年の頃をみると「家庭教育の榮」なる冊子の編さんにかかっていることから、この頃、家庭教育の重要性が叫ばれたのかもしれない。

明治三十六年一月廿二日 委員五名（川口嘉吉・高島房次郎

編纂ス

・遠藤宗作・内田忠政・伊東保乃磨）ヲ携ヒ家庭教育ノ榮

とあり、粕川・大胡・新里・宮城四ヶ村の校長がこれに当たっていることから可なり大がかりなものであったようである。

明治三十八年十一月四日 母姉会ヲ本校ニ開ク、土方女子師

百名、福田郡長牧大胡小学校長阿久沢郡會議員本村々會議

範学校教諭ノ母姉ニ対スル演説アリ、母姉ノ会スルモノ數

員諸氏ノ出席アリタリ

とあり、母姉会なるものも開会された、これはおそらく父兄会の中の対象を区切ったものであろう。それにしても尋

常科高等科合せて六百名の児童数であることからみて、数百名という出席数は一戸当になおすと一名以上に及ぶ数であり、その関心の深さがうかがわれる。

以下関連する事項を沿革誌から摘出してみることにする。

明治三十九年一月二十六日 午後二時ヨリ父兄母姉会ヲ開ク

会スルモノ五百余名、金森通倫氏ノ勸諭貯蓄談モアリタリ

明治四十年二月二十日 父兄母姉会兼生徒芸会ヲ開ク会ス

ルモノ父兄母姉等百八十余名及ビ根岸郡視学林荒砥高島月

田小学校長

明治四十年十一月二日 父兄母姉会開会羽田師範学校長ノ報

徳談根岸郡視学ノ談話アリ

明治四五年（大正元年）九月二日～十月三日（以降毎年）

大字毎ニ巡回父兄母姉会ヲ開ク

郡視学桜井氏来臨講話ヲナス

大正二年一月二十一日 大字鼻毛石村青年会主催父兄母姉会

ヲ開ク

大正三年三月四日～四月一日 大字毎ニ父兄母姉会開会

大正四年二月八日～三月六日 大字毎父兄母姉会

保護者の会として学校単位のものとは大字単位のものとの二通りがある。前者は甲種保護者会であり、後者は乙種保護者会とよばれた。前述中、青年会主催というのが奇異に感じられるが次のものをみるとうなづける。

大正四年三月六日 苗ヶ島村ニ於テ父兄母姉会及児童表彰式

ヲ行フ

同 九月二十八日 大字大前田村青年会児童出席奨励会ヲ

開ク

というところからみると共催とみられる。児童出席奨励会というのは明治四十三年に出された本県教育に関する四大方針中の第一項「児童ノ就学出席ノ成績ヲ良好ナラシムベシ」という条項を根拠としたことによるものが地域で努力されたことを物語るものである。

更に後年になると次のように各大字共学芸発表会が附随したりしてくる。

大正十五年二月二十二日

柏倉村児童学芸発表会出席奨励会父兄母姉会ヲ開ク

大正十五年二月二十六日 馬場児童学芸発表会出席奨励会父

長岡慶信氏

兄弟姉会アリ、午後一時ヨリ各宗協会主催講演会アリ講師

このように乙種父兄会は農閑期に随時各大字で開会され、教育講話をきき、児童の就学出席を奨励することに努めてきた。この父兄会も、戦後PTAの発足により自然解散することになった。

(2) P T A

米国の新教育が直輸入の形で我国に入ってきて、全国一斉にPTAの組織を結成することをすすめた。日本各地での結成のために講習会が催され、各学校においては父母と協力して結成に努力し県からモデル会則を発表し、結成に助言した。

PTAとはいうまでもなく父母と教師が同じ組織の中で子供等の幸福を願ひ、学校生活を正常化させ教育が一層振興するための組織である。宮城村でもこの動きに呼応して、PTAの発足となった。

連合PTA会長

昭和二十三年五月、当初は小中連合PTAとして発足

したが、新学制の普及により小中学校の基盤が整うと、両者は独立することになった。

昭和二十八年四月二十五日、宮城村PTAの総会にお

1	六本木 小松	23・5	25・3	1年11月間
2	後藤 駒雄	25・4	27・3	2・0
3	石原 弥作	27・4	28・3	1・0

いて小中学校別のPTAが生まれた。これより先、四月二十日PTA改組準備委員会が組織され、その下工作がすすめられた。これにより、宮城小PTAが発足することになったが、会則も小中別となり、独立した。

次に宮城小PTA会則を掲げる。

勢多郡宮城村立宮城小学校父母と教師の会

〔略称宮城小学校PTA〕会則

第一章 名 称

第一条 本会は宮城村立宮城小学校父母と教師の会〔略称宮城小学校PTA〕と称する。

第二章 事務所

第二条 本会は事務所を宮城小学校におく。

第三章 目 的

第三条 本会は、父母と教師が協力して、家庭、学校、社会における心身ともに健康な児童の育成を図る。

第四章 活 動

第四条 本会は、前条の目的を達成するために次の活動をす

る。

- 一 よい父母、よい教師となるために、研修につとめる。

- 二 学校給食の充実と円滑な運営をはかる。

- 三 体育ならびに保健教育の充実をはかる。

- 四 環境、内容ともゆたかに教育が行なわれるようにつとめる。

- 五 学校、家庭、社会が一体となつて児童の生活が向上するようにつとめる。

- 六 公教育費の充実と施設設備の整備につとめる。

- 七 国際親善につとめる。

- 八 就学前教育として移行学級を開設する。

第七節 その他

第五章 方 針

第五条 本会は教育を本旨とする民主団体として次の方針にしたがつて活動する。

- 一 本会は、児童福祉のために活動する他の団体及び機関と協力する。

- 二 本会は、特定の政党や宗教にかたよることなく、またもっぱら営利を目的とするような行為は行なわない。

- 三 本会又本会役員の名で選挙に当つて候補者を推薦しない。

- 四 本会は、本会自体において、又、教育関係者との間において学校問題について討議し、またその活動を助けるために意見を具申し参考資料を提供するが、直接に学校の管理や教職員人事に干渉しない。

- 五 本会は、国及び地方公共団体の教育予算の充実を期するために努力する。

第六節 第六 章 会 則

第六条 本会の会員になることのできる者は、次のとおりである。

- 一 宮城小学校に在籍する児童の父母または、これに代る者。

- 二 宮城小学校に勤務する校長および教職員。

- 三 本村に在住し本会の趣旨に賛同する者。

第七章 会 計

第七条 本会の経費は、会費、事業収入、寄附金等による。

第八条 会費は、会員より徴集するものとしその額は総会において決定する。

第九条 会費は、左記の通りで年三回に納入することを原則とするが年一回に納めてもよい。

正会員 年三六〇円 賛助会員年 二〇〇円

第十条 本会の決算は、会計監査を経て総会に報告され、承認を得なければならぬ。

第十一条 本会の会計年度は、四月一日に始まり翌年の三月三十一日に終る。

第八章 役員及顧問

第十二条 本会の役員及び顧問は次の通りとする。

一 会長 一名

二 副会長 二名(男・女)

三 書記 二名(教師一名)

四 会計 二名(教師一名)

役員任期は一年とするただし再選を妨げない。

五 顧問は、校長、村長、議長、委員長、教育委員長、農業者協同組合長、体育協会会長及び本会の功勞者

第十三条 役員選挙及び就任は左の通り行なわれる。

一 各大字(支部)より三名ずつ計二十一名、教師の中から三名総計二十四名の委員からなる役員候補者推薦委員会をつくる。

二 役員候補者推薦委員会によつて推薦された役員候補者は、四月の総会にはかり決定される。

第十四条 役員任期は次の通りである。

一 会長は、総会及び本会の企画委員会その他各種の集會を招集し、議長となり、会務を司る。

会長または会長によつて指名あるいは任命されたものは必要ある場合諸種の会合に本会の代表者として出席する。

二 副会長は、会長を補任し会長に事故ある時はその職務を代行する。

三 書記は、会長の指示によつて記録し通信書類保管その他会務を司る。

四 会計は、本会の会計事務を処理する。

第九章 会計監査

第十五条 この会の経理を監査する為三名の会計監査委員会をおく。

第十六条 会計監査委員は、役員候補者推薦委員会で推薦し、総会の承認を求めらる。

第十七条 会計監査委員は、年度末会計監査を行ない、なお必要に応じて臨時会計監査を行なう。

第十八条 会計監査委員の任期は一年とする。

第十章 総 会

第十九条 総会は、全会員をもつて構成され、この会の最高

決議機関である。

第二十条 総会は、定時総会と臨時総会とする。

第二十一条 定期総会は、四月に開催し、次の事項を行なう。

- 一 前年度の事業、会計、会計監査報告と承認
- 二 新役員、会計監査委員の選出
- 三 新年度の事業計画と収支予算の審議
- 四 規約改正等

第二十二条 企画委員会が必要と認めた場合または全会員の五分の一以上の要求のあつた場合には臨時総会を招集する。

第二十三条 総会の定員数は、会員の十分の一とする、決議は出席者の過半数の同意を必要とする。

第十一章 企画委員会

第二十四条 企画委員会は、次の者によつて構成され、この会運営に当つての種々の企画立案をするともに総会に提出する議案を調整する。

本部長 七名 学長 支部長 八名（柏倉二名）
各部長 六名 計 二十二名

第二十五条 企画委員会は、会長が必要と認めたとき開催する。

第二十六条 企画委員会の議事は、出席者の過半数で決する。

第十二章 部会

第二十七条 本会は、第三条の目的を達するために左の部会を置く。

- 一 研究部会
- 二 給食部会
- 三 保健体育部会
- 四 文化部会
- 五 補導部会
- 六 学年委員部会

第二十八条 各部会は、必要に応じ随時開催され各部長が議長となる。

第二十九条 各部会の任務及び構成は、細則に定める。

第十一章 支部

第三十条 本会は、会の円滑なる運営を期するために各大字に支部を置く。

第三十一条 支部には、支部規約を設ける。

第十二章 改正

第三十二条 本規約は、総会において出席の三分の二以上の賛成により改正することができる。

第十三章 連絡協議会

第三十三条 小中学校PTAの連絡協調を図るため連絡協議会を随時開く。

総則

第一条 本則第十二章、第二十七条の部会は、次の通り構成される。

一 学年委員部会を除くすべての部会は、各支部役員及び教職員をもつて同数を原則として構成する。

二 学年委員部会は、各学年正副委員長及び各学年主任をもつて構成する。なお、各学年委員部会は、各学年学年委員、学年教師全員をもつて構成する。学年委員は各学級男二名、女二名の委員からなる。

第二条 各部会の任務は、次の通りである。

一 研修部会は「本則第四章第四条活動」にそい父母教師に対する研修計画の立案と之が実施にあたる。

二 給食部会は、学校給食の充実と円滑なる運営のために協力する。

三 保健体育部会は、児童の体育ならびに保健体育の充実と保健委員会保健体育的行事の実施に協力。

四 文化部会は、教育的、文化的環境の整備と学芸的行事の実施に協力する。

この会則により会は運営されたが分離当初の組織予算及び事業をかがげると、次のようになっていた。



P T A 奉 仕 作 業



学 習 参 観

五 補導部会は、校外における児童の生活補導と特殊児童に対する助言援助に当る。

六 学年委員部会は、学習参組、教育懇談会、遠足、旅行その他学年学級の教育行事の実施に協力するとともに、各学年の連絡調整にあたる。

本規約は、昭和四十年四月十七日より施行する。

本部役員

会長 石原 弥作
 副会長 深沢 真澄
 同 吉川 はな
 書記 松村 信雄
 会計 桜井 みち

委員会

企画委員
 成人教育委員
 学校給食委員
 保健体育委員会
 文化委員会
 会計監査委員

◎行事と予算

○成人教育委員会

映画会(年三回)

講演 演 会

○学校給食委員会

大豆、大根馬鈴薯集荷

給食状況視察

○保健体育委員会

運動 会

駆虫剤服用

トラホーム洗眼

遠足旅行に参加用車購入

○文化委員会

学芸発表会

図書実経営協力

聴覚教具購入

第七節 その他

三〇、〇〇〇円

二五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

一、〇〇〇円

九、〇〇〇円

二、〇〇〇円

三五、〇〇〇円

七、〇〇〇円

二五、〇〇〇円

二、〇〇〇円

五五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

一四、〇〇〇円

文化面の高揚

学制頒布八十周年記念行事参加

村文化祭児童文化展補助

小鳥巣箱

これを最近のものと比較するため四十六年度のもの
次に掲げる。

一〇、〇〇〇円

四、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

二、〇〇〇円

昭和四十六年度PTA事業計画

◇ PTAの運営方針

一 よりよき家庭を築くための会員個々の実践活動の強化

二 PTA会員相互の連帯性を育てる。

三 地域環境の改善のため対村関係としてPTAの力を発
揚する。

四 PTAの主体性の確立

◇ 努力 点

一 村への働きかけ

○ 河原(二重橋間)に歩道の設置促進

○ 子どもの遊び場の確保推進

○ 危険物を含むゴミ処理対策の促進

二 研修関係

○ 講演会は必要度の高まりにより目的に行う。

○ 研修視察は職員を含めて日帰りで実施する。

○ 学年、学校研修のあとレクリエーションも計画実施
する。

三 文化活動

- 白球発行を教育上の問題点に視点を合せて年三回行う。

○ 文集「親の目の芽」の発行

- P T A 図書閲覧コーナーを設置して、P T A 圖書の利用をはかる。

四 P T A 組織

実践（本文欠）により専門部を統廃合する企画運営に関係すること広報活動に関することは本部企画委員会の仕事として統合する。

P T A 活動を「支部活動」「学年活動」「本部活動」に分ける。

月	本部 企画委員会	支 部	学 年
四月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 総会教職員歓迎会 ・ 講演会「家庭における性教育」 ・ 年間街頭補導 ・ 企画委員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第一回学習参観
五月	<ul style="list-style-type: none"> ・ P T A 役員歓迎会 ・ 指導者研修会 ・ 図書目録作成図書貸出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学年委員総会 ・ 修学旅行付添 ・ 奉仕作業懇談会
六月	<ul style="list-style-type: none"> ・ プール開き ・ 企画委員会 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第二回学習参観（五・六校時） ・ 学級懇談
七月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 白球発行 ・ プール監督 ・ 図書貸出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食費徴収 ・ 会費徴収 ・ 大字補導パトロール 	<ul style="list-style-type: none"> ・ プール監督
八月	<ul style="list-style-type: none"> ・ プール監督 ・ 図書貸出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 給食費徴収 ・ 大字補導パトロール ・ 特殊教育育成費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・ プール監督 ・ 個別懇談会

九月	<ul style="list-style-type: none"> ・企画委員会 ・環境整備 ・プール納め水泳大会 ・運動会協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・第三回学習参観 ・学年研修
一〇月	<ul style="list-style-type: none"> ・企画委員会 ・図書貸出し 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 	
十一月	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会協力 ・図書貸出し ・研修旅行 ・白球発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 ・会費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会協力
十二月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内かけ足大会 ・図書貸出し ・文集「親の日・子の芽」原稿募集 ・校舎改築関係 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 ・冬季大字補導パトロール 	<ul style="list-style-type: none"> ・第四回学習参観 ・学級懇談会
一月	<ul style="list-style-type: none"> ・企画委員会 ・図書貸出し ・「親の日・子の芽」発行 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 	
二月	<ul style="list-style-type: none"> ・本部役員推せん会 ・全体研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 	
三月	<ul style="list-style-type: none"> ・企画委員会 ・奉仕作業 ・PTA連合会 	<ul style="list-style-type: none"> ・給食費徴収 	<ul style="list-style-type: none"> ・第五回学習参観 ・学年委員懇談会

昭和四十六年度宮城小学校PTA予算

一 収入の部

四〇八、四九六円

内訳 会費(見) 二九九、四〇〇円(六〇〇×四九九)

＊ (職) 一五、六〇〇円(六〇〇×二六)

繰越金 九一、四九六
予金利子 二、〇〇〇

二 支出の部

四〇八、四九六円

これを最近のものと比較すると次のようになる。

宮小歴代PTA会長

代	氏名	年 度	代	氏名	年 度
一	深 沢 真 澄	三一・三二	六	深 沢 宏 一	四〇・四一
二	松 村 信 雄	三三・三四	七	前 原 俣 一	四二
三	井 上 勝 次	三五・三六	八	天 川 豊 治	四三・四四
四	金 子 宏	三七・三八	九	田 島 道 則	四五・四六
五	阿 久 沢 重 悦	三九	十	六 本 木 太	四七



表 彰 状

群馬県勢多宮郡城村立
宮城小学校PTA
貴団体は会員の熱意と
協力によりすぐれたP
TA活動を行ない顕著
な業績をあげられまし
たよつてこれを表彰い
たします
昭和四五年八月二四日
文部大臣 薄尾弘吉

本PTAは会則にのっとり幾多の活動をしてきたが
諸会議、父母と教師の懇談、学校参観、行事協力、
勤労奉仕、教育懇談会、学校施設、設備の補助、給食
援助、研究費補助、視察旅行等多岐にわたっている。

この間、父親学級（昭和三十八年）の開設、郡PT
A連絡協議会より表彰（昭和三十八年）県PTA協議
会より表彰（同年）PTA問題別研修会開催、文集
「親の目・子の芽」創刊（昭和四十二年）家庭教育学
級文部省指定研究（昭和四十二年）PTA県教育委員
会表彰（昭和四十三年）文部大臣表彰（昭和四十三
年）を受けた。

近年では特に成人教育分野に力をいれ、家庭教育学級、広報活動（機関誌白球の発行）研修会、地域学習会等にみるべきものがある。

三 学務委員制度から教育委員会へ

学制発足当時から教育行政の組織をみると、大学区に普学局をおき、各中学区（本村は第十八番中学区）に学区取締を、小学区に学校保護役（学校世話役）を置いた。

学区取締は各中学区に数名が置かれ、本村の場合は水沼村の星野耕作が担当していた。就学督励、学校設立及び保護、教員、保護者の監督、学校財政の運用等を管掌した。

学校保護役は各小学区毎におかれ、各区で選ばれ、学区取締及び区戸長と相和して学校維持運営等一切の学務を担当した。本村の場合は鼻毛石学校の保護役、高橋新三郎が選出され、明治八年五月には東宮佐七が苗ヶ島校のそれに選任された。（以下各期末年表参照）

次いで十二年九月「教育令」が出され教育の地方分権主義から従来の保護役と学区取締の職務権限を合せた学務委員制度が発足した。本村では初代学務委員として明治十三年二月、斉藤多須久（人物の項参照）が、三校兼務で任命された。以来、学務委員会制度の発足まで存続した。しかし、その職務は学校教育の質的変遷と共に変化していった。当初の学校の設営、新築、教則の制定、教員の任免、学令児童調査、就学督励、各種試験の受験生調査、学費予算の立案、学校財産、教具購入等、事務、人事、教育内容、教育財政に及ぶ全般から次第に教育関係事務、教育財政に関するものに権限がせめられていった。その人名について各期末の年表を参照されたい。

昭和二十三年十一月法律（教育委員会法）により群馬県教育委員会が発足し、それについて昭和二十七年十一月、全

国の市町村に教育委員会が設置されることになった。本村でも公選の教育委員が選出された。昭和二十八年四月からは教育長は教育長免許状所有者でなければならぬという規定から小中学校長が兼任することになった。その後三十一年には任命制にかわり、以来今日まで存続してきている。次にその氏名を挙げることにする。

宮城村教育委員会

職名	氏名	在職期間	在任期間	備考
教育委員長	後藤 元	二七・一一～三〇・四	二年六ヶ月	村議会選出委員
教育委員	大崎 元	二七・一一～三一・九	三・一一	
同	前原 元	二七・一一～二八・四	二・六	
同	北原 福	二七・一一～二八・三	二・五	
同	前原 福	二七・一一～二八・三	二・五	
同	金子 一	二七・一一～二八・三	二・五	
同	松村 春	二八・四～三一・三	三・〇	村議選立候補のため辞職
教育長	前原 春	二八・四～三一・三	三・〇	小学校長
教育委員長	前原 春	二八・四～三一・三	三・〇	小学校長
教育委員	長沼 寿	三一・四～三一・三	三・〇	中学校長
教育委員	北爪 福	三一・四～三一・三	三・〇	三年委員
教育委員	金子 一	三一・四～三一・三	三・〇	四年委員
教育委員	大崎 元	三一・四～三一・三	三・〇	一年委員
教育委員	前原 元	三一・四～三一・三	三・〇	二年委員
教育委員	田村 元	三一・四～三一・三	三・〇	四年委員
教育委員	阿久沢 元	三一・四～三一・三	三・〇	二年委員
教育委員	阿久沢 元	三一・四～三一・三	三・〇	四年委員
教育委員	中村 元	三一・四～三一・三	三・〇	二年委員

町田 甚太男	三四・一〇〇	三八・九	四・〇	四年委員
都丸 力男	三五・一〇〇	四〇・九	五・〇	四年委員
榑沢 映	三七・一〇〇	三九・一	二・四	死亡
田島 清一郎	三八・五			
北爪 一六輔	三八・一〇〇			
前原 鶴三郎	三九・二		一・八	
都丸 力郎	三九・二	四〇・九		
田島 清一郎	三九・一〇〇			
星野 政次	三九・一〇〇			
井上 政次	四〇・一〇〇			
星野 政次	四〇・一〇〇			
教育委員長	四三・一〇〇			

この市町村教育委員会の職務は市町村教育行政全般にわたる責任であり、小中学校教職員の人事権も全く県教委より移管された。現在は管下小中学校の管理、監督と社会教育（婦人会、青年団等）の面まで幅広い活動を行なっている。

第八節 社会教育

一 青年会

宮城村における青年会の発足は明治二十年頃にさかのぼることができる。即ち

鼻毛石青年研究会（鼻毛石村）明二二創立 演説会討論会
 青年共和会（苗ヶ島村）同期 創立 演説会討論会
 （群馬県青年史）

があつたという。これらの実態については資料を欠くので詳細は不明であるが、当時の風潮を反映して時局に対して目を向けた演説会や討論会がその活動の主なものであつたらしい。

こうした会が次第に各地にも結成され、青年の修養が叫ばれたのは明治末期である。そして活動も「夜学会」という研修を中心としたものに変化していった。

夜学会活動を最初にとり上げたのは苗ヶ島青年同志会の明治三十年であり、会員を中心として学校教師による実業を中心とした学習がすすめられていった。そこでこうした動きをひろって表示してみると、次表のようである。

名 称	創 立 年 月	明治四一会員数	活 動 等
苗ヶ島青年同志会	明治 三〇・四・	三五人	一 各期ニハ夜学会開催（四二年度 会員二五人） 一 毎年十二月ヨリ翌年三月迄夜学会開催（一八名） 二 其他実業講話会ヲナス
馬場青年同志会	〃 三四・一・一六	二五	一 毎年冬期ニハ夜学会開催（三〇名） 二 其他実業講話会ヲナス
大前田共学会	〃 三五・一〇	二八	一 毎年冬期ニハ夜学会開催（三〇名）
市之関青年同志会	〃 三七・四	二五	一 冬期ニハ夜学会開催（一〇名）
鼻毛石青年同志会	〃 三七・一・一〇	三〇	一 冬期ニハ毎年度夜学会開催（二〇名） 二 桑園二段十四歩、共同耕作

柏倉青年会	# 三九・五・六	六五	一 冬期ニハ毎年大宇青年夜学会開催（四〇名） 二 桑園四段六畝十二歩 共同耕作 三 共同作業基本金五十九日四十二錢五厘
三夜沢青年進進会	# 四二・一・一五	一一	一 冬期ニハ夜学会開催（二〇名） 二 桑園一段歩共同作業

（明治四十一年宮城村郷土誌による）

青年会の組織は全県的にみると最も早いものは利根郡利南村上沼須の上沼須協力社明治十五年ごろ消防、青年同志の懇親を目的にはじめられ、美原村交智会（南甘栗郡美原村坂原）、吹屋青年会（群馬郡吹屋村）等がこれに続いたという。（群馬馬青年史）宮城村の場合も鼻毛石村青年研究会（明治二二・一）苗ヶ島村青年共和会（？）があったとされ、演説会・討論会が事業であるという。その意味からいうと青年会の本村における発足はより以前におけるはずである。しかし、こうした青年会は自然発生的なものであるため厳密にその創立を知る資料はない。このことはまた、会の性格そのものが判然としない点に起因するのかもしれない。

しかし、明治も末年になるとこの会の性格も次第に明瞭になってくる。

このことは日清・日露戦後を契機として地域社会の改良進歩という大前提の下に基礎学科の習得、農業技術の改良を標榜するものとなり、具体的には夜学会という形をとった。

こうした動きは当然行政当局の目にとまり、こうした青年会の指導が次第に組織化されていった。即ち、明治三十八年九月の内務省地方局長通牒や、十二月の青年団体指導奨励に関する通牒で青年団の組織指導やその補助育成を促すことになった。こうした動きの中で宮城村においても青年夜学会を中心とした組織が生まれたのであろう。更に、

明治三十九年一月二十五日には県知事が各郡市長を召集して青年夜学会奨励の訓示をなしている。

こうして、年会は次に示すような規約の下で主として夜学会を通しての地域青年の研修団体としての性格を打出していったのである。

鼻毛石青年同志会規則

(一) 組織

第一条 本会ヲ鼻毛石青年同志会ト称ス

第二条 本会ノ目的ハ日常必須ノ學術ヲ研究スルニアリ

第三条 前条ノ目的ヲ達スル為本会ハ夜学ヲ開ク

第四条 本会員ハ本大字ニ住スル青年ニシテ小学校在學生以外ノモノタルベシ

第五条 前条ニ規定セル青年ハ惣テ本会員タルノ義務ヲ有ス

第六条 本会員ハ要リニ退会スルヲ許サズ

第七条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

(一) 会長一人 (二) 副会長二人 (三) 監督者七人

第八条 役員ノ選挙法ヲ定ムル左ノ如シ

(一) 会長ハ第一区長之ヲ兼任ス

(二) 副会長ハ第一区長代理有之ヲ兼任ス

(三) 監督者ハ本会員ノ父兄之ヲ選挙ス

第九条 監督者ノ任期ハ一ケ年トス

第十条 役員ノ職務ヲ定ムルコト左ノ如シ

(一) 会長副会長ハ本会一切ヲ總理シ監督者ハ会長副会長ノ指揮ヲ受ケテ会務ヲ処理ス

第八節 社会教育

(二) 役員ハ本会員平素ノ操行ヲ監督ス

(三) 役員ニ名ツツ夜学会場ニ出席シテ之ガ監督ヲナス

第十一条 役員ハ惣テ名譽職トス

第十二条 本会ノ経費ハ(以下ツ欠ク)

第十三条 本会員ニシテ会則ヲ犯シ又ハ本会ノ体面ヲ穢ス等ノ所為アル者ハ除名スルモノナリ

第十四条 本会規定ノ学科ヲ卒業シタルモノハ夜学会ノ教授員タルノ義務ヲ有ス

夜学会

第十五条 夜学会ハ毎年十二月十日ニ開会シ翌年三月十日ニ閉会ス

第十六条 学科程度ヲ分チテ甲乙丙ノ三階級トシ卒業生ノ為メニ特別科ヲ置ク

第十七条 各階級ノ程度ヲ定ムルコト左ノ如シ

甲 高等小学校第三・四学年程度

乙 高等小学校第一・二学年若クハ尋常小学校第四学年程度

丙 尋常小学校第二・三年程度

第十八条 教科目ヲ定ムルコト左ノ如シ

修身読本作文算術農業

第十九条 教科用書ハ役員會議ニ於テ之ヲ定ム

第二十条 教授時間ハ午後七時ヨリ同九時迄若クハ午後八時

ヨリ十時迄ノ二時間トス

第二十一条 休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ大祭祝日、土曜日

日曜日

第二十二条 一学期ニ於テ二回若クハ一回ノ試験ヲ行ナヒ平

均点六分以上ヲ及第トシ証書ヲ授ケス

第二十三条 学期ノ終リニ於テ平素ノ操行受字業等ヲ調査シ

賞与スルコトアルヘシ

夜学会場

第廿四条 欠席若クハ遅刻早引セントスルモノハ其事由ヲ役

員ニ申出スベシ

第廿五条 会場ニ於テハ各自一定ノ場所ニ着席スベシ

第廿六条 会員中ヨリ幹事七名ヲ互擧ス

こうした規約の下に各地で夜学会が開催され、青年の修養が成された。そこで鼻毛石村夜学会の実態を記録から探つてみよう。

明治三十七年一月十六日の会員名簿をみると、各科別の会員数は次のようになる。

第廿七条 会員ハ輪番ニ当直スベシ

第廿八条 幹事ハ会員往復ノ途中之レガ取締ヲナスベシ

第廿九条 当番幹事ハ当直員ト共ニ会場ヲ整理スベシ

第三十条 当番幹事ハ授業ノ始終ニ於テ会員一同ニ敬礼セシムベシ

第三十一条 当番幹事及当直員ハ宿直スベシ

第三十二条 会員ノ心得ベキ件左ノ如シ

一 会場勿論往復ノ途中ニ於テ高声放歌スベカラズ

二 往復ノ途中ニ於テ飯食店ニ立ち寄ルヘカラズ

三 教授中喫煙スルヲ禁ス

四 会場ニ於テ捲巻スルヲ禁ス

五 教授中席ヲ離ルヘカラズ

六 教授中雑談スベカラズ

以上 (鼻毛石区長文書)

科	人員	科目	教授者 資格	備考
別科	十六	算術・綴方 漢文 修身	北爪仙三郎(教員) 前原 藤作(教員) 北爪六郎治(別科生) 北爪仙三郎・前原 藤作(教員)	其他モ含ム
甲科	九	算術・綴方・読方 (農業入門) 修身	北爪 定吉(補助)・(別科生) 北爪六郎治(別科生) 別科と同じ	都合上ソノ任ニ当ル別甲同通
乙科	六	修身科 農業科 読方(尋読方) 算術科	北爪 柳次(別科生) 北爪六郎次(別科生) 北爪 定吉(別科生) 北爪仙三郎(教員) 北爪 定吉(別科生)	
丙科	一	実際ハ乙種ト同内容ノ学習		
計	三二	教授者長 伊東保乃磨 教授者 町田真栄	教員 二名 別科生 二名 監督者 二名	

役員組織をみると、会長は深沢要造で第一区長の兼任、副会長も区長代理飯島仙次郎であることから、この会は村の行政組織の中に位置づけられていたことがうかがわれる。幹事は七名だがこの仕事は会員往復の取締り、会場整

理、宿直等で別科の中から選ばれた。監督者は七名おり、会員の父兄がこれに当った。教授者の組織は教授者長に伊東保乃磨、(宮城小校長) 教授者町田真栄は共に教員で、その他に農業教授者として監督者から二名、別科から二名が選ばれている。

尚、この年(明治三十七年)十二月十三日のこととして教員がこの夜学会を指導することとなった。

村内青年ニ学校ヨリ関涉シテ夜学ヲ開会セシム

本年度夜学会及出席教師左ノ如シ

鼻 毛 石 北爪仙三郎・前原 藤作

市之岡柏倉 桜井 豊彰・六本木喜氏治

苗ヶ 島 上野 福松・春山福之助

馬 場 上野 福松・長岡高太郎・井上 忠二

大 前 田 井上嘉重郎

三 夜 沢 倉橋富美雄

之ヨリ先各大字ニ夜学ノ設ケアリシモ学校ヨリ関涉シテ組織
的ニ施行セシハ本年度ヲ以テ鳴矢トス (沿革誌)

この運営は会員の月謝でまかなわれ、たらくしく明治三十八年二月九日の会員名簿には甲科金拾五銭、乙科金七銭、別科三拾銭の領収印が付されて残っている。三十七年度は三十二人、三十八年度は十九名が会員に登録されているが三十七年がこの会の結成であり見込数が計上されていると考えられる。即ち実際には成績表でみると十七名がのっていることから、受講者はこれが実数とみられる。

授業内容を日誌からひろうと明治三十八年一月鼻毛石村夜学会の場合は

一月七日 土曜日 晴

一 本晩より開会ス

一 出席生 廿名

一 監督者 二名 来賓二名

一 教授者 老名 補助教授三名

一 退散十時半

一月八日 日曜日 晴 北爪

一 出席者

一 本晩ハ教室掃除ノ為ノ授業ハセズ

一 出席教授者 二名

一 退散九時

一月九日 月曜日 晴静 当直 鬼山儀三郎

北爪和四郎
松村 仁作

出席児童數 拾九名 欠席者名

黑板出来タリ

來觀者 老名 松村久作

教授者四名出席 前原 藤作・北爪 柳次

北爪 定吉・北爪仙三郎

役員改撰ス

一月貳拾七日 金曜日 雲天

出席者 拾八名 欠席四名

教授者 四名

別科 読書同甲科、算法、読書、乙読書同

退散拾時

一月二八日 土曜日 雨天

出席者 拾五名 欠席六名

教授者 一名 町田仙三郎

別科 農業 甲科農業 乙読書

退散拾時

一月參拾老日 火曜日 晴天

出席者 拾七名 欠席者四名

教授者 北爪仙太郎 前原藤作 北爪 定吉

授業 別科 算術・読書 大算盤ヲ学校ヨリ借り來ル

甲科 作文・読書

乙科 読書・読書

退散拾時

貳月老日 水曜日 晴天

出席者 貳拾名 欠席ナシ

教授者 北爪仙三郎 同 柳次 同 定吉

幻灯練習

退散十時

貳月拾老日 土曜日 晴靜

出席者 拾六名 欠席五名

授業 農業討論

補助 北爪定吉

退散拾時成リ

貳月拾參日 月曜日 晴靜

出席者 拾六名 欠席五名

試験貳時間

教授者 北爪仙三郎・前原 藤作・北爪 定吉

退散拾時

貳月拾四日 火曜日 晴天

出席者拾六名 欠席四名

試験 貳時間

教授者 二名

退散拾時

三月十日 金曜日

- | | |
|-----------------|-----------------------------|
| 一 本晚ヲ以テ閉會式ヲ行フ | 一 成績物の綴 拾九部 日誌巻部 會員名簿巻部 學習証 |
| 一 免許狀(學習証書)ヲ授ケス | 書式枚 夜學會の印老副會長へ御預ケ申ス |
| 一 成績表ヲ授ケス | 一 會長 監督者 教授者・生徒等一同出席ス |

明治三十八年度の授業日数は五拾二日であり欠席者は比較的集中して、この授業を大部分がまじめに受けている。その出席率をみると九十二%弱と良好である。

教育内容はそう明確な時間表等はないようであり特に教授者の出席に合せて内容が決定されているようである。説・書・算・修身が取り上げられているが、説方にも「農業入門」を採用していることからみても実業的傾向が強かったものと考えられる。

作文の例を掲げると、次のような文を教師が示し、それを筆字で練習し、教師が添削している。

〔拝啓陳書寒氣甚敷候御專家御一同無事ニ御座候由大變不
過之候次ニ私宅一同無事ニ暮居候間他事ながら御安意被下度
候扱面是迄自分方にて雇入置き候女子此度都合により解雇仕
置候に付き更に一名雇入度候得共宜敷き者無之候ニ付き貴殿
御近家に正直律義なる者有之候得ば御手数ながら御周旋被下
度何卒御頼み申上げ候孰尚年頃は十七八才位にて宜敷御座候
得ば重々御依頼申上候〕

試験の内容等についても不明であるが、会期中を二期に分け試験を行ない、甲乙丙で評価している。教科は修身・農業・読方・綴方算術の五科で総評も付す欄があるが評点は記入されていない。次に成績表を示すと次のようである。

成績表	学業成績					出席欠席	種目 月順	十二月	一月	二月	三月	計
	学期	修身	算術	読方	作文							
	第一期											
	第二期											
	合計											

夜学会教授内容

一・二七	金	読書	読書	算術	読書	別科	
一・二八	土	農業	農業	算術	読書	甲科	
一・三〇	月	作文	読書	算術	読書	乙科	教授者
一・三一	火	読書	読書	作文	読書		
二・一	水	算術	読書	読書	読書		
							三
							一名
							四名

(鼻毛)石夜学会日誌

高こうした夜学会は各大字で開催されていたようで日誌によれば他地区の夜学会員の参観が記録されており、しかもその際、討論が成されたという。西部夜学会の日記も三十八年一月のものを残しているが、こちらは会員数も四拾人と大世帯であり、しかも「第四回」としていることからみても宮城村における夜学会としては古いものであろう。しかし青年会の結成年度からみると該当するものがないので、自然発生的な形で開会されていたものであろうか、この他に日誌の中に「馬場夜学会員の見学」等の記録もあり、当時村内に青年夜学会が盛行していたことがわかれる。

資料

一 明治三十七年一月十七日

夜学会会員名簿

宮城村鼻毛石村

二 明治三十七年度

成績考査

宮城村鼻毛石村夜学会

三 明治三十八年一月〜三月

出席簿

鼻毛石村夜学会

四 明治三十八年正月七日

大字鼻毛石村夜学会々員名簿

五 明治三十八年正月七日

日誌

大字鼻毛石村夜学会

六 明治三十八年二月九日

夜学会会員名簿

宮城村鼻毛石村

七 明治三十八年一月(第四回)

当直日誌

宮城村西部夜学会

八 甲 科

第一期作文成績乃綴

鼻毛石村夜学会

青年夜学会は青年会活動の中では教育的に組織されたものであったが、それは民間における自然発生的な性格を有していた。しかし文部省はこの夜学会を実業教育の体系の中に組み入れるべく、明治二十六年十一月二十二日、実業補習学校規程を設けた。これは実業に従事する青少年を対象として夜学会を官制化する意図をもった。

宮城村の場合、青年夜学会自体の発足が遅れたので、この実業補習学校の設置は明治四十一年一月で宮城尋常高等小学校内に附設された。校長も小学校校長が兼任した。生徒数は男子三十六人、女子三十一人であった。

資格は尋常小学校卒業程度以上で修業年限は三年、夜学も認められた。主として男子は一定期間の夜学教授で予科、本科、高等科の三部に分かれ、修身・国語・算術・農学・理科・体操が中心で他に本科予科に進むに従って国史・地理が取上げられた。

女子は昼間冬季のみ裁縫を主として教授された。これはふつう「補習」と呼ばれて青年教育の一つの形式となった。

こうして発足した実業補習学校は内実は青年夜学会とたいして変るところはなく、男子には不評で、女子は裁縫教授に人気が集まり比較的好評であった。宮城実業補習学校では四十二年には男十六人、女四十七人という状態であった。一方青年会の組織化も次第に進み、明治四十四年八月一日には宮城村青年発会式が宮城小学校々庭で行なわれた。

(沿革誌)

このように明治末年は自然発生的な青年会がその活動を開始し、更にこうした活動に対して政治統制の手のびはじめた時代であったとみることができよう。

大正期にはいるとこの統制は一段と強化されていった。大正二年十二月「青年会則設定ノ件」によれば「本会ハ會員ノ心身ヲ修練シ共同自治ノ精神ヲ養ヒ進ンデ地方風紀ノ改良ヲ図リ公共事業ヲ遂行シ以テ奉公ノ実ヲ挙グルヲ」とした(町村青年会準則)。そして、大正三年一月十日、県は町村単位に青年会を組織することを指令した。従来、部落毎に結成されていた青年会はこうして町村単位に組みかえられていった。

これは道路修理等の土木事業を組織に請負わせることが狙いであった。依って本村の各字青年会も併合され宮城村青年会(支会七)として面目を一新して発会した。村長を会長に推戴する官制団体で爾来土木工事を事業の根幹としていった。

更に大正五年三月には県訓令により、修養を本位とする青年会の組織化が叫ばれ、陸上競技、武道、登山、見学旅行、講話会などを行ない会員の修養向上をはかった。更にこの村単位の青年会は郡連合青年会に加盟していた。そして、部長が会長になり、聖旨を奉戴し、青年の指導に努め国家の要請する方向に指導されていった。そして連合青年

会における幹部講習、青年点呼、武道大会、展覧会、競技会等への積極的に図られた。

大正期における青年会活動を沿革誌から拾うと左のようなものがある。

大正 二年 一月二二日 大字鼻毛石村青年会主催父兄母姉

会ヲ開ク

八年一〇月 四日 連合青年運動会ヲ粕川校ニ開ク

〃 三年 一月 三日 青年主催農芸品評会ヲ開ク

〃 一月 二日 県青年運動会開カル

〃 四年 九月二八日 大字大前田村青年会児童出席奨励

〃 九年 一月二八日 本年度壮丁教育開始向フ四週間

会ヲ開ク

〃 三月 七日 本村武道発会式ヲ華ゲ中島暴視学

〃 五年 二月二二日 壮丁教育終了

〃 十月二十日 民力涵養ニ関スル天野雄彦氏ノ講

〃 六年 九月二四日 青年總會ヲ開キ北爪先生ノ講演アリ

〃 話会ヲ開ク来聴者千五百名

〃 七年 一月 五日 分会青年会連合講話会ヲ本校ニ開

この内壮丁教育は明治の徴兵制から発展したものであるが、明治末年には次のような成績であった。

明治三十七年壮丁学力及び身体検査

	甲		乙	
	無教育の者	体格甲	体格甲	体格乙
宮 城	五二・九	一一・八	七・八	三〇・七
縣平均	三六・六	二五・九	八・八	二四・〇
			四・〇	八

(上野教育二〇二号)

大正四年の頃をみると「一月八日補習校開校ス壮丁教育ヲ開始ス」とあり、補習と同時に進められたものと解される。そして、四月五日に壮丁学力試験が行なわれているから、おそらく農閑期一杯をつうじて行なわれたものと考えられる。

連合青年会運動会は第一回が大正七年十一月二十四日、前橋公園広場で開会された。これは各部の予選を経た選手が各部から三十人前後ずつ集まって実施されたが、志気を鼓舞する目的であったことは言うまでもない。これらは、

軍人講話、武道会等と一連のものであった。

こうして大正期における青年会は次第に官制化され、こうした団体の指導を通して在野の子備軍を養成することに つとめていった。

更に社会教育の部で重要なことは大正期以降、盛んに行なわれた通俗教育講演会の開催である。明治四十五年から 制度化されたが実施は大正に入ってからである。これは教育会の主催で行なわれたが大正四年の講話会講師の類別をみると、一般教育、勸業、町村自治、理科実験、幻灯の五領域が設定されており、一般民衆の教化をねらったものであることは明らかである。

本村に関連したものを抽出すると

大正 三年 二月一日 勢多教育会主催通俗教育講演会ヲ

開キ清水文弥翁ノ講話アリ

大正一一年 三月一九日 通俗講話会

大正 九年一〇月二〇日 民力誦養講話 天野雄彦氏千五百

大正一三年 三月 二日 活動写真ヲ午後二時ヨリ行フ

この会も大正末期には次第に戦時色を帯び精神作興的なものや軍事的なものに変化していった。

大正十五年四月二十日青年訓練所令が出され、規定も公布され、軍事教練を昼間に学科は夜間にとという変則的なものが出てきた。宮城の場合は、この青年訓練所に充用するという形で実業補習学校が肩がわりした。軍隊教育を施し卒業者には在学期間を半年間短縮するという特典が与えられ、十六歳〜二十歳の青年が半強制的に入学させられた。

昭和九年十一月十七日、陸軍大演習の折、高崎乗附練兵場における御親閲は時勢から団員に多くの感激を与えたが、本村関係の青年団員の感激の一端を次の文からよみとることができる。

御親閲の光栄に浴して

宮城村青年団員 井上玉男

大君をまことに仰ぐ尊さに

己が務めに一しほはげまん

御親閲の光栄に浴して

宮城村青年団員 平田 参 司

菊花薫る上野の野に世界無比の聖天子を仰ぎ奉れば亦々高く
 弥々尊し、錦旗翻れば三山燦然として輝き、白日の空亦々高
 し、時昭和九年十一月十七日聖上陛下親しく乗附練兵場に玉
 歩を進めさせられかくして青年に御親閲を賜る。唯々感激の
 外なし、玉顔麗しく皇恩を垂れさせ給ふ御声徳畏れ多き此の
 光栄に塔し只管感激の極なし此の千歳一遇の極み愈々青年の
 意気は燃え、第二国民として、帝國の進歩を背負ふの覚悟又
 新なり

御親閲の光栄に浴して

宮城女子青年団 松村 し ま

昭和九年十一月十七日。此の日ここで私の終生忘ること
 の出来ぬ光栄でありました菊の香のいや高き秋日和高崎乗附
 練兵場に於て女子青年団員の一名として併も其の最前列に於
 て御親閲拝受の光栄に浴したのであります。大御影近し仰ぎ

幸り悦の歌を聞え奉れば天顔殊の外麗しく拝せられ万才三唱
 奉れば畏しくも御答礼を賜はりました石状すべからざる感激
 に胸のとどろきを禁じ得ませんでした此の一瞬ここで私の終
 生忘ることの出来得ぬよろこびです噫かかる光栄に浴した私
 は何たる幸福者でせう一つは女子青年団員たるの誇を高め、
 一つは国民たるの信念を深め今後はこの御恵に報い奉りより
 以上努力する決心です。

宮城村女子青年団員 磯田 き み

晴の御親閲拝受の出来ました事は無上の光栄であると思ひ
 ます。身にあまる光栄と、天恩厚きに感泣するばかりです。
 涙を流すこの感激こそは日本人でなければ味へない事です。
 此の日こそ日本人に生まれたるよろこびを深く感じました。
 日本国民として昭和聖代の御恵沢に浴する幸福を自覚し、よ
 りよき国民の一名として、聖恩の万分の一にも報い奉らん決
 心であります。

(御親閲感激録群馬縣昭一一・三・二五)

しばらくこの青調、実補の両校が併存の形であったが、昭和十年四月一日「青年学校令」が公布され普通科(二年)本科(男五年、女三年)研究科(一年以上)専修科(無期間)の四科が設置された。男子は軍事教練と実業教育、女子は裁縫と家事を中心とした教授が行なわれた。これが当初は義務制ではなく、昭和十四年に義務制となって充実した。

しかし昭和十八年ごろからは小学校卒業と同時に軍事工場へつとめる者がふえ、制度的には強化されたが農村の青

職員組織は主として小学校教員が当たっているが、それを表示すると次のようである。

昭和十一年度

昭和十八年度

職名	昭和十一年度		職名	昭和十八年度	
	人員	備考		人員	備考
教諭	二	本科正教員	四	本科調導	
助教諭	一	二本正専科教員	五	本科調導	
指導員	二	准教員 代用教員	四	初等科調導	
計	一六		一三		

この他に在郷軍人の指導員を中心とした、指導体制がとられていた。

こうした指導者に対し県は、講習会を実施し更に配属
 将校に対して青年学校教練科指導員を委嘱し、指導計
 画、實際指導講習会、連合演習訓練を指導させた、相馬
 ケ原で行なわれた連合演習には本村からも参加し、兵団
 遭戦追撃、退却、露営等が行なわれ実戦さながらの様相を呈した。

更に昭和十九年になると「教育ニ関スル戦時非常措置方策ニ伴ウ学徒ノ軍事強化要項」が出され「徴兵適令低下ニ
 即応セシムルタメ学校ニ於テ軍事教育ヲ強化シ一層基礎訓練ノ徹底ヲ図ル」ことになり、教練時数の増強、通修訓
 練を課することになり軍事対策はその極に対した。青年学校でもこの趨勢にのり、予備軍的性格が一層明らかにな
 った。

しかし、こうした方策もあえなく昭和二十年八月終戦を迎えるがこの間、青年たちは自主的な活動もできず官制化
 された組織の中で統一的に扱われたにすぎなかった。

戦後、世の中の混乱がしだいにしずまり、青年会活動も再組織化されることになった。青年学校は昭和二十三年三
 月三十一日廃止された。青年たちはまた青年会結成に向って立ちあがり、県連合青年団の下に支部組織も整備されて
 いった。昭和二十一年五月三十一日男女青年団統合の会として発足した青年団員に対し青年学級振興法が出され（昭
 和二十八年）これに則り本村でもそれが開設される運びとなった。

二 青年 学 級

郷土の振興と新らしい独立日本を建設するためには、次代をにやう青年を健全に育成することが極めて重要であるという見地から青年学級振興法が昭和二十八年に出された。

本村でもこれにのっとり、義務教育終了後の勤労青年に対し一般的な基礎学力と実業的知識技能の向上を期することを念願として青年学級を設置することになった。

昭和二十八年度学習計画（男子部）

一月一七日 開講式

一八日 心学講話、農村の生活改善

二四日 一般社会科、珠算

二五日 農村と労働問題家畜と疾病

三一日 一般社会科、珠算

二月 一日 自家用果樹民法と農村家庭

七日 一般社会科、珠算

八日 野菜栽培の要点

一四日 一般社会科、珠算

一五日 養蚕農業機械

二二日 一般社会科、珠算

二三日 米麦作の要点

二八日 一般社会科、珠算

三月 一日 愛国運動と青年、性の問題

七日 一般社会科、珠算

八日 土壌肥料の特性と扱い青年期と犯罪

一四日 一般社会科、珠算

一五日 平板測量

二二日 村勢一般閉講式

毎週土、日曜の昼間授業とし、土曜は午後一時より四時まで、日曜は午前九時より午後三時までとする。

尚女子部は和裁洋裁を主とし、毎週木曜の午後、華道講座及び月一回木曜午前、中料理講座を開設することになった。（宮城情報報二二号）

一方、青年の自主的研修として種々の活動があったが、次のようなものもあった。

青年団体験発表会

昭和三十三年十二月十二日午前九時より宮城中学校に於て産業部、家政部共催により開催された。

内容 農作物、畜産、生活、作業衣、料理、農機具、畜力利用、青年会活動等

青年団は一概に体育ばかりとか、遊びが多いといわれますが青年期には修養は勿論スポーツで体をきたえること精神をねることも必要であるとの見地から、体育、文化方面の活動と共に農業や生活面の青年活動に力を入れ農村青年に役立つ、生活と直結した青年団とするための一つの施策である。

(みやぎ情報六一号、昭和三十三年十二月)

こうした青年団の活動も社会の進展と農村の過疎化傾向に流され、団員の減少というはめになり、更に進学率の向上によりその存続さえ危ぶまれる現今の状況である。

三 宮城村婦人会

婦人の集団は古くからあった。それも青年会と同様自然発生的なものであり、二十二夜待とか三夜待とかがあった。

明治に入り国家的な要求から統一した婦人団体ができるようになった。然し当時は官制的なものであったため、会長は主に村の役職者が兼ねることが多かったから、実際の婦人会活動とはいえなかった。

昭和の頃になると婦人団体は戦争と結びつけられ、昭和十六年十二月以降は、「大日本国防婦人会」をつくり戦争協力体制に入った。これが終戦間ぎわには、青年団、在郷軍人会等とともに一元的組織に組み入れられ国民義勇隊となり戦争に協力することになった。

総力戦体制の強化は、婦人会においては従来の感国婦人会と国防婦人会の両者があったが昭和十七年ごろ総合され、大日本婦人会宮城支部が結成された。これは政府訓令の中にねらいが表われているので次に挙げる。

総務部長通牒

末曾有ノ難局ニ際会シ国内諸般ノ能勢ヲ確立シ高度国防国家

建設ヲ期スルハ刻下喫緊ノ要務タリ

政府ハ是ニ鑑ミ婦人団体ノ統合ヲ図リ、更ニ全国婦人ノ大同

團結ヲ期シ大日本婦人会ヲ結成セシムルコトセリ

由来国家ノ興亡ハ婦人ノ力ニ俟ツコト多シト雖モ婦人ノ使命

今日ヨリ大ナルハナク愈々皇国伝統ノ婦道ニ則リ修身齊家以

テ奉公ノ至誠ヲ効サシムルハ時艱ヲ克服シ国運ヲ伸長スルノ

要諦タリ各位ハ古趣旨ヲ体シ各々地方ノ実情ニ応ジ其ノ指導

監督宜シキヲ制シ所期ノ目的達成ニ遺憾ナキヲ期スベシ右訓

令ス

昭和十七年一月九日

(県庁文書)

これと大日本婦人会結成準備資料が出され、町村の各種団体長を顧問に連れて支部が結成された。事務所を役場内におき部落毎に班長を置き、更に隣保班毎に婦人組長を置くという一貫した軍隊組織を形成していた。

仕事としては、毛ボロの集荷、雑布抛出、慰問、千人針つくり等があり戦時中の活動は生活面、文化面の運動より軍事関係のことが大部分であった。

更に戦雲急を上げる二十年になると、各種団体を統合した国民義勇隊が結成され、この中に婦人会も統括されたが間もなく終戦を迎えることになった。

宮城村婦人会

戦後再出発した婦人会は再び生活、文化面の活動を中心に再組織されていった。

昭和二十四年四月一日、婦人の地位の向上を目ざし発足、初代会長に大崎りん氏を迎えて活動に着手することになった。以下、宮城村婦人会二十年のあゆみの中から歴代会長の回顧談を抜すいする。

初代会長 大崎りん

会は二十四年四月一日結成しました事務所は役場内でした会則の主なことを書きますと婦人の教養を高めること、役員は一年では何もできないということで、任期は二年としました。教養を高めるため名士の講話を聞き、教誨講習や料理講習を受け、小中学校の参観、各所の視察、会員作成の展示会、戦犯釈放署名運動、会員の研究発表会、各方面の研修旅行、敬老会などで、敬老会といえは少しのことがありますが、会は八十才になつた人に心をこめて作つた会員手製の袖無しを贈ることになっていました。六本木十郎さんはその敬老会が待ち遠しくて度々訪れその頃放逐に来ていた娘達を笑わせたりして楽しんでいました。

特に嬉しいことは、講和発効記念事業として一人五十円以上の貯金をすることを決めたことですそれが二十年後の今日までつづき、非常に多額に上つていくということですまた役員をつつた家庭日心の心得十ヶ条は余白に小中学校の生徒に日々の心得に関係した思いの絵をかいていただいたものを各家に配布して、その実行につとめてもらいました。

二代会長 板井美知

まず当時は会員の方々の出席をより多くすることが問題でした。忠告温泉にて研修会を開催し、生活改善その他諸問題を研究討論し、レクリエーションとして「民謡ひえつき節」を指導していただき「踊る婦人会」がここにはじまつたので

した。初めて小学校の運動会に参加したのでしたが、出場者の多いこともすこい盛況でした。

生活改善冠婚葬祭の簡素化のために花嫁衣裳をつくることを村当局に申入れ、婦人会役員も議会傍聴させていただきました、購入する事を決議していただきました。小川屋より購入し、総会の時敬老会を兼ね、花嫁のモデルとして小池洋子さん外二名をお願いして、一般村民の方々にも衣裳の披露をしました。

(その他模擬結婚式旧来の節句の三月への移行松かさりの廃止、嫁と姑の問題を取り上げた)

嫁の会の結成、女教師と手をつなぐ会結成

昭和三二・四・一〜三六・三・三一

三代 阿久沢せい

昭和三十二年度

四月 嫁の日、婦人週間行事としての講演会

五月 蚊の駆除海草類販売貯蓄増強

六月 農繁期の栄養食

七月 東京国際劇場見学

八月 蚤一人一グラム飼育

九月 敬老会戦役者墓参

一〇月 小学校運動会バザー研修会副業

十一月 母と女教師の会

十二月 防犯座談会、新生活モデル村視察

一月 受胎調節について講話と技術指導

二月 嫁の日冠婚葬祭簡素化運動

特に文部省委嘱の婦人学校を柏倉支部を指定し、有意義な講演も回を重ねて拝聴し学級生一同感激しております。又公民館設立の件も忘れることのできない問題です。

三六・三七年

四代 田島 薫

当時婦人会活動に真剣に取り組んだのは四つの問題でありました。

一 冠婚葬祭（公民館結婚）

二 食生活（料理講習）

三 台所改善（モデル村視察）

四 選挙問題（講演会）

婦人会努力目標

一 自主性の確立

二 婦人の地域性向上

三 青少年の健全育成

四 婦人学級

五 家庭教育の強化拡充

五代 北爪 英

（前略）

まづ四月下旬には、村当局と交通協会の絶大なる御援助を

いただいで耕転機の運転講習を行ひ大勢の参加者があり、二百数十名の免許証を持つ事が出来ました。

六月の末には村の行事の会議で七夕の日を婦人の夏の慰安旅行の日と定め十月十五日には前橋祭りに婦人会員が参加しました。犬吠碑の研修旅行にも多数の会員が参加して楽しい思い出を残しました。（後略）

六代会長 阿久沢 志津枝

四〇年七月 婦人消防隊の結成

四一年二月 交通協会母の会結成

父の日大会実施

四一年四月 文部省委嘱婦人学級開講

七代 中村 ヤミ

昭和四十一年度から年間開講されたのが文部省委嘱の婦人学級でした。年間五十時間の学習時間が定められて、家庭教育衣食、電気化学の学習に到るまで巾広く勉強しました。

四十三年度は更に村営婦人大学といかめしい名を頂き家庭教育生活科学、文化活動と三教室に分かれて学習を深めてきました。

四十一年に結成された婦人消防隊は消防団と一緒に防火査察を行ないました。

以上の歴代会長さんの回顧の中に婦人会の活動がしのばれる、現在は、各支部とも会員の減少が問題で、その活動

にも支障を来すようになりつつある現実には、青年会等の動きとも呼応して時代の推移を感じさせるものがある。

第九節 スポーツ

一 社会体育

(1) 昭和二〇年以前の社会体育

社会体育、すなわち、一般村民のスポーツを楽しむ姿は、第二次世界大戦が終った昭和二〇年を境として大きく変わっている。大戦後の様子は後述するが、明治から昭和二〇年までの農村におけるスポーツは、現在のように様々な種目が広く普及していたわけではなく「走」を中心とした陸上競技と、武道としての柔剣道が主体であった。

しかし、これら戦前のスポーツに関する記録は現在残っていない。そのため、くわしい様子は明らかでない。以下に記述する陸上競技関係については、当時大いに活躍された田村定吉氏からうかがったことを中心にまとめたものである。

陸上競技 明治年間の様子は明らかでないが、大正七年頃から青年を対称として、郡大会、県大会が実施されるようになり、それにもなつて村内陸上競技大会も開催された。種目は、大きく徒歩競走と耐重競走とにわかれている。徒歩競走は、八〇〇m、一二〇〇m、一六〇〇mの三種目であった。耐重競走は、一〇貫匁（九、三七五kg）の米俵をかついでの競走で、二〇〇m、四〇〇m、六〇〇mの三種目であった。二〇〇mはほとんど全部を、四〇〇mと



大正七年群馬県連合青年運動会

出場選手（前原進、深津秋三郎、大崎菊次、
深津多三郎、町田長雄、清水利喜造、
駒岡徳治）

六〇〇mは各々二〇〇mを走り、残った二〇〇mと四〇〇mを依をかついで疾走であり、走力と力のタイミングをうまくあわせなければならぬむずかしい競技であった。

これらの選手は、村の大会、宮城村、大胡町、粕川村、新里村の四ヶ村大会等において選抜され、郡大会から県大会へとすんだ。

この選手選考を兼ねた村の大会には、村の青年全員が参加し、その応援に多くの村民がくり出し、大会当日は、村民のレクリエーションの日でもあり、大会場は村民相互の社交の場でもあった。さらに、この応援は、四ヶ村大会（粕川村を会場）にも多数参加し、県大会出場選手がある場合は、バスも電車もない頃とて、朝暗いうちに村を出て、徒歩で前橋の会場（現在の前橋公園）まで出向き、応援に良い席をとって

夜明けを待つといった熱の入れようであった。

このような熱の入った応援にこたえて、活躍した選手も数多い。以下県大会に出場した人々を列記しておく。

◎徒歩競走

長岡 松雄（県優勝）

深津 多三郎（県優勝）

深津 秋三郎

大崎 菊次・前原 進

◎耐重競走

清水 利喜造（県優勝） 高橋 直次郎（県優勝）

鶴岡 徳次（県優勝） 高橋 友七

深沢 善甫 松村 良三郎

鈴木 貫次 町田 長雄

このように盛んであった大会も、大正一一年郡大会、県大会が中止されるにいたり、だんだん下火になってきたようである。しかし、村の大会はその後も続いた。その種目も、大正一三年頃から前述の二種目の他に、フィールド種目である砲丸投げ、槍投げ、円盤投げ、走り巾跳、走り高跳等が加わった。

◎神宮大会出場者

現在の国体にあたる神宮大会に出場し、活躍した人に、本山年次、北爪柳次がいる。ともに一万メートルの選手として出場した。（出場した年は不明）

これら陸上競技も、戦争への道を歩みはじめた昭和一〇年代に入ってから次第にすたれていった。代って、武道として学校教育の中で正科として位置づけられた柔剣道が盛んとなってきた。

剣道 本村の剣道は、神道流荒木派の奥義を伝える北爪家を中心にして、幕末の頃から盛んであった。

特に、明治から昭和初期にかけて、北爪信吉幸昌、北爪柳治信昌の代には自宅内に振武館と称する道場を開き、村内外の人々の剣道指導に当たった。道場での訓練は、農作業の暇になる冬季の寒げいこが中心であった。

この道場も、昭和一〇年頃、村の夜学で剣道を教科として取り入れ、青年に指導するようになってからは廃止された。

この振武館に通った人々は次のとおりである。

浅山一伝流居合

荒木流捕手

新心流居合

起証文之事

一守五常之義無益之事ニ身命不於衛ニ嗜可申候事誹他流無益之手結論問敷候

併相弟子之仲間者如何様ニ茂非を入流義之勝琳可仕候事

附り他流与出合并勝手結仕見候以御伝交の心法を貴人重人たりとも無遠慮仕合可申候事

流儀剣術居合捕手共ニ一手

成とも鹿相ニ仕間鋪候

附り流儀之儀他流与交一円相伝中間鋪候事

御赦免無之内親親子兄弟たりとも一術も要ニ相伝し間鋪候

事道場中相弟子ニ仲間相互ニ申合睦敷稽古可仕候事御閑ニ

被成候上ハ守稽古相一務可候事

附り大酒等仕喧嘩口論等仕上し申間鋪候事

対誹道江悪心ニ存間鋪候事

右之条々堅ク可相守者也若し御赦免無之内於他顯いたすニ者

鹿島香取明神惣而日本之國中大小之神祇殊ニ八幡大神、伊

豆箱根両所明神三島大神、天満大自在天神、神野各可應蒙

者也、起証文仍而如件

右流

大崎 五七郎

後見

北爪 伊惣治

大崎 兼太郎

北爪 信吉幸昌

門人

勢多郡宮城村柏倉村

鼻毛石

鼻毛石

柏倉村

鼻毛石

鼻毛石

柏倉村

鼻毛石

鼻毛石

柏倉村

北爪 一郎

北爪 多気彦

北爪 柳治

北爪 芳五郎

大崎 久実太郎

大崎 清六

北爪 秋寿

六本木 小松

大崎 寅太郎

北爪 音次郎

大崎 浅次郎

目録

目録

勢多郡宮城村鼻毛石

北爪 萩松

柏倉村

北爪台太郎

六本木友彦 明治45・4・15入門目録

六本木清重郎

入沢 松吉

小沢千代松

深沢 政道 大正2・2・1目録

鼻毛石村

北爪 国吉

北爪 瀬

北爪竹次郎 明治45・4・15入門目録

大胡町大胡

寄藤三千三 大正8・春入門

宮城村鼻毛石

北爪徳三郎 大正8・3・3入門

苗ヶ島

前原 友七 昭和2・2・10目録

柏 倉

樺沢 助雄 大正8・3・3入門

鼻毛石

深沢 善雨 昭和2目録

苗ヶ島

前原文六郎 大正8・1・1入門

鼻ヶ石

松村 茂 大正9・1・1入門

前原林太郎 大正9・1・1入門

勢多郡宮城村柏 倉

六本木静一

鼻毛石

町田喜久寿

三夜沢

市之関

柏 倉

鼻毛石

苗ヶ島

苗ヶ島

柏 倉

苗ヶ島

苗ヶ島

大胡町河原浜

宮城村苗ヶ島

鼻毛石

大胡町河原浜

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

苗ヶ島

大正9・1入門

昭和2目録

同前

大正9・1入門

大正10・1・2入門

入門

大高 茂松

北爪 保雄

北爪 豊治

北爪 豊治

阿久沢佐市郎

大崎 清

関口福十郎

小沢元三郎

星野 三次

深沢 秋良

町田甚太郎

石井儀三郎

佐藤 豊吉

住谷 富寿

江原登茂雄

八代愛之進

森下辰五郎

馬場	田村 俊吉	昭八年入門
苗ヶ島	平田福太郎	昭九年入門
鼻毛石	北爪千次郎	町田 竹男
苗ヶ島	谷川富美男	東宮潤寿次
鼻毛石	北爪 正作	
苗ヶ島	石橋喜平治	

また、北爪家に伝わる目録及び系図は次のとおりである。

一 伝流居合廻術新大目録

前敵 右足被付
 前敵 左足被付
 後敵 廻左足被付
 左眼 左足被付
 右眼 左足被付
 中廻 直立袖摺被
 身延力 柄講入威
 右七ヶ条者号修禰令伝来者也
 急圓被刀
 急速被刀

右二ヶ条者品々有口伝

○居組仕合

横間被打
 後圓被打

○柄取

品々有口伝

○居仕合一刀

付入被足
 乱留猿薙
 敵請猿薙
 中立被
 清眼留
 乘 突
 敵乗討
 丸被打
 逆被打
 右 左

○居 真

玉雲居開
 玉雲中立
 玉雲臥戌

(以上北爪柳治時代)

真身破當

破打小返

丸破打

逆手入破

逆手切

金剛退破

入破猿猴

入破打

破分入

逆手打

乱打

脱打

燕羽

突詰

突賣

中太刀一中劍

延突

一真妙劍

摺込

小太刀心練刀

半途止

第九節

スボ一ツ

右真妙劍者 乱相惣量

水月猿猴等之働甚以用

之是則心内之三誠三円一極

之本理法性真如平等大惠

大智劍觀見外用之中道正

真正流之大妙劍可鍛練術

刀也

一伝流祖

浅山一伝 一存

山崎重右衛門 祐正

蜂屋喜三郎 可安

小峯 伝七 茂吉

小峯大善院 重次

加藤志解理 正勝

関根 養甫 愛治

石綿儀八郎 富章

伏嶋喜左衛門 惟貞

北爪与市右衛門 昌信

北爪与市右衛門 義智

北爪幸之進 栄智

北爪房右衛門 雅妙

北爪与市右衛門

安与

嘉永六丑年

二月吉日

北爪由盛殿

(北爪健次氏所感)

荒木流捕手

到任教伝

荒木夢仁斎顯秀——綱森霞之輔勝重

山本嘉輔勝久——竹内九良右衛門勝吉

高橋儀右衛門森久——市坂九良右衛門吉久

向井作治郎正久——前田三良右衛門政榮

永井幸弥政実——大庭新五右衛門文祇

伏見賀左衛門惟貞——北爪与市右衛門昌信

北爪与市右衛門義智——北爪幸之進栄智

松村久藏

武教(花押)

天保六年乙未歲

二月吉日

大崎勇吉殿

(前欠)

北爪与市右衛門栄智——松村久藏武教

北爪房之進雅妙——北爪与市右衛門安与

大崎勇吉郎晚清——大崎五七郎勝晚(花押)

明治廿二年二月吉日

北爪信吉殿

○一伝流磨合剣術新大目録 後欠

○同

明治四十三年二月二日

北爪信吉幸昌より 北爪柳治宛

本暮玄義尉—北爪太郎兵士重保—北爪与市
右衛門昌信—北爪与一右衛門義知

○荒木流捕手 (後欠)

○荒木流剣術目録 北爪信吉幸昌より 北爪柳治宛

北爪幸之進榮智—阿久沢職吉郎
藤原知真

○荒木流捕手目録 (後欠)

安政三丙辰年秋八月良日

(花押)

秋葉夢相流 柔術目録

△飯筑長威入道—塚原土佐守—塚原新左衛門尉

秋葉夢相流 極意巻

(後欠)

(北爪政則氏藏)

塚原ト伝塚—原彦四郎平幹秀—安田太勝之
助重秀—木暮加兵衛尉重成—木暮勘八郎

対外試合出場者

本村剣道界にあつて、県あるいは全国大会で活躍した人は次のとおりである。特に、昭和二年の群馬県大会の青年の部においては、優勝、第二位を本村代表がとり、ともに、明治神宮大会に出場した。

秋塚 清作 昭和二年、群馬県大会にて優勝。同年十一月

明治神宮体育大会の一種目である全国青年剣道大会に、群馬県青年代表として出場。

阿久沢俊夫 昭和二年、群馬県大会にて第二位。秋塚と

ともに、明治神宮体育大会に群馬県青年代表として出場。

◎天覧武道試合出場。昭和四年一月、陸軍特別大演習御

統管のため、天皇御行幸の際、水戸市で各界代表選手による剣道御前試合が舉行された。この時、現役軍人代表として出場。(水戸歩兵第二連隊勤務中)

◎明治神宮大会出場。昭和六年十一月、全国在郷軍人統剣道大会の種目に、群馬県支部代表として出場。

なお、戦前北爪家の道場でけいこにはげんだ人々の中で、樺沢助雄、後藤市太郎、井上玉男等は、戦後、中学校でクラブ活動として剣道が復活するや学校におもむいて、生徒の指導にあたった。その成果は、郡、県大会優勝という実績にあらわれている。

(2) 戦後の社会体育

終戦直後の混乱期には、村民は自らスポーツを楽しむといった余裕はなかった。しかし、反面には、こうした混乱期に、せめてスポーツを通じてでも、さんだ人々の気持をやらわらげ、人間らしさを取り戻そうとする動きもあった。こうした動きのあらわれが、宮城村体育後援会の発足である。

体育後援会は、当時小学校に勤務していた前原直一の肝入りで、六本木小松等が設立委員となり昭和二四年に発足した。村の体育表彰規定等もつくられ、体育振興をはかろうとしたものである。村民のスポーツへの参加という面では社会情勢の面からも大きな成果は上げ得なかったが、小中学校、青年団等への資金援助がつづけられ、学校体育振興の影の力として大きな存在であった。

村の人々が、自ら体を動かし、自分たちでスポーツを楽しむようになってきたのは、戦後の混乱から立ち直り、経済的にも気持ちの上でも安定を取り戻しはじめた昭和三〇年代後半からである。

この時期に、村内体育振興の大きな推進力となったのが、宮城村体育協会である。

体育協会は、体育後援会の発展として新たにできたもので、昭和三八年四月に発足した。「村民体育の健全なる発達を図るとともに、明るい村づくりに寄与することを目的とし」（体育協定会則第二条）この目的の達成のために毎年各種の体育行事を計画、実施してきた。会の運営は、各大字、体育指導員、婦人会、青年団、小中学校長等全村的な見地から選出された理事によってなされている。

この体育協会を中核として実施された主な村内体育行事は次のとおりである。

(1) 村民体育祭

村当局、教育委員会、体育協会の三者合同主催により、毎年秋（最近は十月十日の体育の日）に実施されている。昭和三七年度に第一回大会がもたれ、四六年度で十回目をむかえることになる。競技は、鼻毛石・大前田が妙義団・柏倉・市之関・三夜沢が榛名団、苗ヶ島・馬場が赤城団とそれぞれの団にわかれ、団体対抗で得点を争い、しぜん応援にも熱が入ってくる。種目も老若男女がそれぞれ楽しめるものが工夫され、この日は、村民にとって楽しいレクリエーションの日ともなっている。

(2) 村民バレーボール大会

毎年、養蚕のあいまをみて、八月の盛夏に実施され、村民こぞってこころよい汗を流し合っている。第一回大会は昭和四二年度である。参加チームは、各地区にある稚蚕飼育所を単位としたもの（男女別）と一般とにわかれ、四三年の第二回大会には四〇チームが参加した。

この大会を通じて、ふだん運動することもない多くの人々が、スポーツの良さを味わっている。

また、この結果、村内にいわゆる「ママさんバレー」のチームが結成され、昭和四五年九月に開かれた「第三回群馬県家庭婦人バレーボール大会」には、勢多郡代表として出場、みごと県優勝の栄冠を勝ちとった。

その時のメンバーは次のとおりである。



村民バレーボール大会（於小学校庭）

北爪みのる、北爪ちかえ、北爪 政江、井上ちよ子
内山優喜枝、滝沢 君代、大塚 花江、小沢 里子

松村 茂、大崎富江、阿久沢すみ江、大崎よし江

(3) 壮年体力テスト

壮年期の村民(三〇～五九歳の男女)を対称し、自己の体力を知り、健康の保持増進に各自が努めることと、その資料を分析して村民の健康管理に資することをねらいに毎年実施され、参加者も毎回百名をこえている。

種目は、反復横とび、垂直とび、握力、ジグザグドリブル、一〇〇〇m急歩等である。

(4) 村民野球大会

村内にある各種団体、事業所の参加が多い。

(5) 尾瀬ハイキング

六月の水芭蕉が咲きはこる頃に計画されるもので、例年百余名の参加があり、借り切った観光バスは、いつも満員の盛況ぶりである。

(6) スキー・スケート教室

冬のスポーツ活動の一つ、若い人たちの参加が多い。

(7) バトミントン大会

四五年度に第一回大会を実施

この他、郡民体育祭への参加、青年団、婦人会活動への援助等その活動は多い。

いずれにしても、教育委員会、体育協会を中心とした春のハイキングから冬のスキー・スケート教室までの各季節に応じた多様な体育行事は、ふだん仕事に忙しい村民に、ほっとした安らぎの時を与え、こころよい汗を流させ、村民相互の親睦をはかる等身心両面にわたり大きな成果をあげている。

また、これら村内の体育行事の他に、郡内の各種競技にも参加している。これには、先にあげた郡民体育祭の他に、渡良瀬駅伝、勢多郡駅伝大会、県町村スピードスケート大会等がある。

スポーツ愛好会

右のような社会体育の振興にともない、最近、村内にいくつかのスポーツ愛好会が組織され、宮城村体育協会に登録されている。その主なものは次のとおりである。

- (1) 宮城村スケートクラブ
- (2) オール宮城野球部
- (3) 宮城村バレーボールクラブ
- (4) 宮城村剣道愛好会
- (5) 宮城村バトミントンクラブ

宮城村体育後援会体育協会歴代会長

体育後援会

年 度	氏 名	年 度	氏 名
昭和二八	前原 盤根	昭和三四	堤 浩一
二九	田島 清一郎	三五	村野 輝三郎
三〇	長岡 銆寿	三六	前原 清久
三一	星野 政次	三七	深沢 清安
三二	萩原 長造	三八	後藤 市太郎
三三	松村 包雄		

体育協会

年 度	氏 名	年 度	氏 名
昭和三九	新井 潤七	昭和四三	六本木 高
四〇	新井 潤七	四四	大崎 福二
四一	北爪 芳男	四五	吉田 善吉
四二	阿久沢 嘉重郎	四六	下田 徳二

体育指導員 任期二年

年 度	氏 名
昭和四一・四二	新井 調七 北爪 芳男 茂木 昭夫 北爪 一郎
〃 四三・四四	阿久沢 嘉重郎 茂木 昭夫 小堀 長夫 北爪 一郎

県大会、全国大会で活躍した人々。

◎群馬県大会優勝、昭和二五年

女子青年バレーボールチーム

青木 キヨ井上 ふみ子、相沢 和代
六本木 スマ子、松村 かね子、後藤 ハツ子
大崎 とみ子、桜井 和子、岩崎 いさ子
北爪 テル、阿久沢 春代、豊島 シズ子

◎全国青年大会出場

北爪 正二(走高跳) 昭和二八年(第二回)
北爪 テル(砲丸投) 昭和三〇年(第四回)
阿久沢 秀子(走高跳) 昭和三四年(第八回)
樺沢 きん子(短距離) 〃
堤 暁司(走高跳) 昭和三五年(第九回)
石橋 きく代(走巾跳) 〃

〃	〃
四五	大崎 福二 六本木 高 北爪 哲夫 西野 一郎
四六	大崎 福二 北爪 昭夫 西野 一郎 吉田 善吉 大崎 野一郎 小池 信衛 堤 堯司 鈴木 清 樺沢 佳夫

金子 賢太郎(砲丸投) 昭和三八年(第二回)
斎藤 誠(走高跳) 昭和四五年(第一九回)
大崎 美一
町田 節夫
高橋 進(剣道) 昭和四六年(第二〇回)
大崎 長門

◎国民体育大会(国体)出場

山本 崇夫(柔道) 昭和三三年
昭和四六年には、ハンガリーへ柔道コーチとして訪問、
国際的な活躍をしている。

◎青森—東京駅伝出場

大崎 進 青森—東京駅伝の群馬県選手団の一員
として出場。

五〇平泳ぎ	六三九	阿久沢幸江	五五・四	六
一	松村美智恵	五六・〇	六	
三	田村 穂子	五七・〇	六	
六	関口ひとみ	五八・一	六	
二	六年男子	二・五一・一	六	
三	六年女子	二・五五・八	六	
二〇〇mリレー				

びとっている。

その成果は、毎年七月下旬～八月上旬にかけて開かれる郡大会及び県大会において発揮される。本村中学校も、これらの大会で、開校以来幾多のかがやかしい成果をあげてきた。また、昭和四五年からは、中学生の全国大会も開催されているが、四六年度には、女子テニス個人戦で県下二位の成績をおさめた北爪・清水組が県代表として関東大会に出場した。

以下、昭和二二年度からの成績を列挙しておく。

昭和二二年度

22・ 野球部が第四部大会に優勝したが県大会に直結

する組織がなかった。

昭和二三年度

23・ 7・17 女子バレー部 都優勝

昭和二四年度

24・ 9・11 北爪 節子 砲丸投 県第二位

町田平四郎 四〇〇米 県第四位

昭和二七年度

27・ 7・20 男子バスケット部 都優勝

男子バレー部 都準優勝

男子テニス部 都優勝

27・ 8・ 8 男子バスケット部 県第三位

27・ 9・ 7 陸上 男子 都準優勝

隊上 総合 都準優勝

27・ 9・21 前原善一 走幅跳、三段跳 県第四位

中 学 校

中学校では、授業による体育指導の他にクラブ活動がある。生徒は、それぞれ自分の得意とする運動部に入り、毎日の活動を通じて体力と技術の向上にはげみ、仲間とのふれ合いの中で、人として必要な様々なものを学

町田勝次 棒高跳 県第三位
 阿久沢秀子 八〇mハードル 県第三位
 駅 伝 郡優勝

27・11・22
 27・12・6 駅 伝 県第一二位

昭和二八年度
 28・7・18 女子バスケット部 郡準優勝
 28・9・6 陸上 男子 郡優勝

陸上 女子 郡優勝
 陸上 総合 郡優勝

28・9・27 石原恵二 一、五〇〇m 県第五位
 28・11・19 駅 伝 郡優勝

28・12・5 駅 伝 県第四位
 昭和二九年度

29・7・17 男子バスケット部 郡優勝
 女子バスケット部 郡優勝
 女子バレー部 郡優勝

29・8・6 女子バスケット部 県第三位
 29・9・11 陸上 女子 郡優勝

陸上 総合 郡優勝
 後藤タカ子 砲丸投 県優勝

29・10・31 阿久沢秀子 走高跳 県優勝
 四〇〇mリレー(女子) 県第六位

30・7・26 女子バレー部 郡優勝
 女子バスケット部 郡優勝
 女子テニス部 郡優勝

30・8・6 女子バスケット部 県優勝
 30・8・28 後藤せつ子 走幅跳 NHK放送陸上 県優勝

井上奈美江 砲丸投 県優勝
 四〇〇mリレー(女子) 県優勝

30・9・10 陸上 男子 郡優勝
 陸上 女子 郡優勝

陸上 総合 郡優勝
 山下 正 棒高跳 県第四位

30・11・6 六本木みなる 二〇〇m 県第四位
 30・11・20 駅 伝 郡準優勝

昭和三一年度
 31・7・26 女子バスケット部 郡優勝
 女子バレー部 郡準優勝

31・8・6 女子バスケット部 県第三位
 31・8・26 大崎博夫 砲丸投 NHK放送陸上 県優勝

六本木みなる 二〇〇m 県優勝
 31・9・8 陸上 男子 郡優勝

陸上 女子 郡優勝
 陸上 総合 郡優勝

31・10・28 大崎博夫 一一〇mハードル 県優勝

木村マサ 走高跳

昭和三二年度

32・7・21 男子バスケット部

女子バスケット部

ソフト部

32・8・5 女子バスケット部

32・9・14 陸上 女子

32・10・27 前原豊代美 八〇mハードル

32・11・3 ダンス部

昭和三三年度

33・7・25 男子バスケット部

33・10・26 六本木昇一 砲丸投

倉橋 潤一 棒高跳

33・11・15 駅 伝

昭和三四年度

34・7・25 女子バスケット部

剣道部

34・8・3 女子バスケット部

34・9・3 剣道部

34・9・13 女子卓球部

34・11・13 駅 伝

34・12・6 駅 伝

昭和三五年度

県第三位

郡優勝

郡優勝

郡準優勝

県第三位

郡準優勝

県第三位

県大会出場

郡優勝

県第二位

県第四位

郡準優勝

郡優勝

県第三位

郡準優勝

郡優勝

県第三位

郡準優勝

郡優勝

郡優勝

県第五位

35・7・23 剣道部

昭和三六年度

36・7・21 剣道部

36・7・23 女子バレー部

女子バスケット部

36・7・29 男子卓球部

36・7・30 鳥居弘子 砲丸投

昭和三七年度

37・7・25 女子バスケット部

37・7・30 女子卓球部

37・8・6 女子バスケット部

37・9・15 陸上 男子

37・10・28 鳥居弘子 砲丸投

昭和三八年度

38・7・25 女子バスケット部

38・9・14 陸上 男子

陸上 総合

38・11・19 駅 伝

38・12・1 駅 伝

昭和三九年度

39・7・29 女子卓球部

39・9・23 ダンス部

39・9・23 大崎善明 二、〇〇m

郡準優勝

郡準優勝

郡優勝

郡優勝

郡準優勝

NHK放送陸上 県優勝

郡優勝

郡優勝

郡準優勝

郡優勝

県優勝

郡準優勝

県第二位

郡準優勝

郡優勝

郡優勝

郡優勝

郡優勝

県第四位

郡準優勝

県大会出場

県第六位

松井笑美子 八〇mハードル 県第四位

昭和四〇年度

40・7・25 女子卓球部

男子テニス部

ソフト部

40・9・11 陸上 男子

陸上 女子

陸上 総合

40・10・23 駅 伝

40・11・14 駅 伝

40・12・5 北爪 敏

松村純一郎 三、〇〇〇m

41・2・27 松村純一郎 群馬マラソン

昭和四一年度

11・6・26 松村純一郎 三、〇〇〇m陸上記録会

41・7・25 剣道部

女子卓球部

女子バスケット部

男子バスケット部

41・8・10 松村純一郎 三、〇〇〇m

鳥居 弘子 砲丸投

41・10・22 駅 伝

41・10・23 松村純一郎 三、〇〇〇m陸上記録会

六本木 保 三、〇〇〇m 〃 県優勝

昭和四二年度

42・2・19 松村純一郎 群馬マラソン

42・7・23 小池広道 走高跳 NHK放送陸上 県第二位

42・7・24 剣道 郡優勝(県大会)

42・7・25 男子卓球 郡準優勝

女子卓球 〃第三位

女子テニス 郡優勝

女子テニス個人 中村・大崎組郡優勝(県大会)

男子テニス 郡第三位

42・7・26 男子バスケット 郡第三位

42・8・8 野球 郡準優勝

42・8・8 剣道 県優勝

ダンス 県大会出場

42・8・10 小池広道 走高跳 県第六位

陸上 走高跳 小池広道 一位

〃 走巾跳 北爪初男 一位

〃 一、五〇〇m 北爪敏 一位

昭和四三年度

43・7・23 女子卓球 郡優勝(県大会)

42・7・22 剣道 郡第三位

剣道個人 福島守 優勝(県大会)

42・7・23 女子バスケット 郡第三位

昭和四四年度

男子テニス
男子卓球

々第三位
々第三位

44・7・21 剣 道

郡優勝(県大会)

44・7・22 女子卓球

郡準優勝

44・7・23 男子バスケット

郡優勝

女子バスケット

準優勝

44・7・22 女子テニス個人

郡優勝(県大会)

下田由起子、石橋さえ子組

45・8・5 剣 道

郡第三位

女子テニス郡

昭和四六年度
女子テニス

郡優勝(県大会)

男子バレーボール

46・7・23 女子テニス個人
北爪千恵子、清水淳子組

郡優勝(県大会)

44・7・26 陸上 女子

46・7・24 ダンス

郡準優勝

陸上男女総合

46・7・22 剣 道

郡準優勝

ダンス

46・7・24 男子バスケット

郡第三位

ダンス

46・7・23 男子体操

郡第三位

昭和四五年度

46・7・21 陸上個人 大崎由子 一〇〇m

郡第一位

45・7・23 女子バスケット

郡優勝(県大会)

46・8・3 女子テニス

郡第三位

45・6・27 ダンス

郡優秀校(県大会)

46・8・3 女子テニス個人

郡準優勝

45・7・22 剣 道

郡準優勝

46・7・23 北爪千恵子、清水淳子組

県大会

45・7・23 男子テニス

郡準優勝

46・8・15 ダンス

県大会

陸上 女子

郡準優勝

46・8・15 女子テニス個人 北爪、清水組

関東大会

45・7・23 男子 卓球

郡第三位

第八章 文 学

第一節 詩

第二節 短 歌

第三節 俳 句

第四節 紀 行

第五節 文献に表われた宮城村

第六節 小説栄五郎の成長

第七節 樹の会

は し が き

赤城山の南麓^{（註）}に位置する本村は静かな文学的な生活環境であるが、知られないままに埋もれてしまったものが多いのではないだろうか。それらのなかから掘りおこし、記録にとどめたい。現在調査し得たもののいくつかを列記する。詩歌、短歌、俳句、紀行文から大前田榮五郎の小説と映画のことにもふれたい。

第一節 詩

大間々普通学校創立者で初代校長であった井上浦造の新体詩にはじまり、斎藤多須久の孫で医学博士斎藤玉男の若きとき、仙台で第二高等学校時代に群馬県立前橋中学校（現在の前橋高校）の校友会雑誌「坂東太郎」に寄せた詩があり、現在の東宮七男に至る。

○ 井 上 浦 造

田舎の晩秋

朝夕に払へど庭に散る木の葉

うきよの塵の積るてふ

心のさまに似たるかな

まどの呉竹庭の桐

一葉ちりしく秋の暮

あまたの虫の声も

神の御国も遠からじ

夜は涼にき鈴虫や

誰をまつ虫くつわむし

思ひ思ひのしらべさへ

万の人にさまざまの

つとめあるてふことわりを

いはでさとらす教かも

弟の墓

わが古里の
村のはづれに澄める水
常に湛へるその沼の
ほとりに立てば晴の日は
武蔵野のす糸利根の川
浅間の山の夕栄えも
自然のながめ面白し
沼の北には墓ありて
いしづみ立てり累々と
刻みし文字に苔むして
さだかならねど大方は
村の為には財をも
身をもささげし義人等の
たふとき屍うもるらん
昼尚暗き竹藪に
問へど答はなかなか
歌ふ小鳥の他になし
野菊の花の一つかね
手折りてささぐ弟の墓
土あらたなる弟の墓

手向けし花は多かれど
いかにせんすべなき靈の
再び帰へる事やある

(後潤先生詩文集 昭和三年より)

○ 斎藤 玉 男

窓下微吟

仙台にての最後の冬の終に
都なる友にかきて送れる

かの川岸の若草に
編みし新巢をかいまみて
たれかは知りし時くれば
四方にわかるゝ雛鳥の
三つはみやこに囀りて
一つは遠きみちのくの
荒野の稗に饑えましと
一夜みそらに友星の
軌道西東はなれゆき
光さみしくゆらぐとき
その影うつす谷川も

右と左にわかること
命運のあとをたどりては
ふかき思のなからずや

あられに閉づる宮城野を
たもと噛みてもゆきかへり
城にかくるゝ冬の日
肩の細さをてらさせて

広瀬の砂を踏む頃は
由緒おもしろきうたまくら
みるにものうきわが身かな

眉をあぐれば山河の
かげさやかなるそのかため
帯にも似たる遠限は
水こころなくいそぐかな
向ひの岸のさざなみよ
よしや都の塵をだに
北の渚におくれかし

さみしかりけり松島や

名もなつかしきみやこ島
ああその蔭に短艇寄せて
波はしづかに風かろく
南に駛る寒風沢
沖の白帆をうらやみつ
ながれ藻の葉を恋ひしとき

かなしかりけり暮秋の
名取の水にながめして
流をわたる浮雲の
いつか筑波にかゝるとき
友や見なむわが歌を
せめて運べとうちつけに
さゝやきてみしその夕

綾白砂のきぬきせて
花の扇をかざさせて
憂を胸にたゞませて
をとめに舞へとたれか言ふ
鼻の爪と木じらみと
野の歡喜を掃らひては

鶯籠の鳥に歌あらじ

げに籠の鳥のいまの身は
草こまやかに空碧き

山のかなたを思へとて

桎梏カキなきかぜの訪ふごと

かひなき檻の戸を撲ちて

わかき必の翼さへ

裂けばさけよと狂ひけむ

うれしいかなや春は来ぬ

冬去りつきしこのあした

声をすませば忍び音に

氷の底にわが胸に

はやくもひびく一ふしを

聞くはまがはじかへり来る

春のしるべのうぐひすのこゑ

(坂東太郎三五号、明治三六年三月)

窓下微吟

病める友よりの消息に答へて

咲きのさかりに君をおくりて

わきてもさみしき花となりし

萩は二たびさきて散りて

産土ウツチ二東初穂うけぬ

うつらふ野山の色をみても

久しき君がなやみをおもふ

秋の日たゆたふ西の下り

うすき鉛筆鉛筆のあとをながめて

文字の底縫底縫ふ思をとめ

さだめのさやぎをこゝに探る

朝寒とり啼く黄なる風に

こぼるゝ病葉病葉何と聴くや

人なき真昼の紫苑紫苑がくれ

なぐさめ顔なる龍馬龍馬のうたに

忍ぶは昔か今かのちか

独楽独楽あて鏡ひしうなるの友か

名取の岸のふるきままとひか

まだ見ぬ時のとばりの奥か

あかつき覚めたる臉とちて

いのちの流の瀬音とばかり
枕につたはる脈をかぞへ
今はた悔なく君や笑まむ
憂は人を賢こからせ
病は心を深からしむと

恋はつゆ草露ながら柀れ
望は井の缸雉子を隔る
筆もたくみも事業も万生も
数照る恒星さへなにかくだけぬ
君知れ真理たゞわが頼る柱
混沌にも光明にも立ちてゆるがじ

門の柿の瑪瑙のつやの
ことしは君が頬にも上れな
霜姫あさ／＼べにを刷きて
夕日にはえある珠をかくるを
螺軸の折敷にもらずもせめて
わたり雁の嘴はふせげ

(坂東太郎三七号、明治三十六年二月)

窓下微吟

さみしさ

嘗て「オルレアン少女」を読み、
「メンツェンライヒエー、オエーデー」の一語を得たり。強
いて訳せば「眠はしきながらの心のさみしさ」な
ど言ふべきか。孤灯の下他郷の遊子の、心に感じ
て口に言ふを得ざるものは、この一語にあらざ
や。玩味半歳、この篇成る。

[上]

みそさどいなく声きけば
ふゆ鏡ぞ膚にせまる
山住の老儒者の係
げにおのが身にみそさざい

春ぬくゝふる渠をいでゝ
北なみ友求く十とせ
冬至晴赤城をながめ
いまこゝに鬚毛をふるふ——

友まきをたとへば夜さり
秋の野に花恋ふ蝶か

闇もなほ香をばとむべし
香も花もなき野をいかに

今やうのむれに交じれば
そらえみにつゞくそらえみ
人多きちまたにゆけば
白き歯に酬ふ白き歯

『銅版に鑄る道徳と法律は
人草の手と手をむすび
目にみえぬ宗教の索は
その胸と胸とを運ぬ』——

あるときは書にかくれて
とはに照る哲理の燈おへど
燈をとらす博士の御手は
「なさけ」にはつゆもゆるがず

をりくは思ひあまりて
あつまりの隅にかゝめど
やごとなき聖僧の眉も

「まこと」ゆへ燃ゆとしもなし

わびしらに磯をつたへば
夢に見し沖のまつ嶋
攻め潮のいたはりなさに
音になくは友なし千鳥

森ふかくはふりくらして
夕やみに「友よ」と呼べば
たゞ「友」とこたふる木魂
いづこにも友はあらしな

あめつちを朽葉色に染めて
冬の日は坤南にいそぐ
雪もよひ東北風を負ひて
みそさゞひとぶはいづくぞ

〔下〕

よそになどあだ求あさる
この夕べ衷をさぐれば
友はげにありけるものを
うれしきや胸のさみしさ

さみしさを汝ならざりし
 春くるゝ棲のともしに
 茶更ちまひと照る杯さかづきにも入りて
 余漜あまにふと咽なげばする

さみしさを汝ならざりし
 梅雨つゆあがり庭水にわみづふみて
 歌成うたなりれるたかぶりえみを
 ためいきにふと曇くもらする

かたむけば小雨とこぼれ
 ながむれば遠鳥とほどりと立ち
 おも影かげにうつゝにそひて
 とはなしに憑よるか纏まとふか

さみしさはうたのみなもと
 人世よの菜味なま敬虔けいけんの母はは
 ふかき善よき心のやどり
 かくて又またわが身の気楽いきがら

干支えとなくて賤しんは育てど

釀母らうぼ入らぬ酒はあらじな
 さみしさに認め出でゝこそ
 よろこびもえみも意味あれ

供養くやう了へて喜捨きだの大鐘
 桁けたしろきすに懸れど

三年酒齋しゅうさいに薰れど
 殖民地しやくみんちを村とは云はじ

村生むらうひの少女十六
 文筆ぶんぴつなく寄蕎麦よぎそば麦圃

まぎれかねひそか涙を
 ぬぐふ今さこそ村なれ

高きには永劫とこのよろこび
 下つ世は無尽むじんのうれひ
 その高きついのあかしと
 人の身にかゝるさみしさ

さはれいさ県道けんどううらゝ
 物市ものいちにいそげ若き子

くり言に籠こごの声かさば
あたらその流行よきの小うたの

節やみだれむ

(坂東太郎四三号明治三八年二月)

井の頭通信

やがて年が改まれば、老年も八十八になります。徒ら
に年を重ねるだけです。お恥かしい次第です。次の詩、
偶成のもですがお目にかけます。

箸

菜の花畑いしなのくもり日の入相いしな

軒に忙がしい燕の円舞よ

箸にもつ親しみが夕餉ゆづの眼によみがへる

箸につながらる東洋びとの悲しみが――

原子弾工場は

モーターの唸りを揚げるがよい

それにしても人間情性のパントマイムは

拘りなく進行する

ひそかなわが太息いしな

どこかの溝でお玉杓子の脇腹の

青黒い皮膚の下で

大腸骨 原基が

核分裂を始める

東洋びと、われの箸はうごく

指揮棒よりも細やかに、しなやかに

再びひそかな太息――

原子時代まで生きてきた老生の感懐の一端をお汲み取り
あらば幸甚です。

(昭和四十二年十二月一日発行「みやま」第23号より)

明治のノスルジア

今日は師走の二十四日、一冬に何日もあるまいと思
う冬閑の日和である。部屋には常設の電気炬燵がしつらえ
てあり、私は小半日それにもぐって和辻哲郎の今は絶版
となったであろう「古寺巡礼」を三度目に繕いて居るの
である。あと八日で正月、私もとうとう教元年八十七歳
を迎えることとなるであろう。

兎に角ここ東京都の西の果てに近い三鷹の住居では、
すべてが静かである。時々門前を過ぎるタクシーの物音
も心待ちに待つ客もないままに、たのもしい位に聴きな
される。

言つて見れば今日のこの時刻の空気はそのまま明治時代の空気、明治時代の香いである。ここが上州南勢多郡苗ヶ嶋村だと聞かされても少しも不自然さがない。ここへ「天井まぶり」の東宮佐七先生が現われても何の不思議も矛盾も感ぜられないであらう。追憶に鮮やかなのは私の三歳頃のこと、矢張りこの季節のこんな日和の午後（明治十八年にあたる）、家の庭で曾祖父弘山翁のお仕置を受けた一条である。何心なく庭隅の植木の葉をむしつて居ると、海老腰の曾祖父がいきなりその葉を取上げると二たび三たびきびしい打擲を受けたので、いつにもない事と一方ならず仰天した次第であった。後から思うとその葉は石楠花の新葉で、曾祖父が心掛けて作男に誂らへ、赤城から移植した株であったのである。曾祖父は寺の前の東屋の草寿老人などの俳諧や付け合せの盟友でもあった。

この外に祖父多須久の書齋に上げしげ訪れた顔ぶれには、原の郷の船津伝次平さん、産泰の井上正香さん、鼻毛石の北爪源兵衛さん（高調子で門の外から源兵衛さんの御入来と判った）、馬場の田村和藏さん（話の合間にフンフンと鼻を鳴らした）、三夜沢の奈良清樹さん、駐在逦査の中島さんなどがあつた。

あれから色々のことがあつた。磐梯山の破裂音も聞いた。明治二十二年明治憲法発布の二月十一日は東京もこも二尺程の大雪であり、文部省の玄関で森文部大臣が刺されたことはその日の午後苗ヶ嶋まで伝わつた。

今日のような日和にそれからそれへと追憶を辿ると、文字通り「星移り物変つた」跡がフィルムを展べるように浮んで来る。今の時代は方向を見失つた時代と言われるが、これまでの時代時代も、その都度方向を見失いつつ、それぞれの針路に随つて来たものと思われる節々も歴々指摘出来ると思われる。

達識者が居て指導して呉れる時代が幸福か、潰々者が一パイでケンケンゴウゴウの世代が建設に好都合か。ナセルが適格の指導者か、毛沢東がそれか、歴史に買しても歴史は鼻をしかめて横を向くであらう。

何が何でも今日は近來の好日である。

（みやま第十八号、昭和四十二年四月発行）

○ 東宮 七 男

明治三十年六月四日に宮城村大字苗ヶ嶋に生れ、現住所は前橋市国領町一丁目十の四

経歴

大正九年三月、群馬師範学校第一部卒業。以後昭和十三年八月までの間、桐生、梅田、大胡、宮城小学校訓導をつとめ、昭和十三年九月より東宮大佐伝記編集執筆のため満洲国協和会職員となり、昭和二十年終戦当時まで勤務（最後は三江省協和会榎川県事務長）。昭和二十一年七月に中国より引揚げ、大胡産業合作社役員、社会事業団体文化課長、建築会社等に勤務。

受賞

昭和三十八年五月 県文化賞

昭和四十三年一月 第二回高橋元吉文学賞

文学歴

大正四年、萩原朔太郎の詩と音楽の研究会に入り、詩を学ぶ。

大正五——昭和五年の間、県内外の詩歌誌に作品発表。大正九年「新詩人」同人となる。個人雑誌「階級合唱」発行。未来派主張の同人誌「ベタン、ベタン」発行。大正十三年東京朝日新聞芸芸欄に作品発表。

昭和十三年九月——十八年の在満時代。福田清人らの幹旋により「婦人画報」その他の文学雑誌に執筆。「月刊満洲」に多くの作品を発表。「満洲日日新聞」募集小説に山田清三郎選により「血は水より濃い」が

佳作入選。

昭和二十一年より。

総合誌「鶴」の編集。上毛新聞の詩の選者。県内雑誌に寄稿。詩誌「ボエム」「形成」「果実」のメンバーとして詩、詩論を執筆。

編さん刊行書

「群馬県文化年鑑」「群馬県蚕糸業史」「群馬県社会事業沿革史」

著書「金子与重郎」パンフレット「清水及衝翁伝」

「船津伝次平伝」（農業新聞連載）

詩集「魚鷹（みさご）」共同執筆「萩原朔太郎」みやま文庫。

現在

総合誌「風雷」編集事務担当。詩歌同人誌「みやま」主宰発行。県社会教育講師団文学部門講師。県文学会議委員。県文学賞選考委員詩部門幹事。群馬詩人クラブ、群馬県芸術協会顧問。萩原朔太郎研究会幹事。

『魚鷹（みさご）』東宮七男詩集

昭和二十九年九月二〇日発行

丸善印刷株式会社出版部

B 六変型の美装本である。題字高村光太郎。

詩集「魚鷹」によせる／豊田勇より

「詩友であり、畏友であり、酒友である東宮君の詩集が出る。……彼の詩の、年輪に年輪を重ねて、自然のうちに形成された骨格の手堅さ、この長い年月に鮮度を失はない肉体化された抒情の弾力、いい意味での日本人たる自覚をいつも身につけている深い精神の燃焼、それが何ものも犯すことの出来ない人間本来の、そして彼の詩の素因を形成していることだけを指摘しておきたい。……私は詩と、人間生活、社会、そして民族といふものの結びつき、そのあり方、そよいふ角度から彼の詩を見てゆきたいのである。」

跋／伊藤信吉より

「魚鷹は激しい怒りの倫理の書である。怒りは詩人東宮七男氏の独特な体験のなかで常に燃えつづけていた。……詩人東宮七男氏は激しい敗戦の中での素材を、造形的に把握し、乾燥した抒情的手法で鮮明な影像の世界をえがき、見事に歴史を再現させている。……更に詩人東宮氏のポエジイの高度な燃焼を更に期待させることであらう。」

冬の赤城山

老衰したと他は嘲うが

わたしは冬の赤城山が好きだ

ぼろ家のわたしの家を

はげしい風がひき裂いてゆく

そんな朝でも

鼻汁をたらし

まばゆい日の光を浴びて

つぎはぎだらけの長い裾を

とおくひきづりながら

カスリーンやアイオン、キテイを

恨まず

頭の白髪や禿げあがり

気にもとめず

颯爽ととほけているではないか

群馬大橋

秋深み

上州の山々

玉虫のごとく光れり

前橋の西

利根の流銜するところ
創造のよろこびに

羽搏くバーミリオンの虹つらなる

都会の情調に疲れ

そうろうと逃れ来れば

工（たくみ）正しき鉄骨蒼空に輝き

旧き世紀の感傷は飛び去れり

剛耿なる哉

新しき世代にいとむ

造型とセセッションの

ランガートラストの

群馬大橋

無題

ひぐらのが鳴きやみ　うす闇がひしめく

季節をわすれたどくだみの花のような

口づけされた女は

○歌　　話

歌謡詩人 榊 沢 友 佳

第二節 詩

頬を紅め　まつげや　鬚をぬらし
あの男の腕から　のがれて

深い霧の中へ蛇のように消えた

うす眼をあけた月見草がかすかな息づかいで

闇にひきよせられて花をひらく

丘の上で　はつきりしない色の旗がはためく

花火の合図で自作自演の

酒焼のだんご鼻の胸像の鼻がおとされた

像の胸の熱章が逆さまだつたが

とりまきのチンパンデーだけが

拍手と花束を投げた

スングリーから逃げてきたあの男だけが

ヘソがとびだすほど笑いころげた

（群馬年刊詩集、一九六八、群馬詩人クラブ編集、後平堂）

昭和初期に詩人堀口大宇氏に師事して、詩を書きはじめ「日本詩壇」「詩文学研究」等の中央誌に作品を発表していたが、書くほどに難解、思索するほどに孤独な境地に迫込まれ、詩に不安を感じより大衆に近づけるものへと逃避のような形で対照的な子供のうちへ活路を求めた。高橋掬太郎氏の門下となり作品を発表。昭和十六年「引越しねづみ」「野のみちこみち」（狩野隆慶曲）を約半月にわたり長野から全国放送した。その頃、宮城小学校に勤務していた橋爪芳男氏にも大変お世話になった。「夕焼けとんぼ」「シロイヌタロイヌ」等が当時の代表的な作品である。昭和十二年頃より海沼実先生の知遇を得て、始めてのレコード「北の護りの兵隊さん」をテイチャクより発売。つづいて童話では左記のものが発売された。

さみだれがさ……戸崎みつひろ曲（ポリドール）

母さまねんね……江口夜詩曲（キング）

チューリップホテル……桑原哲郎曲（キング）

石けりホイ……丹生健夫曲（キング）

全国募集童話コンクール第一位入選作品

牧場の雨……百瀬三郎曲（ビクター）

稲つけ馬つこ……室崎琴月曲（コロムビア）

南海の輸送船……八洲秀章曲（ビクター）

歌謡の部では

高原の馬車……ラジオ歌謡
町田等曲（コロムビア）

海狭をこえる夜……江口夜詩曲（キング）

初恋ルムバ……阿部武雄曲（ビクター）

愛の日ごよみ……細田義勝曲（ポリドール）

朝は陽が呼ぶ風がよぶ……定方雄吉曲（キング）

尾瀬の旅……北爪幸作曲

日本合唱協会吹込（コロムビア）

ダークダックス吹込（キング）

以上が戦前の作品である。応召中に第四艦隊司令よりの命を受けて「第四艦隊の歌」を作詩、海軍々隊附曲で発表された。「ほえろ嵐、おそれ吾ら、祖国のために南のはてに、ひとひらの海のもくづになろうとも、太平洋は断じて守る」（以下略）。帰郷後は農業を営む傍ら作詩活動に入り北爪幸作氏と組み「群馬県移動図書館の歌」「上毛電鉄社歌」等を中心に近村より依頼されて音頭など多数作詩発表した。レコード歌謡も二、三枚吹込み発売している。現在、日本音楽著作権協会、日本作詩家協会日本音楽著作権協会、日本作詩家協会、日本作詩家グループに属し後世にのこる作品を目ざして努力中。現在、群馬県作詩作曲家協会（会員三百名）副理事長、事務局長をやっている。

宮城小唄

樺沢友佳作詞

橋爪芳男作曲

ホラ よい よい よい里 花の里

山は赤城嶺 松原小原

鳴くは裾野のヨイ 牧し駒

さあさ つつじの赤城へ三里

紅い人情の 花も咲く

玉の薨なら しろがね黄金
積んでおらがのヨイ 村自慢

気立てよい娘は おかいこ上手

おいで宮城へ 嫁とりに

ホラ よい よい よい娘を 嫁とりに

明日の子供に 希望をかけて
みんな笑顔でヨー つくる村
伸びる子供は おくにの宝
のびて実になれ 花になれ

ホラ よい よい よい実になれ よく実れ

湯の沢 滝沢 山ほととぎす
さても見どころヨー お湯どころ
昔忠治が なみだでもる
浮世はなれた 穴がある

ホラ よい よい よい山 穴がある

赤城月夜

時雨 音羽作詞

田村しげる作曲

塩 まさる歌

今宵こころの 変らぬうちに

山を捨てよと 啼く山鳥よ

どこえゆこうか あてない旅を

俺はひとりの 旅鞋

月にかざせば 万年溜の

水にきよめた 白刃が光る

寝るも起きるも お前が味方

俺を捨てるな いつまでも

霞む赤城よ 国定村よ

生れ故郷を 放れるつらさ

こぼれ松葉か 葉末のつゆか

またも袂に ふりかか

○昭和十二年、キング。

塩まさるは千葉鉄道管理局出身。

バリトンの野性に富んだ声であった。

平井 晩村『野 葡萄』

前橋に生まれた平井晩村は民謡詩人として知られたが、詩壇の上では不遇のうちに没した人である。草津小唄はこの人の作だといふ。また前橋高等学校の校歌を作詩した。

前橋公園に「落葉」と題する民謡碑が建てられている。話集「野葡萄」に「湯けむり」のほか小説集の刊行が数多い。大正八年九月二日歿。墓は前橋市朝日町の共同墓地に「平井晩村之墓」という立派な碑が建てられている。

松 穂

赤城の麓を行ける成日

秋の日の赤城平に

松穂はしきりに落ちて

夕されば牧の男が

笛に抜く草の名もなし

穂（はじ）の葉はいつか黒みて

山の影森を浸しぬ

遙けさは人に別れて

只ひとり小路を行けば

櫻鳥は冥（くら）きに啼きて

雨と降る落葉のなかに

月出でぬ かかる夕は

踊子の逢瀬もあらむ

里ちかく路をいそげど

寂家は胸を襲ひて

秋の日の赤城平に

松穂はしきりに落つる

（詩集野葡萄より）

赤城つつじ

赤城つつじも葉となつた

山家の空はなつかしや

僅かふた宵（よさ）寝て起きて

都へ戻る途すがら

（同 前）

雲がある

芝山かおる

赤城に

雲が

ある時は

その日は きつと

風が吹く

死んだ

おじいが

言つてたが

今日は 赤城に

雲がある

麦を

踏み踏み

考えた

死んだ おじいの

ことなんか

作者八芝山かおるは本名芝崎福三郎、桐生市住。昭和四年生。「芝山かおる童語集」より。

○ 漢 詩

○ 井 上 浦 造

回顧五十年

其一 小学時代

明治維新第八年 金剛寺内仏龕前
童生結髮隨円頂 読誦声高単語篇

其二 少年立志

生育農家不事耕 耽書三昧使人驚

少年立志非營利 史上欲伝千載名

登赤城山

黒檜山高冠赤城 高峯如浪下方横

双龍隠見奔何処 縹渺雲烟是帝京

共立普通学校創立二十年

其一

二十年如夢 夢中聊勞心 末知流汗苦

切感帝恩深

其三

無能元我性 碌碌二十春 方寸苦心跡

靈台半俗塵

其五

偶叨諸子贈 多謝甚深情 全鵝黥私擬

子孫亦可采

(後淵先生詩文集昭和三年六月刊より)

上 野 南 溪

江戸時代後期の儒学者。「玉船集」に漢詩がある。その
伝に、

上野猷中、字(あざな)は知榮、南溪と号す。上毛苗

が鳥の人。既に世事をさけて精慮（くわしき考え）を結び、教授し、門人大いに進む。又景境を尋ね、山房を殿き、泉をきき潭を談ず。雅量にして詩を好む。幽谷の蘭が其の香によりおのずから聞こゆるというべし。

上野建作氏の六代前の先祖である。天保十三年に八十三歳で歿している。墓所は苗が島の上野家墓地（上野丑之助氏宅東南部）にある。その詩二首。

雨後遊望

雨後草鍼穿地青

新林围绕緑為屏

吟行到処堪幽賞

認得梅花一樹馨

登赤城山途中

千盤百折運繩通

伏窠煉巖悉鬼工

斷石唇時眺望（一字脱セル乎）

般々詩料貯胸中

伊与久の人深町北荘は嘉永三年に上野南溪を訪ねて歿談し宿泊している。伊与久は現在の佐波郡境町。深町北荘は享和元年（一八〇一）に生れ、明治三年（一八七

〇）歿。儒学者で詩文に長じた。家業の農業、のちに伊勢崎藩の御用達となった。大谷尚古、寺門静軒に師事した。詩文のほか画技にも秀いでいた。遺稿も紀行文が多い。

宮城村への旅行に二十余首の漢詩をなしたそのうち三首をあげる。

宿上野氏

名文右衛門、家倚赤城之山腹

赤城山腹卜居家

門外更無一物遮

報道主人刀窠水

烟霞淡処走龍蛇

同

醉裏豈可唱聖經

徒披書面坐幽巖

請君莫恃總默說

元頼主人乏一丁

同

夜半聽雨喜賦

可喜梅窓忽失明

山雲漠々暗三更

泉声直与雨声合

送入枕边睡味清

第二節 短 歌

三夜沢の赤城神社をうたった和歌として有名なものは鎌倉幕府の將軍として文人として知られる源実朝のうたった、いわゆる「からやしろ」という歌である。

上つけの勢田の赤城のからやしろやまとにいかで勝をたれけん

鎌倉右大臣

万代にあかきの山の白椿君かさかゆく仰杖にそきる

橋 盛長

○狂歌人 紅葉堂池水と赤樹園卿成

万延元庚申年に上毛高崎水魚連によって発行された『三才集』の天地二冊に赤城のふもと柏倉の狂歌人として紅葉堂池水と赤樹（或いは城に作る）園卿成の二名が入っている。

高崎の水魚連社中は狂歌を作るグループで、選者は菫庵と称した武居世平である。高崎宿新町の人で高崎水魚連の雄、即ち指導者であった。通称善次、諱は公德、古調園世平、藤好と号し、俳号菫庵、狂歌には多く東雄と称した。

橘守部の門に学んで和歌に通じ、高崎藩主大河内輝声公の師範をしていた。

さて、三才集は天之部の奥付に

画工 田中 梅坡

筆 武井 石文

彫工 盛橋 雪哉

万延元庚申年三才初会 上毛高崎水魚連
とある。地之部もまた同人をあげている。

風

さひしさに何まねくらん花すゝき穂にあらはるゝ秋の夕風

柏クラ 紅葉堂池水

霞

佐保姫も今やかすみのかつきゝてひなのあら野も都となさん

赤城麓柏倉 赤樹園舞成

霧

冬されは霧のまつきのたえくゝにかれてそみゆる菊川の水

柏クラ 池水

山谷

蟹の住沢へのくち木埋もれて横になかるゝ谷水もあり

赤城麓カシハクラ 紅葉堂池水

海 浜島浦湊江

打浪にくだくるかけも風黒く丸く鳴門の月のさやけさ

柏クラ 赤城園舞成

山家

人とはぬ我山里は山彦のこたふるなるも軒の松かせ

池水

(群馬県文化財専門委員本多夏彦先生の資料提供による。)

○斎藤多須久著『桃の一枝』

明治四十四年十一月二十日発行 編集兼発行者吉藤玉男 菊判六六頁和装本

春

日出山

年もいま高嶺にめぐり出つらむ初日はのめく日つま路のそら

雪中若菜

雪の中に春来し跡やこれならむところと東風葉萌えたる

梅

梅が香にこころひかるる夕かなちらぬはかりに風もふけかし

閑居梅

かくれ家の軒端のうめの花さかり浮世の人はそなたより見よ

稲

わか子等かうえし田面の稲の花梅もさくらもあにしかめやも

初冬

赤城山もみちおろして冬は来ぬあらしの北の勢多のあたりに

山雪

赤城山その名をかくす白雪にふゆのすかたはあらわれにけり

二嶽雪という伊香保八景の一つを

ふたつ嶽落葉が上にことの葉の千重につもりて雪はふるらむ

群馬縣に神社調仕へまつりし年の暮

来る年にかたりても見む神路山ゆきなつみたる己がゆくへを
神垣をかそふるはしにわが門もさかき葉におう年は来にけり

斎藤 多須久

上野國勢多郡苗高の人。初め沼田藩儒宮沢得所に就き、後阿夫利神社祠官権田直助に従ひ、國典並に皇朝医道を修む。文久元治の交、京師に抵り朝医錦小路家に入し傍ら勤王の徒と来往す。曾て伊勢に過り、本居宣長の墓に詣て幣を捧げて隔世の弟子となる。後、前橋八幡神社祠官貫前神社禰宣、群馬縣神道事務分局副長、同縣字務委員等を奉じ、高山神社の建設に与り、晩年平山省齋等と謀りて、神道大成教を創立し、果進して大教正となる。医にして國儒。國儒にして教導職。始終地方の開発風教の維持を以て念とせり。郷人相謀りて碑を其闕に建つ。成るに先ちて歿す。年五十九。

配 常磐子。上野國利根郡生品村戸部氏の出。若くして夫を助けて業を成さしめ艱苦具に嘗む。中ごろ養嗣布美衣を督して着发を副ぎて医とならしむ。先ちて歿す。爾來二十年、余の非才を以て倅に今日ある。一に祖傳の賜なり。刀自の余が家に於ける勉めたとり言うべし。刀自今年七十七。尚置鏢たり。

明治四十四年十一月 玉男 私記

(「桃の一枝」の巻末より)

『上毛百人一首』豊國堂編より

日のみこのしらす国原あきらけく まづ晴れわたる高千穂の家

斎藤多須久

勢多郡苗ヶ島の人、詩佳比、寛之助と称し、単に助と呼ぶ。

此の方面に活躍す、又大教正平山省斎と計り大成教を創設し

成童の頃、沼田の神官富沢正治に就て弁道、又植田直助に医

達に其の會長に任ず、明治二十六年七月より健康を害し、八

術を学び、遂に京師に抵り、宮医錦小路の門に遊ぶ。是の時

月六日終に帰幽される、病革まるや大教正に任陞、享年五十

に当り、世局一変し、既にして大政復古す。乃ち郷里に帰り

九、今孫玉男尚は幼なりしが、後年医学博士となり、東京ゼ

医業を開く、時に明治二年なり（中略）五年以来、前橋八幡

一ムヌ板病院長として令名があつた。

宮祠司となり、尋いで本県の神職取締に任ぜられ、爾後専ら

豊国覚堂は本名義孝。大胡町長善寺の任職の後に上毛郷土史研究会をおこし「上毛及上毛人」（月刊雑誌）を發行

して群馬県史研究に一生を傾けた。本書は昭和二十四年五月に群馬文化協会より發行された。大関軍之丞氏（群馬県

総務部長、前橋市助役、前三デパート重役を歴任）の長文の序がある。

○『上毛歌集』（大正四年）

前橋市本町の勝山牧次郎は方教と号して群馬県の和歌の指導的立場にあつた。その仕事の一つとして『上毛歌集』がある。本書は県内歌人二百九十二名の参加により

春の部 一五五首 夏の部 一〇三首

秋の部 八三首 冬の部 七四首

雑の部 一二三首 詠史の部 二九首

新題部 二二首

総計 五八九首

を収録した。大正四年十一月発行、煥乎堂

宮城村は十七名の多きに達している。江戸時代後期から国学が盛んとなり、和歌はふつうの教養として作られたもので、特に文学としての意識を感じていないのではないか。

板橋 亘

梢みなわか葉しけりて夏山はみ渡す限りみとりなりけり（夏山）

ひるのまの阿つさは夏にかわらねと夕すゝしくなれる秋か那（初秋夕）

わらハラををしへ育つる学舎の阿らぬかこなく世はひらけたり（小学校）

石原 弥市郎

花もやゝ匂ひいつへききさらきの空かきくもり安わゆきの降る（春雪）

わかゆとふ川せのとかにくれそめてかすみにしつむ春のよの月

狩にとてみ山路ふかくこしかともさちこそなけれあらしすさひて

東宮 義佐

老の飯のほりてみればわれのみか阿とより続くひとも阿りけり（老人）

あやはとり伝へしはたもとしをへて織る音たかく世こそ聞ゆる（機業）

石の上ふるのやしるに雨こふと雲のことくにひと都とふなり（雨乞）

東宮 保左次

こゝかしこ花さきにけりうつりきて宿のうゑこみつくろへぬまに（移居）
いさこちをふみ都々く連ハ松か枝に東風ふき渡る天のはし立（天の橋立にて）
陸にまで人波たてゝいくさふねおろすミなどハ賑ひにけり（進水式）

田村 和藏

さしのぼる朝日に匂ふ菊のうへに露もひかりをそへてけるかな（菊露）

堤 城峯

山の端につもりし雪は消はてゝけさのとかにも霞たなひく
たえまなくふく春風になひけとも恨さし動かぬ糸柳か那
よの人の鏡とならん蓮葉のにこりにしまぬきよき姿は

長岡 霖樺

さみたれはよのまにはれて保のくくと安けゆくそらこなく時鳥
水草の葉に置く露と思ひしはすたくほたるの光りなりけり
君か代を千代に八千代と阿まつ日の御旗かゝけて祝ふけふかな（天長節）

井上 城陽

植はてし苗代小田に雨をよふかはつの声の賑はしき哉（蛙）

はれにしと思ふまもなくうたゝねの枕にひゞくさみたれの音（梅雨）

大君のみことかしこみむらさきものこゝろのかきり世に都くさまし

前原 勝馬

あ多波のよそにさわくとみえぬまてのとかにかすむひんかしの海（大正四年海上霞）

今日はにし明日はひかしと安そふか那いつこもおなしさくらなれとも（花処々）

老人のつもるよはひにほこらかにまたもかそふるとしのくれかな（歳暮）

阿まさかるひなの里ニも老人にゆつらん道はある世なりけり（里道）

町田 真栄

やみよにもみちはまよはず山里の外の花かきの花のひかりに（死花）

風かよふ杜のこかけのうたゝねはゆめにも夏はみられさりけり（納涼）

小暮 茂三郎

あら玉のとしのはしめに降る雪の清きを人のこゝろともかな（新年雪）

外の花に露をのこしてさみたれのはれゆくけさのこゝちよきか那（梅雨晴）

斎藤 多須久

山賤かかとかけたる丸木橋それにかゝる藤の白なみ(山家藤)

桜井 的雄

人しれぬ小松かく連にもえ出しのへのさわらひたれかをらん(歌)

うちむれてすみれさわらひとぼくにとりては遊ふ野辺のたのしさ(春野遊)

小山田にみゆるはしり穂うちなひき涼しく渡る秋の初風(初秋)

北爪 徳衛

しら雲とみまかふはかり遠近の尾上をおほふ山さくら花(花盛)

うきなき岩根をつたふ谷川へいく千代かけてすみ渡るらむ(川)

大君のミいつかゝやくはた風にもろくもなひく志このしこ草(青島陥落)

北爪 道次(治)

おひしけることのはわけて志きしまの道のたかねはたれかふむらん

北爪 仙三郎

あら玉の年立そらの朝日かけくもりなきよをなほ照すらん

末遠くかすみ渡連るはるの野に里の少女に若菜つむなり（野若菜）
色をへぬ松にやとりて君が代のちよよふ鶴の声の長閑けさ（松上鶴）

北爪 松輪

わたし安よへとこぬまの手すさひにひこそむすへ岸の青柳（柳）
秋のよにねさめてきけはなく虫のこゑおもしろき庭の草むら
我がとの早稲田のいねそみのりけるふく秋風にふしたわむまで（秋田）

○ 井上 浦造

薄かすみ立ちそめしよりあらわれで見ゆるは春の心なりけり
ふるさとの家もあるじもかわるよにかわらぬものは鶯のこゑ
人の手もおよばぬ岩の百合のはなひとりさきてやひとりちるらん
昨日までせみても来なける桐の葉のちるおとさびし秋の風ふく
あさま山はるなの山も雲はれて妙義の嶺ろに夕日かがやく
さと人の炭ややくらんところどころあかぎの山にけむりたちたつ
とびかわすあきつの羽おときこゆなりふく風もなきあきの山里
なくむしの声もきこえずわたらせの瀬の音の冬のよはかな

（明治三十八年より大正五年まで）

(御潤先生詩文集 昭和三年より)

『宮城の歌集』

半紙二折りの歌集。その奥付は――

大正九年二月十一日 印刷

大正九年三月十日 発行

編輯者 宮城村大字柏倉 岡原 崇群
筆 者 宮城村大字馬場 堤 城峰印刷者 宮城村大字南ヶ島 星野 昭星
印刷者 宮城村大字鼻毛石 町田 碧水
発行所 宮城村大字鼻毛石字四ッ塚
宮城歌会事務所

いわゆる旧派の和歌であり、その文学的価値を現在の尺度ではかるわけにはゆかないが、こういう風懐のみちを何百年かの長い間続けてきて、大正年代の集大成がされたことに意義もあろう。以下抄出する。

かつて八十歳に近いおばあさんが三十一文字を親しい人にこんなうたができたけどどいつて見せていたのを、うたの良否とは別に感銘深く傍見したことを思いだすのである。

この宮城の歌会に参加したのは次の諸氏である。

(雅号) (本名)

彬 山 六本木 喜代治

松 軒 上野 福松

城 華 井上 きう

桜 花 北爪 仙三郎

関山、雅泉

雅仙、得意人、まさ人 北爪 徳 齋

(雅号) (本名)

直 峯 町田 直栄

亀 令 堤 亀三郎

雨 泉 小倉 主計

義 邦 田村 和藏

桜 山 桜井 啓二

笑 声 北爪 喜久寿

第一節 短歌

奇山、活気	ときは	公樹	萩香	花好	松令	刀木、容光	赤峯	正果園、梨園	映江、影江	常夏、は、木	如雪	丹岳	藤山	真守、守文	正山	榊水	巖	北山	城陽、城人	城岳、梅の舎	城峯
大崎元寿	竜岡定	阿久沢福松	高井とう	北爪岩重	北爪伊惣次	三輪治作	小暮茂三郎	小池一郎	板橋一豆	竜井きん	磯貝善三郎	北爪道治	斎藤二三八	関根豊太郎	榊井的雄	中林守三郎	長岡高太郎	富沢七蔵	井上嘉重郎	登山信三郎	堤伝作

安子、橋	紫野	碧雲	真人、碧木	昭星	溪流	竹の舎	紅峯	省水	明花	西溪	光子	逸駒	一保	翠山	翠年	茂香	深香	昇己	求己	竹蔭	紫山	静流
------	----	----	-------	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

塩原ヤス	前原藤作	杉下寿樹	町田保雄	星野三次	前原英四郎	登山武夫	前原文次郎	木村省三	桜井明治	井田友也	井上テル	前原勝馬	神保勸次郎	田村竜六	大崎りん	関口茂次郎	深沢伊三郎	木島秀丸	金子頼司	北爪正一郎	清水吉三	羽鳥采治
------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	------	-------	-------	------	------	-------	------	------

翠 柳 町田正武

耕 夫 星野規矩三

峯 仙 亀井林次郎

萩のや 長岡はる

備考 雅号ノ二ツ以上アル者ハ中途ニシテ改メタル方々

ナリ

序

をさまれる御代のひかりにあひて、宮城野に生れいてしこと葉の花のめでたくさきいでたるを、つみあつむることここに十歳の春を重ね、にはひは益れて高く、選ばれたる其花のなかより、ことに秀てしことの葉のはなをひろひあつめ、一小冊となし、之れに宮城の歌集と名つけられたり。など此一卷にととまらず、つきのまきまきもこれに倣ひ、としを追ふて、すりまきとせらるといふ。此尊き催しをいつまでもと祈して吾敷島の道のいやか上に志けり、かつは生立のすくやかにとしをへなんことを祈る。又日日の歌会を企てられます。斯道の奥を究めらるることのうれしくなん、編者のおのれに一言をこはるるままに、此よしかき志るし、いささか希望をも、併せて陳るものハ

多琉酒屋の主人 丹 雲

赤城祢の裾野に

さきしことの葉の

花はいく世と

可をりゆくな梨

宮城歌会当選歌集

○第一回 菅原祭 催主城峯

天 彬 山

千歳ふる後の世までに匂ふらん北野の宮の白梅の花

地 城 峯

守れかし学ひの道を一寸ちにしたふて祭る菅原の神

人 松 軒

身をつくし心尽しに果てしともげに国民の鏡なりけり

○第二回 紀元節 催主城岳

天 城 岳

万世に動きもやらぬ宮はしらたてし御稜威を仰ぐ今日かな

地 城 峯

いく千代も変らぬ御代のみ榮えに代々を重ねて祝ふ今日かな

人 城 隅

千代八千代弥栄え行くすめらぎの御代のその上祝今日哉

人 地 峯

万世に動きなきよを基せし君のいさをぞ尊かりける

○第三回 若菜摘 催主桜花

天 城 岳

小山田に残れる雪をかきわけて若菜摘む手に春風そ吹く

地 桜 花

うらうらと霞渡れる春の野に里の少女子若菜つむなり

人 松 軒

みやこ人知るや少女が山里にわかなつみする波るの長閑さ

○第四回 桜 催主直峯

天 閑 山

見渡せば野辺の霞もうすらぎてほのかに見ゆる花の白雲

地 北 山

敷島の道の志るべと千代かけて雲井に匂ふ山桜はな

月 城 峯

国民も外国人も愛する哉吉野の山の花の盛り哉

同 直 峯

山桜春の小風を匂はせて都の人の音づれを満つ

雪 松 軒

外国の人もうらやむ桜花げに敷島の華にぞありける

花 城 華

山陰の賤が伏屋も花咲きて都に満さる心地こそすれ

○第五回 時鳥 催主北山

天 城 華

鳴くこえもしめりがちなるさみたれの空に聞ゆる山ほととき

す 地 嶽 碑

五月雨は夜の間に晴れてほのほのと明け行く空に時鳥鳴く

人 城 岳

雲間よりもる月かげにほとときす初声高くなき渡るなり

月 直 峯

小雨降る暗に宿なき時鳥声もあはれにきこえけるかな

同 城 陽

湯あみする人の心をなぐさめて鳴くや赤城の山ほとときす

雪 亀 胎

手をかけし雨戸もしばしあけかねて時鳥聞く朝ぼらけ哉

同 直 峯

村雨の晴水し月夜にこゑとほく聞くも珍し山ほとときす

同 嶽 碑

いつとなく移りかはりて時鳥鳴く一声に夏は来にけり

花 盛 花

桜井の里や青葉のほとと示すなきつくしたるさみだれの空

○第六回 螢 催主真守、掬水

天 嶽 碑

水草の葉に置く露と思ひしは川辺に光る螢なりけり

地 松 軒

身はたとへあしに深くしのぶとも持てる光はかれさりけり

人 掬 水

地水にうつれる星のたた一つ動くと見しは螢なりけり

月 桜 花

風かよ小青葉のかけの直清水に涼しさ添へて螢とふなり

雪 雅 仙

夕されば星と見えぬる遠近の空にとびかふ小田の螢火

雪 城 陽

草深き里の小川の遠近に光りつ消えつとふ螢かな

花 城 峯

雨晴れてひと吹く風に露の玉ちるかと思しは螢なりけり

花 真 守

夕風のそよぐともなき草の葉に散り行く露は螢なりけり

○第七回 夕立 催主雨泉、はは木

天 雨 泉

広野原行く手にせまる暑さをも洗ひて過ぐる夕立の雨

地 真 守

玉鉾の道と川とのへだてなく今をせにふる夕立の雨

人 雅 仙

雲送る風の吹き来て夏の日も暑さ忘るる夕立のそら

月 正 山

里人が水あらそひもいつしかとふり流しけり夕立のあめ

雪 義 邦

田水なき時ぞ待たるる夕立の遠きひびきも嬉しかりけり

花 真 守

賤の男が門田の水の争ひを降りしづめたる夕立の雨

○第八回 初秋 催主杉山、藤舟

天 義 邦

はしり穂の早くも見えて田の面に照る月涼し初秋の空

地 板 山

初秋の月かけふみて野を行けばあわれ身にしむ虫の声かな

人 藤 山

おのつから心の靡もはれにけり千歳の山の秋の初かぜ

月 笑 声

まだひるの暑さは夏と変らねど朝な夕なに秋風ぞ吹く

雪 龜 輪

ふみまよふ道にも咲くや初秋の山に盛りの女郎花かな

花 丹 岳

朝ままき小田わけ行けば白露のちる袖すずし秋や来ぬらん

○第九回 紅葉 催主城華、紫山

天 真 守

野も山も見渡す限り紅葉して風も色ある心地こそすれ

地 城 岳

夕日かげさしそふ峯のもみち葉は霞も錦も及ばざらん

人 丹 岳

うすくこく色つく嶺のもみち葉は深山をかさる錦なるらん

月 松 軒

紅の錦と見ゆる山の端は夕日のうつるもみちなりけり

同 如 雪

世の常の色にはあらし赤城なる石垣沼にうつるもみちは

雪 影 江

木々は皆おく露霜に染められて山は紅葉の錦のなりけり

紫 山

妙義山見渡す限り紅葉せりとこころに松を残して

花 丹 岳

流れにて錦と見しハ川面にうつれる岸の紅葉也けり

○第十回 天長節 催主松軒、城陽

天 杉 山

日の本の光りいやます天皇のうまれ給ひし今日ぞ目出たき

地 影 江

軒毎に御旗かかけて大君のあれましし日を祝ふ今日かな

人 城 陽

天皇の生れます今日は眞竹の目出度節と祝こそすれ

月 霧 檜

君が代を千代に八千代と天つ日の御旗かかけて祝ふけかな

雪 杉 山

大君の生れ給ひし今朝の空舞ふ鶴さへも千代をことほぐ

花

軒毎に御旗かかけて祝ふかなわが大君のあれましし日を

○第十一回 松上の鶴 催主板山、城峯

天 城 華

千とせふる大内山の松が枝に千代を寿ぐひな鶴のこゑ

地 はは木

色かへぬ千代田の松のおく深く八千代祝ひて田鶴ぞ鳴くなる

人 城 峯

松の上に千代よび交す田鶴が音は榮行く御代のしるしなるら

ん

月 板 山

九重の大内山の老松に幾千代かけて田鶴は住みけり

雪 直 峯

榮え行く年の初めを祝ふかな松の梢にあしたづの声

花 真 守

色かへぬ一木の松を二つなき友と契りて田鶴や住むらん

同 杉 山

常盤なす大内山の松が枝に千とせ重ぬる田鶴や鳴くらん

同 板 花

色かへぬ松に契りて君が代を寿ぐ鶴の声のさやけさ

同 亀 鶴

千とせふる池の汀の松が枝に千代呼ぶ田鶴の声ぞ床しき

○第十二回 新年 催主紫山、北山

天 正 山

新しく年を迎へし喜しさにつもる齢も忘れにけり

地 城 峯

門毎に緑変らぬ松竹をかざして祝ふ新玉のとし

人 真 守

梓弓春より先に新玉の光ある世の年立ちにけり

月 板 花

新玉の年立ち帰る朝日かげくもりなき世を尚照すらん

雪 城 陽

汲む屋敷に話も花を咲かせつつことほぎ交す新玉の年

花 影 江

家毎に門松立て新玉の年を遡へて祝ふ目出たき

○第十三回 祝宮城村役場新築 催主直峯、幽泉

天 雨 泉

栄え行く宮城の里の村役場成りし今日こそ目出たかりけり

地 桜 山

宮城野をすべ司さどる村役場たてて楽しく祝ふ村人

人 松 軒

動きなき主宰所は立ちにけりいや栄行かん宮城野の里

月 直 峯

みや城の千代の栄えは見えにけれ主宰所の成りし今日こそ

雪 義 邦

千歳ふる神の宮城に新しく建つる役場の動きなきかな

花 紫 山

懸にも頼ひまれなる村役場建ててぞすぶる宮城野の里

○第十四回 鶯 催主松軒、洵水

天 紫 山

足曳の山路をたどる旅人の聞くも嬉しき鶯のこゑ

地 洵 水

梅が香は散にし枝にとまらねど名残ぞとむる黄鳥のこゑ

人 紫 碎

咲き匂ふ梅の梢にすみなれて声うるはしく歌ふ鶯

月 直 峯

梅そよぐ風もいつしかやはらぎて春くと告ぐる鶯のこゑ

同 竹 蔭

咲き匂ふ梅の梢に鶯の初音長閑き朝ぼらけかな

雪 雅 仙

能どかにも露をもれて木の間より春告初むる鶯の声

同 雨 泉

深山路を越ゆる旅人よびとめて鳴きつつ渡る谷の鶯

花 影 江

咲き匂ふ梅の梢に宿しめて声奏しげにうたふ鶯

花 城 陽

聞く度に思はず筆もおかれけり初音床しき鶯の声

○第十五回 花見 催主城陽、梅の舎

天 真 守

咲く花に心引かれて来て見れば眺めつきせぬ今日の楽しさ

地 松 軒

年波のよる瀬もよそにうかれたち昔偲ぶる今日の花見は

人 真 守

眺むれば殊にすぐれし日の本の光りを見せて吠く桜かな

月 城 峯

春霞たなびく今日の長閑さに桜狩りこそ賑はひにけり

月 竹 陰

言の葉のみちのしるべにうちむれて桜狩りする今日ぞ長閑さ

雪 義 邦

たかぶらぬ人の心の奥庭に咲きにし花を見るぞ床しき

同 深 香

白雲と見まがふばかり咲き満ちし花を見る日の心地よき哉

花 雅 仙

花ざかり遠の山辺を見渡せば霞ぞ匂ふ心地こそすれ

(中 略)

○第八十回 夏草帯露 催主溪流、和泉

天 城 峯

夏草の葉末にやどる露の玉散らすも惜しき野辺の細道

地 城 峯

さし昇る朝日の光り照り添へて玉とかかやく夏草の露

地 彬 山

朝日さす小田の早苗に置く露はこかねの花と人や見るらん

人 溪 流

駿の男の馬草かる手に散りかかる葉末の露ぞ涼しかるらん

月 西 溪

露置きてふみわけがたくなりけり道なきまてに茂る夏草

雪 まさひと

ゆくみちのありとも見えずなりにけり小野の夏草露にたわみ

花 真 人

月の夜に螢と見しは夏草の葉末に宿る露の玉かな

○第八十一回 橋上納涼、教育 催主静流、真人

天 まさ人

ささ波にくだくる月の影見えてゆふへ涼しき里の柴橋

地 西 溪

よき花を咲かせんものと一寸ちにつくすは国の教へなりけり

人 まさ人

風そよく橋の上こそすずしけれすみたる川に月のうつりて

○第八十二回 田家夏月 催主峯仙、萩の舎

天 雫

蛙なく声もきこえて小山田のやれし軒端に月かげのてる

地 まさ人

あけはなつ小田の庵にかげきよくさし入る月の涼しかりけり

人 耕 夫

村雨のあとなく晴れて夏の夜月かげ涼し小田の一つ家

○第八十三回 秋風、庭の菊 催主溪流、雫

天 昭 星

山田守る案山子の神もほころびて穂なみを渡る秋の夕風

地 まさ人

千代の香も高く匂ひて庭の面にひとむら咲けり白菊のはな

人 まさ人

夕日かげさびしげにさす山の端の紅葉ちらして秋風ぞ吹く

○第八十四回 朝晴雪 催主桜花、真人

天 耕 夫

なごりなく積りし雪の空晴れて昇る朝日のかけのどかなり

地 静流

旭さす我が山里はましろにて雪のけしきのうるはしきかな

人 まさ人

君が代の光を添へて見ゆるかなはつ日に匂ふ雪の白たへ

○第八十五回 残雪、高山彦九郎 催主直峯、紫野

天 竹の舎

みどり増す松の並木にむらきゆる雪こそ冬のかたみなりけれ

地 まさ人

たとひ身は筑紫の露と消ゆるとも高き功は千代もかほらん

人 昭星

春立ちて霞は四方にたなびけど未だ遠山に雪ぞ残れる

○第八十六回 祝字校増案 催主竹の舎、静流

天 城 峰

学び屋を建て増せしこそ目出たけれ教への道の基なりせば

地 城 峯

里人が心尽しし学び屋の新になりし今日ぞ目出たき

同 耕 夫

たて増せし学びの宿に教へ子の君が代うたふ声ぞうれしき

人 梅の舎

いや榮ふ宮城の里に学び舎をたて増しにける今日の目出たき

○第八十七回 花下会友 催主城峯、はぎのや

天 城 峰

色も香も清き心に咲く花の木蔭に今日は友と暮しつつ

天 城 峰

咲き匂ふ桜の下に我が友の集ひて語る今日の嬉しさ

地 眞 人

咲き匂ふ花の木蔭によき友と酒くみ交す今日の嬉しさ

人 峯 仙

花の下かすみの戸張うちあけて心のどかに友とかたりつ

人 昭 星

花見んとよせ来る友の争をとりて木蔭に遊ぶ今日の嬉しさ

人 はぎのや

来て見れば思はず出会ふ友どちと睦みて語る花の下かけ

○第八十八回 首夏山 催主峯仙、耕雲

天 翠 柳

山々は昨日の花の咲きて若葉涼しく風かほるなり

地 まさ人

花の雲消えにし山も夏の来て青葉涼しく見え渡るかな

人 まさ人

よじ登る山の木蔭も夏の来てそよ吹く風の心地よきかな

○第八十九回 農繁 催主翠柳、鈴蘭

天 城 峰

麦刈りに水引入れに植えこみに田の面のわざぞせわしかりけれ

地 碧 水

蛙なく声もせわしくきこえけり早苗をうらうる黄昏の頃

人

直 峯

雷の音もきこえて麦打ちの汗をふく間もせはしかりけり

○第九十回 避暑 催王梅の舎、幽華

天

直 峰

白波のよする磯辺の木かくれに暑さを避くる心地よきかな

地

城 峰

堪えがたき暑さ避けんと今日よりハ吹く潮風のよする浜辺に

人

紫 野

木かくれに水も流れて風清き出湯の宿に夏を過さん

○第九十一回 悼板垣伯、田家早梅 催主杉山、和泉

天

直 峯

板垣の姿は雲にかくるとも功績へ千代に栄えますらん

地

直 峯

山田守る賤が伏屋の白梅は春より先に香り初めけり

○ 松村 清

若くしてアララギや霸王樹に短歌を発表して、宮城村の近代短歌の先覚者であった。須藤泰一郎や藤岡林城に師事し、特に林城（須藤唯二郎）はその才能を愛して友情こまやかなものがあつた。その病気の重い日日の三日を泊り込んで看病したが遂に死去した。友情思ふべきものがある。

墓碑銘はその藤岡林城によつて書かれたが署名はない。墓地は大前田字天神の松村家墓地である。

人

まさ人

冬がれの小田のわら屋の軒ちかくにはひ初めけり梅の初花

○第九十二回 祝宮城歌会十周年 催主翠愔、昭星

天

直 峯

歌人のまどろいつしか重りて十年の今日ぞ目出たかりける

地

碧 水

志きしまの道を究むるこのまどろ十年の春を祝ふうれしさ

同

城 峯

敷島の道の集ひを宮城野に十年重ねし今日の目出たさ

人

静 流

さかえつつ十年かさねし言の葉の末長かれと祝ふ今日かな

宮城歌会の十周年の記念として

ととせへしみやびのまどひいやが上に

采ゆることを

折りつるかな

丹 靈



清明院義剛道範居士

明治卅三年十一月五日市十郎長男トシテ生マル少年時代ヨリ文字ヲ愛シ
秀夢ト号シ特ニ短歌ニ秀ズ然シテ大正六年ハジメヨリ霸王樹上毛新聞等
ニ詠草ヲ発表シ上毛人間ヨリ非凡ナル才能ヲ認メラレ益々交誼ヲ深クス
其ノ間柔道三級ニ進ム

大正九年十二月十日歩兵第十五聯隊第九中隊ニ入隊

同十年十一月三十日上等看護卒ヲ命ゼラル同十一年十一月三十日

帰隊除隊ソノ間軍隊中ニテモアララギ霸王樹ニ短歌ヲ発表ス而シテ柔道

モ一級ニ進級ス

大正十二年国民新聞前橋支局記者トナル同十三年三月十二日午前十一時四十五分逝去ス行年廿五歳

あまつとふ月のしたびに阿しびきの赤城の山はましろなるかも

絶詠

歿後の大正十四年十一月に、歌集『松の花』が出版された。編集は梨烟花城（藤岡林城）と大沢雅休の二人であり、大沢雅休主宰するのぎく社（前橋市大塚町三七）から出されたB6/五一頁。

年譜（歌集『松の花』所載）

明治三十三年十一月五日 大字大前田一〇九五番地に生る。父市十郎は同村大字苗ヶ島の産、明治三十二年頃前記に

移居、商店を営む。

明治四十年四月 宮城尋常高等小学校尋常科に入學。

大正四年三月 同校高等科卒業——在学中より文字を受し、文章短歌を作る。

大正六年三月 実業学校卒業——秀夢と号して上毛新聞、霸王樹等に短歌を発表す。

大正七年 梁畑花城氏、六弥太孤業氏、関口茂男氏と交り、大いに其の影響を受く。ことに花城氏をしたい、其の交終生深し。同年須藤泰一郎氏のすすめによりアララギ社に入社し、作歌にはげむ。尚小説戯曲の研究とともに柔道に熱心し三級に進む。

大正九年三月 祖父逝く。弟妹五名あり。

同年四月 大沢雅休氏を知り交る。雅休氏北海道移住送別会に住谷三郎氏と来会し、北原放二、吉田緑泉、島田青風、神保冷平氏等と相会す。同年柔道二級に進む。

大正九年十二月 歩兵第十五聯隊第九中隊に入営、角田清二郎君と知る。之より交遊終生に及ぶ。

大正十年十一月 秋季演習のため群馬埼玉東京地方に出張、同月十七日より五日間特別大演習に参加のため東京府、神奈川縣、山梨縣下へ出張、同十一月二十八日一等看護卒に進む。十二月一日上等看護卒に進級。機関銃隊に編入さる。

大正十一年十月 秋季演習のため群馬、栃木、茨城縣下に出張、同月三十日帰休隊。軍隊中にもアララギ、霸王樹等に短歌を発表せり。

大正十二年一月 柔道一級に進級す。

大正十二年二月 のぎく会歌会に来会、村上成之氏、角田蒼穂氏を初め縣下同好者諸氏と知る。のぎく会同人となる。

同年三月 前橋武徳殿に有段試合に出場、胸部挫折原因となり発病。三月十六日北川病院に入院、腎臓炎と決定

し、弟春美附添看護をなす。四月六日全快退院、同月弟群馬県師範学校に入学す。

同年六月 茨城県河原子に転地療養に赴き七月末帰郷す。

同年八月 国民新聞社前橋支局記者となる。上毛新聞中村芳太郎氏と親しむ。小説戯曲を創作し、大沢雅休氏をしばしば往訪す。

同年九月 病氣再発、郷里にかへりて療養す。

大正十三年一月 病氣いよいよ重る。遺稿として「松の花」の整理に着手、二月より全く筆を執ること能はず、三月十二日遂に逝去。叔父に阿久沢熊吉郎氏ありて終始一貫の愛護を受く。

法名 清明院義剛道範居士（弟春美記す）



歌集『松の花』

松村清君の遺詠に就て

落葉かき

大沢雅休

風寒みかじけたる手をふところ今日も来りぬ落葉の山に
雪の空気づかひにつゝ夕ぐれを松葉かきをり松山深く
松風の音をさびしみ夕ぐれの松山深くまつ葉かきをり
冬山に一人火を焚き弁当の冷たき飯を食ひにけるかも

右の歌は清君の晩年の作であるが、此頃から著しく君の歌境が展開して来て個性の色を帯びて来たのだと思ふ。生前彼は花城君

を非常に慕っていて、自分の身上の細かい事まで打合っている位であるから、彼の歌風に花城君の影響が眼立つのも不思議ではない。

海の歌

つゆのそら今日めづらしく晴れ澄みて海のかなたに帆の舟見ゆる

あかねさす陽に照り映えてあざやかに光りつるかも波静かなり

この頃の梅雨にけぶりて磯浜の緑松原色さやかなり

蛙鳴くわが上つ毛ははるかなり此処の海辺に夏をまちつる

宵月の光ながれて行くなべに穂波ゆたかにゆれ動くなり

これは松村君が前橋市の北川病院から退院して河原子海岸へ転地した時の歌である。此頃彼は病苦と共に青年期の煩悶の頂点に居った。それ故その悶々哀切の情を綴べた歌も沢山あるが歌としては出来上っていない。こうした煩悶を取扱った戯曲、短篇も十数篇作っているのだが、その事は別の機会に譲ることにする。

命かなし

しき妙の枕を並めていねし夜を思ひおこすだにかなしきものを

人の世にちぎりのみし縁さへつひにむなしくなりにけるかも

二十五歳にして病に苦しめられ、その上に斯うした歌を詠じて死ぬる身に自分を置きかえて考えて見る時にしみじみとして涙を催さざるを得ない。

除隊

宮門の前に来れば人ごみの中に交りて吾が父は居りぬ

人ごみの中を押しわけ出迎ひの父がほゝえむかほを見取るも
足曳の赤城の里はさびしけど迎への父と我は帰らむ

兵隊の我を珍らしみよりそひてうからやからはそばを離れず
恋ひみにし我が家なれどあしびきの赤城山べは淋しかりけり

除隊して

帰り来てこのあけくれに仰ぎ見る赤城の山は真白なるかも
うら山に竹をきりつゝわれは居り赤城の山の雪は光るも

新らしく母が作りし野良着きてこの山畑にいそしむわれは
野仕事に此頃なれつ群肝の心安けき日の続くかも

野良に居て常に見飽かぬ赤城山遠つ山々雪ふりにけり
わが家に煙立ち居り風寒き夕を早く野良より帰る

之等の語作は松村君の遺稿中에서도最も優れたものである。除隊しての一聯は大正十二年の四月アラギ誌上で古泉千
樾氏が首席に選び（千樾曰く、素直で捉へる所を捉へて居る。大へんよい）という評言を添えられている。尚同五月
号アラギ誌上で高田浪吉氏が、帰りきてこのあけくれに仰ぎ見る赤城の山は真白なるかも

除隊してと端書がある。普通の材料がかえって新らしい感じをもたらしめている。その原因は作者の心持に帰する。
「かも」はどうか。

新らしく母が作りし野良着きてこの山畑にいそしむ吾は

伸びやかな歌だ。こうした歌は散文になり易いのだがよく調子を緊めている。素直な作者の姿が浮ばれている。

歌を作ることを怠けている時間が長ければ長い程日常経験する平淡な感じを歌にする大の根気がぶって来る。さうした人々には斯うした種類の歌を作らうとする場合散文に近くなってつい捨てていくのである。と評している。宜なるかなである。

此処に於て本当に彼は彼の本道を見出したのである。この態度でこの道を進めて行つたならば立派な作が出来ると共に人としてどんなに成長を見られたかしのれないのである。それを思うと惜しまれてならない。

今はもうこうした作品を残して死んだことをせめてものなぐさめとするより外はない。寂しいことである。

歌人神保冷平氏はその主宰雑誌「上毛短歌」第五卷二月号（昭和二十五年二月一日発行）に「梨畑花城」の一文を掲載している。その中から――

大正十三年四月号「土と光」には松村清君の遺詠一首

天つたう月の下びに足曳の真向の頂ましろなるかも

と松村清を悼むという氏「花城」の二首が出ており、次いで五月号に大作問題で十七首其一、六月号に其二、七首、七月号に八首と三回に亘って載せている。君の痛恨、哀惜の如何に大きかったを知るのである。（中略）松村君の方が年少ではあったろうが、氏はそういうことにこだわらない性格であったから肝胆相照し人生のすべての問題を真剣に語り会ったことだろう。前書きに「友人松村清、三月十二日廿五歳にてゆく、君は秀夢と号し少年時代より文章詩歌をよくす。除隊後一年余り腎臓を患いて後に立す、かかる若人の死は悲しとも悲しきことの極みなり」とある。

久々にわが見る君や病み瘦て口さえきけずなりはてにけり

垢づきし細り手のべて病む君がわれを招くも口はきけぬに

くはへたるりんごのかけを手に持つと持ち得ぬほどに君おとろへし
死に近き君を守る夜の更けしづみ山川の音の訝えまさるなり

枕べのかめに生けたる梅の花今日咲きたれ君が眼は開かず

ふき清め棺に納むる君がむくろ見るに堪えねど見おさめにけり

葬り路の夕べを寒み笹の葉にふりたる雪は凍りておつるも

穴ふかく君が柩のおろされて我も一くれの土かぶせたり

群肝のころくずおれ嘆きつつ畑打つものか春は寒きに

着かざりて少女は行けりうつそみの春にも逢はで人は逝きしを

朝なあさな紙の位牌に初をたむけ我はかなしく飯食すものかな

春なれや赤城山べにうらうらと日は照らせれど今は君あらず

まことに心会った友の死は悲しい。清君は兄とし、師として慕い寄ったであらうし、林城氏はそれよりも、自分の心境を歌境に吐露し、よく聞いてくれる友人同志として前途に希望と期待をかけられたのである。

着飾って行く娘を見ては、結婚もせずに逝った友のことを思う念深く、その短命であった友の上に無限の哀感を寄せている。そうして紙の位牌を作ってその薄命な友の冥福を祈っている。こうして逝った友を思う情の深さは、見る物接する物、すべてが亡友に関連されて心うつろにさびしく過したのである。うらうらとのどかな春の光、柔しかるべき春も、その春を待たで逝った友の為に傷心の日を送ったのであろう。今は君あらずの中に作者の温情が溢れている。

○ 松村 誠



松村清、春美、誠の三人の歌人兄弟の一人である。やはり少年時代から兄の影響をうけて、野菊により大沢雅休の指導をうけたが、若くして死去した。これからという時であったことがおしまれる。墓は清兄と同じ松村家墓地である。墓碑銘もやはり藤岡林城の撰文によるもの。

誠如実貞居士

松村誠 明治四十二年八月十四日市十郎三男トシテ生マル少年時代ヨリ草穂ト号シ短歌ヲ詠ミ上毛新聞野菊等ニ詠草ヲ発表シ昭和四年八月七日午後五時歿ス行年廿一歳

遺詠

飛ねもすを父と働く裏畑に赤城おろしの風の冷多き
風もなき真昼の庭に二つ三つ音もなく落つ柿の病葉

——歌集「りんどう」に掲載されている短歌一首である。

○ 松村 春 美

明治三十九年七月二十三日生、群馬県館前学校を卒業し、勢多郡内で訓導をつとめた。短歌は兄の影響もあって学生時代からつくり、雑誌「野菊」「アララギ」に発表した。のち敷島北尋常高等小学校長となり、粕川村月田小学校、宮城小学校、黒保根小学校、大胡中学校の各校長を歴任し、この間、昭和二十七年十一月より三年半にわたり宮城村教育長を兼務した。昭和四十年三月三十一日付で定年退職した。

歌集『りんどう』所載の短歌

師に逢ふと自転車にのり急げどもおぼつかなしや人通りしげく（大沢先生を訪ふ）

今日の日も空ほがらかに晴れにけり吾が師の移居に手伝ふ吾は（清水先生）

歩み来て稲田の道に出でにけり吾が学校のありありと見ゆ

朝より運動会も雨となりかはづの声のさびしかりけり

久にして吾家の庭に立つものか近き赤城は紅葉しにけり

○ 六本木 奈 加

東宮家の生れで、詩人東宮七男氏の実姉である。東宮家は東屋も鳥屋も文学に関心を寄せており、奈加さんの生れた東屋では俳句、短歌は特に文学という程のこともなく心境を平明に表現する方法として日常的なことであった。奈加さんの歌がそういう日常的なことばでつづられているところに意味があるといつてよいであろう。

明治十六年八月二十五日生。その高令で出版した歌集は子供や孫や親戚へ渡したタイプ印刷の文庫版の冊子である。

六本木奈加歌集『赤城の里』昭和四十二年十月発行（私家版）

湯の沢の出湯のけむり立ちこめて赤城の山はにぎわいにけり（昭和三十二年初冬）

湯の沢の熱き出湯に煙り立ち千代も栄えよ鳥屋東屋（千代、姉の名）

湯の沢の開くる春は赤城山都となりて客も賑う

初孫の晴着姿のよろこびをともしに楽しむ今日の祝日

八十になり母に甘えし夜を見て吾より若き二親の顔

いちぢくの木影の窓の涼しさにベットのの上に眠る極楽

ながやみのつれなく生きる淋しさにもの言う声に人の恋しき

世を去りて地下に眠りて百日目今も姿に変わりなきかな（百日祭）

朝に行き夕べに帰る吾子を待つこの楽しさを孫に語らん

明治より大正昭和百年目初日の光今も変らじ

（文庫版、タイプ印刷、四十頁）

○群馬県年刊歌集の作者

群馬県歌人協会から出版されている年刊歌集（田島武夫編集）に宮城村から二人の女性歌人があった。石井豊久子さんは毎年出詠しており、星野喜枝子さんは昭和三十六年だけである。

尾根の夕映え

石井 豊久子

赤城嶺の山ひだのかげり深みたり茶をつむ肩に風ややたちぬ

初夏の日ざしにゆれて黄に匂ふ野は一面に熟れ麦の秋

午すぎは雨と予報す広き田の熟れすぎし麦刈る手を急ぐ

しめり気を保てる麦を気づかひつ梅雨の晴れ間をわが刈りいそぐ

おもむろに空よりやみの降ることく脱穀をへし庭に夜くる

つゆしげき稲は重たし刈りゆけばさしそめし朝のひかりがをどる

赤城嶺はむらさきに今か明けそめぬ種田の土手に鎌をやすめる
おそ秋の嵐のあと土ぬれて散るさざんかの花はときいろ

この頃をにはかに老いのめだち来し母にやさしき娘とならむ
日もすがら吹き荒れし風しづまりて赤城の尾根の雪匂ひたつ
肩さきの冷えにめざめてさらさらと笹の葉にふる雪の音聞く
足とめてその静かさをたしかむるほのかに明るき雪の帰り路

しみじみと開墾の苦勞語りつぐ父なり土地を買いに来し人に

他人の手に渡すは惜しからむ若き日の父が汗して拓きたる土地
父と母とその若かりし日々かけてひたすらに鎌をふるひし田畑

戦時下の食糧難にあへぎつつ開墾の歎ふるひしといふ

口に入るものごとく食べつくし木の芽さへ食べて拓きたる土地

酔へばまたいつしか若き日のことに話がゆきつく父にて夜更く

春雪の膝埋るまでふりつみしゆふべを母は嫁ぎ来しとふ

雪の日に花嫁衣裳のはなやぎもなくて嫁ぎし母にてありき

峰ふぶきやみてしばらく赤城嶺の尾根に冬日のほのぼの匂ふ

高校文芸部で短歌をやり、二年生の時に同人雑誌「草葉」(主幹吉田緑泉)の社友となり、現在草葉同人。群馬県歌人クラブ
会員(三十八年入会)。昭和二十年四月三十日生。母毛石一六八八。

いさかいて言葉少なく畑うちぬ耕なるが故に弱き身の夫

畝もすて農地もすてて工員となりし友の畑に老父母が働く

吾が歌えば夫も歌えり幸せの歌結ばるる日に友のうたいくれしもの

墓石に刻まれし文字のうすらぎて祖父知らぬ吾のそえし木犀匂う

荒き雨に出しふる足をふみしみて三時となれば夫を田に出る

塩化ビニールの強き臭いが鼻つきて新しき雨具身につけ桑つみに出る

すきもなくつめし桑がご背負い立つ笑みて手を出す夫にすがりて

よりそいて沼辺あゆみつ若き日のキャンブフアイヤーの跡夫が指さす

畝握るふしくれし手が吾が肩を強く抱きぬいさかいし後

いさかえば聖書読む吾れに背を向けて夫のねいきが荒く波うつ

苗ヶ島五三一番地。年刊歌集（昭和三十六年度）より。

「三十一文字に農家の哀歎」

昭和四十五年十一月二十日付上毛新聞に掲載された苗ヶ島農業星野喜枝子さんのうたのこと。

バインダーもコンバインもなき農なれば鎌（かま）新しくして夫（つま）と競へり

星野さんが短歌を作り始めたのは中学一年のころ、近所に住むおばさんにすすめられたのがきっかけ。読書が好きだったとはいえ、それまでとくに文章を書いたりすることのなかつた星野さんは新しい世界に目を聞き、一首作って

は批評を受けに行った。こんな星野さんが短歌に傾倒して行くことができることが起る。二十七年春、入学金まで納めた高校進学を四人姉妹の農家の長女だという理由で断念しなければならなかった。

それからの星野さんには「支えがほしい」と模索する日が続いた。

逢えばつまらぬ世間話に花咲かす友に未来の夢は語らず

荒れし手をサラリーマンの友の前に平気で出せる我となりぬ

古古米といえど豚の餌は悲し手を荒し吾等作りしものを

平凡な主婦でもいいのですが、このまま死ぬより何か一つ生きていた足跡を残したいという星野さんの作品はもう千首を越す。

○ 鈴 木 仁

宮城小学校長の現職で昭和四十三年九月十九日に脳出血のため死去した。その教育熱心は広く知られるところで、宮城小学校PTAは文部大臣賞を受ける栄誉があった。短歌は父章舟（粕川村）の影響からひそかに作られた。

遠雷に驟雨きたりて山吹の花ほろほろと散りにけるかも

歌作るをやめて優秀調導たれと校長のいふは首はんとす

長欠児対策協議をなすといふこの村に赤く桑の実熟れぬ

昼休みにわらびをつみにいくといふ校長の話はほほえみできく

すでに熟れし麦生の上に籠へる夕陽よわがつとめ了へたり

肥満して汗多き我にビタミンCとれと夕刊見つつ妻いふ
はらからの生を支える我ならばいのち惜しみて生きんとぞ思ふ

○『赤城山の歌』

高村光太郎

ああこれ山空をかぎりて立てるもの語らず愚かさびて立つもの
水清き赤城の山に秣刈る少女うつくし絵をねだりける
赤城立ち利根川ながる石に坐し思へば過ぎぬ下根二十年を
人目なし泣かば泣くべきこの山にこころ都人の偽りもつや

——『赤城画帖』（明治三十一年ごろの作品）昭和三十一年、竜星閣刊。

須藤泰一郎

ふるさとやわが毛の国の赤城山日にけに見つつ常めづらしき
毛の国をいかこみよろう山竝みのうねりあきらかに冬暗れにけり
み冬づく日のひかり澄みて天あをしわが赤城嶺の立ちのさやけさ
青空と赤城の山と吾妹子と日にけに見れどわれは飽かなく
見れど飽かぬ赤城の山をそがひにしこの日あたりに家居ぞわがする
あしびきの赤城山べにまさきくて二人しあらばなにかおもはむ

赤城山国のまほらに立ちほだかりほしいままに淵を踏んばりにけり

赤城山根張り太敷おほどかに常居鎮めり毛野のまほらに

あを空をななめにかぎりて赤城山遠長裾を引張りにけり

しみじみと山の枯色に夕日さし木がらしの風打ちやみにしか

鍋割は草枯れまろ山赤城嶺に西に出ばりて夕照りにけり

物象 心象

——赤城山 湯の沢にて

さいと・この系

湯の宿の窓ゆ手触れむひとむらのつつちの花芽まだ固くして

宿の女が折りもてくれしマンサクの花芽の枝をあきびんに挿す

沢水に出で湯そそぎて岩走る流れとなれば湯の沢といふか

湯の沢の宿の湯舟にうかぶもの黄なる湯泡とこれの瘦身

湯けむらふ湯舟の隅につぶやくは「酒は涙か」老いの感傷

だしぬけにガラス戸たたたく音に起ち窓をひらけば風花が飛ぶ

頬を刺す風のみなもとたどる目の目路のあなたに荒山枯るる

午後二時の柏川谷の西面はやも夕づき真火赤し

古い夫婦もだしたたずむ陽だまりの石ころ道ばた声かけず過ぐ
山清水したたる池の浅ければ寒の鯉らはうるこ露す

竹樋を伝ひてそそぐ寒水の真下に群るる虹鱒一団

(「みやま」第25号 昭和四十三年四月十日発行)

第三節 俳句

俳句作家は極めて数が多いので全部にわたることは出来ない。そのいくつかを記載するにとどまるであろう。江戸時代に東宮草寿翁は自宅の庭前に芭蕉句碑をつくっている。

このことに参画したのは武州児玉の逸淵である。当時の俳諧指導者として高名であった。以来、現在まで俳句の盛んな村である。

芭蕉句碑

宮城村内にある芭蕉句碑は一基のみである。大字苗カ島の東宮家(東家)の庭前、門に向って左側に建てられている。この碑を昭和三十二年の陽春に、高崎市に住む群馬県文化財専門委員本多夏彦氏が朝日新聞群馬版に連載していた「上毛芭蕉塚」に紹介するということで、案内した。東宮家の親戚である小暮高爾氏(元大胡町長)と一緒に行った。本多先生と旧前橋中学校時代の同級生である。さて、その新聞掲載の文章をそのまま引用する。

雲折々人をやすむる月見哉

勢多郡宮城村苗ヶ島東宮欽一氏邸の築地上、村道に向いて正面きつてゐる碑。これこそ芭蕉塚が行脚俳人誘引目標を一使命とした好適例であらう。三尺ばかりの根府川石に逸淵の書で、この家の主人草寿が万延元年建立したものの、氣持のよい碑である。東宮家はこの地方の土豪で、古く高山彦九郎が赤城神社参拜の旅に二度も来泊してゐるくらいだから、代々の主人が皆客を愛したらしい。句は貞享二年の「春の日」に見える。(本多夏彦)

(表)

比と越休む流

雲を理く

月見可南

芭蕉翁

(裏)

万延紀元 瓢江逸淵拜書

庚申歳 東宮草寿建之

沼田 微蹟字

金井春五郎礎

逸淵の書簡

(その一)

秋冷弥御清生珍重

庵中無事消光扱ハ

愚老積年之志願ニ而

古郷へ翁塚遺立無滞

成就いたし候右供養会

相儀候間御くり合御出席

侍入候それく御風聴

願上候以上

八月十三日

逸淵

草寿

とても皆散もの越

桐の比と葉津々

むさし野に続く

小庭の月見哉

己上

(その二)

大暑弥御清逸珍重

愚老無事帰庵いたし候

入湯中ハ種々御世話ニ

相成忝御礼申上候

右小すりもの上木いたし候

間賞覧ニ備へ申候御句

うつし落し候間代句ニ而

加入いたし申候以來ハ時々の

御句沢山ヒ遣置候様

いたし度候摺もの集などの

時加入可申候先ハ安否

斗申進候以上

七月朔日

逸淵

草寿様

頼む茲阿流か

中にも合款の花

空にさへいつはりの

阿り天の川

己上

湯の沢句碑

赤城温泉（湯の沢）の湯前茶師堂の東側に句碑がある。傾斜地のなかで温泉地を浴衣がけで眺めるような感じで建てられている。

（表） くらきより出て夕月の流れ哉

得所

（裏） 天保癸卯八月

曲景菴男

柳嶋 建之

天保十四年（一八四三）八月に建てられたもの。作者は得所と号した宮沢正治である。享和二年四月二十三日に沼田町の須賀神社の神職宮沢家に生れ、幼名秀之進、長じて隼人また内記といい、得所を号とした。父のあとを嗣いで

須賀神社は奉仕し、字間に精進して国学を平田篤胤に学び、漢字にも通じた。書は王羲之の風を学んで高名だった。遠近からその門に学ぶもの千人余におよんだと伝えている。沼田の学者として斎藤多須久もその門に学んで国学を修めた。明治二年四月一日に歿した。墓は沼田市坊新田の金剛院にある。

後に斎藤多須久が字間の道に進むと共に神道に一生を捧げて県内各神社、たとえば前橋八幡宮や貫前神社につかえ、太田に高山神社を創建し神宮として仕えたのを考え合せて、その影響は極めて大なるのがあったといわねばならない。

得所句碑が湯之沢に建てられているのも斎藤多須久の配慮である。

○芳賀杜牛句碑

赤城嶺や猛る浅間の雪がすみ

大字苗ヶ島の金剛寺の本堂前に立っている。赤城山南ろくの田畑はまだ冬の姿であった。大胡駅から馬場行のバスを終点で降りて、北上すること徒歩十分ばかり。赤城山への登山道の一つで、神社へ奉納された大きな石灯籠（ろうりゆう）が建てられている。道の西は苗島神社で、東が金剛寺である。本堂の前、赤城山でふつうみられる安山岩であるのも葉しい句碑であるといえよう。

赤城山の南のふもとは温くおだやかであるが、はるか西の方に見える浅間山はたけりくるって雪がすみであった。

大東亜戦争という大戦争のはげしい時に会った。東京は日に日に空襲がはげしくなると、学童は学校で空襲の避難の時が多くなり、各地に疎開した。群馬県でも多くの学童を受け入れ、大きな寺院は突然に東京の小学校の寄宿舎になったのである。

芳賀杜牛は王子第一小学校の校長として疎開児童を引率して宮城村に來た。村に住み、赤城山の南をうけて、おだやかな日であるが、猛る浅間の雪がすみを心に感じていた。東京からは空襲のはげしいことを伝えられ、児童の父兄の暮しのうえに思いをめぐらすのであった。

『石楠』同人であった杜牛は村人との交遊のなから句会を開いた。そのなかには村長の上野丑之助氏もいた。上野氏は鬼城門下で、石楠も購読していたので旧知のようにゆききした。戦時のあまりにも寂寞としたなかにあつて俳句は生きるささえとさえいえるものになつていった。

戦争は終つた。昭和二十年八月十五日正午の終戦の詔勅。児童をつれて東京にもどつたが、その後何度か宮城村を訪ねた。上野氏号赤峰は当時を思い、児童の幸せを祈り、平和を祈念するために杜牛句碑を建設することを思ひたち村の人たちと相談して、昭和二十七年に句碑建設の趣旨を発表した。完成は昭和三十年の陽春となつた。

句碑の裏の裏に刻まれた銘文は――

私達疎開者を護つて下さつた宮城村、

その寮舎金剛寺、泰然たる赤城の雲峰

猛る浅間の雪、融然として諸般の情愛

昭和十九年八月から二十年までの波瀾

万丈、爾來十年洵に感無量、今當時の

思出として一句を記念とする次第であります

昭和三十年四月十一日

東京都王子第一小学校

疎開者有志一同

高さ一メートル一〇センチ、幅八十センチほどの石である。

杜牛は國画の先生であった。村のあけくれに当時すでに乏しかった絵の具をかかえて、花をえがき心のなかにある美しいものの表現につとめた。水彩画であり、日本画であった。小学校退職後は高等学校の美術講師をつとめたと聞いている。かくしゃくたる日日であり、「命をたすけてくれた宮城村」と回想されている。

東 宮 鉄 男

大正四年

ひぐらしや亡き母の墓に草深し
細うして大路ながむる真昼かな

〃 七

斥候の頬のあたりや枯すすき
芋汁に古き童話や夜の更けぬ

〃 八

余丁町よもぎかさざりし乾物屋
枕辺にかばん置きたる春の青

〃 〃

春装の紳士銀座のガス明し
春深しかたくな男室飾る

〃 〃

村老に別れし野辺にすみれ咲く
かしこしや造花の菊に惚ぶ国

〃 九

かげろうや海原の如き広野行く
水流るる音時々や冬の月（渾河にて）

〃 〃

コスモスに初雁行けり奉天城

〃 三

昭和二年

〃 〃

〃 三

城内へつづく荷馬車や秋の朝
空黒し雪又黒し興安嶺

昭和三年

高麗の土城に茂る麻の畑
風光る娘々祭近づけり

〃 四

炎天に売買人のしやがれ声
往く春や捨て忘れたる壺の花

〃 五

勝いくさののしる人や馬の群
弦月に焼け残りたる土の壁

〃 六

春かすみ白楊の村はるかなり
春かすみ柳条水をふくむ色

〃 七

烽火たきし塚々秋の暮
若人と希望の春を国境

〃 八

〃 〃

〃 九

〃 〃

〃 三

〃 〃

〃 十二

〃 〃

〃 三

○さいかち叢書『赤城』

（昭和三十年九月）松野自得編 さいかち俳句会発行

苗ヶ島 井上 湖子

出初式虹が生れてラッパ鳴る

伐木の木霊がゆする山の春

災天下殺象限りなき行進

「凶作」を青竹に捲き大会終る

雉子撃たれ落葉掻く事やめてあし

鼻毛石 町田 白露

合掌の母に初日が生む内光

荒る日と見れば赤城に風花す

山壁に春雷大きく胎動す

田の水を譲り合ふ日が喜雨となる

蒼天へみのむし激動くりかへし

六本木 高

みのむしに狐を描かせて風少し

手術終へみんみん脚にある安堵

風鈴の窓より朝刊なげこまれ

残雪に重たき靴の底洗ふ

ぶどうもぐ少女の胸のもりあがる

○上毛俳句集

昭和三十一年七月三十日発行

上毛俳句集刊行会

相業有流編集によって、県内俳人の大同団結の句集が刊行された。五〇〇人の多数にのぼる参加をみた。宮城村関係者は二名。

井上 湖子

穀象群統々と動くメーデーのやうに

別れ来て春着の重さ知りそめり

寒月下浅間噴煙一文字に

解禁の水の青さへ竿伸ばす

原爆忌南瓜は草の中に咲き

「人寿百歳」嬰蹠落葉を踏む自得

苗ヶ島五九〇。昭和二年生。さいかち所風。

高橋 弘

木枯や母にそむきて行くほかなし

妻と別れ冬木立白き中に佇つ

おぼろ夜や病舎へだてゝ屍室の灯

女ばかり憩ひし土手の桐の花

問なく着く君まつ駅の秋桜

くり返す一つの思ひ秋灯下

市之園九七五の四。大正十五年生。

○上毛俳句選集

昭和四十三年四月一日

上毛新聞社刊

相葉有流、松野自得ら県内俳人八名の委員によって上毛新聞社創刊八十周年、明治百年記念として刊行したもので、約七百人の参加があった。そのなかに宮城村関係者が三名寄稿している。

底辺のうた

磯田 政八

灼け灼けし鋪道をたどり来て墮胎

秋曇り少年土工威偽はる

日払ひの錢確かむる夕焚火

畦焼くや負債もろとも農をつぐ

毛糸編む女子寮の窓陽が一ぱい

赤とんぼ少年工にある追憶

炎天に居て百姓になき思考

残暑日々学をおさめて農つがず

秋出水一瞬にして農徒芳

死して貧秋の雷置く土の墓

大前田。昭和八年九月二十日生。

さいかち自得門下。赤城俳句会員。

樹

上野 赤峰

妾打や赤城の山に雲かかる

雲雀落ちて赤城榛名の夕日かな

紅葉散つて遠山巒の深まりぬ

山百合のかげがかげ生む野の没日

馬の崇りの石をだまして胡桃割る

古墳色めく玄室の奥蜂ためて

光る魚達山村めぐる男瘦せ

刈り終えて盗る満月の天を余し

犬の遠吠浪に向けたり喪の写生

鼻の翼か風溜めている赤い鳥居

木名丑之助。苗ヶ島六七三。

若竹、石楠、やまびこ、海程、所属。

獄 樹

星野 灯城

耕にもゆる獄死の墓の葉鶏頭

秋桜合葬碑文に影ゆれて

鱈雲ビル天界を侵食す

葉は錆びて柿残照に太るのみ

子の手網かわす迅さよ赤蜻蛉

貼る障子一枝の影を躍らしむ

透明の野に一点の冬田打ち

ささやきは母に氷菓を求めしむ

朴一樹蟻の地獄へ影落とす

背筋まで田風巡らす夜の涼み

本名秀雄。大前田。住所前橋市朝倉町。

大正十一年一月十七日生。

赤城俳句会。さいかも所属。句歴十年。

松野自得

明王に燭を献じて春惜しむ

——赤城登山 滝沢の不動尊（昭22）

魔の出水人をつかんで弱れさす

——水禍変相 赤城山大洪水（〃）

うつぶせに墓も流るる秋洪水

泥中の屍臭地獄の蜘蛛らがり

秋の陽に水禍の憫體晒らさるる

水禍の魂冷えし塔婆に夜々する

秋風に生死を払ふ一私子

墓穴に秋日満たして人等酌む

赤城嶺を掃り韻々と除夜の鐘（昭23）

古墳の丘登りて見れば四方の田植（〃29）

——二子古墳、最善寺附近二句

登白く翔つとき苗も飛ばんとす

観音に窓あり秋の雲近く ——高崎観音（昭30）

象の足鎖に履せて秋の風

バンガロの陰に残雪わだかまる ——赤城山へ登る四句（昭33）

下崩ゆる兆に雪も水漬きをり

くろは嶺は木の芽吹かんと霧濃くす

掃去来を春の炬燵に残し去る

立秋の石仏赤城迄三里 ——赤城山湯の沢温泉夏行（六句）

秋水に人の踏まない石ころころ

淫俗の踵を外らしいる霧の窓（昭34）

披講士が変り昂る夜の秋

霧に眠れと白き葉を飲まさるる ——静栄女

嵐風の腫の中に居て別割る

——産泰神社四句

コスモスをはなれて蝶のゆくすべなし

秋塵に欄間の竜の鱗乾く

木太刀架け心影流の韻爽やか

蹴れば毒草類から赤い煙吐く

○ ——第二自得句集（昭和三十七年）

『みやぎ情報』二五号（昭和二十八年五月）に、いくつかの俳句がのつていたので収録しておくことにしよう。

春がすみ板は雲の上に咲き

知 泉

かげろうに昨日は三つつくしの子

〃

つくしつむ子等の素足にひんやりと

〃

手術了え窓あけ見れば春がすみ

平 凡

我が歳をつくしに知りて春惜しむ

〃

駆虫せし吾子朗らかにつくしつむ

柳 子

まどかなる人ごえかすみ渡り来る

じつ子

遠かすみ退院の笑顔いつまでも

〃

病む人に春を知らせんつくしつむ

○

高橋 香山

町の灯へ赤城の朧来てめぐる

櫓の宿赤城ふる夜は早寝哉

落葉せし梢に交る山家かな

もがり笛道は赤城へつきあたり

人烟をかかへて眠る赤城山

前橋いなめ会の有力なる同人。前橋裁判所書記。昭和二十年十一月十七日に六十三才で死去。

○

倉田 萩郎

赤城嶺にちぎれ雲飛ぶ寒さかな

前橋いなめ会創始者の一人。『萩郎俳句帳』の句集がある。

○日本新名勝俳句「赤城」（虚子選）より

上毛や二月赤城の吹き下ろし

篠崎 龍夫

南の峰焼かれ居て霞みけり

小坂橋山柵子

赤城山大きく雪の消えにけり

宮崎 三木

放牧や谷むかふにも登山道

大矢揚子並

駒曳いて紅葉の霜を降りけり

篠崎 緑坡

秋天や重なる山のたたずまひ

峰岸赤城嶺

栗拾ひ山彦遊びして立てる

松野 自得

たかだかと野分の朝の赤城山

須永 夢幻

岩窟に夕日さし入る紅葉かな

栗原 徂徠

月となる潮野を引きて大赤城

奥村 霞人

秋天や野道につづく赤城山

宮前 斗城

秋茄子をちぎりて仰ぐ赤城かな

磯部 好成

頂の見え居て遠き花野かな

小坂橋山柵子

赤城山に月かかりたる夜刈かな

境野 和光

見返れば赤城は晴るる紅葉かな

稲刈るや赤城の裾に日もすがら
 秋晴や赤城へつづく桑の畑
 月の出る嶺を言ひつつ待ちにけり
 麦詩かん今日は赤城に雲もなし
 赤城山ばかりに冬日残りけり
 風花や赤城風の一なぐれ

石塚 秋見
 岡部 月蛙
 松田 鬼蜂
 坂本 玩老
 宮崎 三木
 石井 喜石

櫛焚くや赤城風の終日
 学校の北窓ひらき赤城見る
 風花をもて来る赤城風かな
 月明に眠る赤城の姿かな
 残照や雪の赤城のすさまじき

丸橋 倭風
 石塚 秋見
 高草 鶴洲
 町田 禿岩
 大野 輝洲

第四節 紀行

パレット日記

石井柏亭

雑誌「明星」は与謝野鉄幹が主宰した詩歌を中心とする文学雑誌で、明治後期から大正期に多くの読者を集めた。この日記は画家石井柏亭の筆による、明治三十七年八月二日に上野を出発し、赤城登山の旅日記である。参加者は与謝野鉄幹、大井蒼梧、平野萬里、伊上凡骨、高村碎雨、三宅克巳と石井柏亭である。

前橋から小暮をへて新坂平から赤城山大洞で二泊し、小沼付近をめぐる、赤城湯の沢温泉に宿り、大胡へ下って帰った。

処々に樹木の切り倒されたが、雨露に曝されて白骨の如きを見、白き赤き様々の草花華麗の意味少なく、緑の上を飾れるを見、小石の積重ねと砂地もて縁取りたる小沼の沈みたる水を見し我れは、既や自然の擴となり居けるが、

やがて雲の团又团、長七郎山の彼方より出で、サワサワと音を伴ひつゝ、烟の如く我れと我が画中の自然とを包みて、我れをして筆を調くべく余儀なうせし時は、常ならぬ怪しき境に在るの心地したり。我れは今あらゆる神話の決して殊更に作られたるものならざるを確むることを得たり。雲類りに起りて終には雨さへ伴ふに及びぬ。急ぎて帰る。此夜猪谷(旅舎)の二階座敷は我等が種々なる物語に眠ひて、燈容易く消ゆ可くもなし。伊上氏が頓狂なる声もて為さるゝ諸語の言はいたくも人々の腹を撫らぬ。

四日。今日は此処を去つて湯の沢に下らんとす。我れは三宅氏と共に小沼へ、他の人々は最高の外輪山黒檜へ登らんと袂を別ちて出て立ちたり。小沼のほとりに在りて、昨日の業を続ければ、深山鶯声はがらかに、法一法華経の歌をうたふ。朝の程青天を仰ぎしも、今又打ち曇りて方づ鼠と化し、雨も降ちなんとするに、画具を納めて路傍の樹幹に貼札し二人は先立ちて湯の沢へ向ふ。小沼平にて幾筋もある道踏み違へ、何処ともなく道遙ひ行き、とある嶺の頂に立ちて、遙かはるか、彼方に利根、渡良瀬の白き流を望みし時は、広き眺めにしばし我れを忘れし如かりしが、思ひしよりは容易く牛石峠の本道を見出せし迄、げに安き心地はせざりき。降りに降りて二時の頃湯の沢に着き、後より来る人々を待ちて浴舎新東屋に宿る。まことに是れ純然たる山間の温泉宿、二階の天井は低くして丈高き人は屢其頭を打たる。黄褐色の沈澱ある鉱泉に浴すれば、我等は老嫗の裸体を見る可く余儀なくせらる。或は別種の趣致ありと讃じ、或は米に石あるを嘆く。寢に就けば朱塗りの行燈也。普通旅館なれば我等は枕代三厘を払ふの要なき也。

荒山腰より発する荒砥川の水声は快く我等を眠らしむ。

五日。午前は宿に在りて我れと三宅氏とは画のこと語り、他の人々は詩のことあげつらふ。空よく晴れたり、大洞よりは涼しからず。午後温泉宿の一角を得来る。大洞を見たる眼には此景色平凡に近くして感興少なし。

六日。未明湯の沢を発して下山の途に就く。三夜沢なる赤城神社の手前にて与謝野三宅の二氏と吾等五人との間隔

たりて、遂に其姿を失ふ。吾等は道を大胡にとりしかど、二氏は間道を行きたるが為めと、後にこそ知られたれ。吾等は二氏の先きに在るや、はた後に在るやを疑ひて、道傍の茶店に聴き又道行く人にとゞしたれど、その様な人を見ずと云ふ。暑き長き道を過ぎて前橋に至り、漸く先行の二氏に合するを得、二時幾分の列車にて帰る。

〔註〕 明星明治三十七年九月号より

安 積 良 齋（あさか・こんさい）

夷日光街道を大胡から宮城村を通り、室沢宿から黒保根村へ通過している。良齋は岩代国安積郡、現在の福島県郡山市の人である。寛政三年に同地の安積国造神社の神官の家に生れた。佐藤一斎に学び、林述斎に学んだ儒学者で、文化十一年に神田駿河台で字塾を開いた。嘉永三年には幕府儒者として幕府学問所である昌平校の教授になつてゐる。その弟子には群馬県令になつた榎取素彦や岩崎弥太郎らがいる。万延元年十一月歿。主なる著書に良齋文略、詩略、史論、洋外記事などがある。以下良齋文略からその一部をひく。

東省日録抄（足尾行）

安 積 良 齋

（閏三月）廿四日。発大胡。過室沢。山漸深。谷漸邃。青林翠樹。杳然無人。屢迷蹊徑。至深沢。有溪流自北來。曰阪東太郎。発源日光山後。下与刀根合。故刀根又称太郎。從深沢至足尾嶺。百里而遠。皆峻峰穹谷。

たぬき汁

佐藤垢石著 墨水書房 昭和十六年九月刊行

それは、私の十七歳の初夏であつたと思ふ。赤城山へ登山して、地獄嶽から獄柄峠の方へ続くあの広い牧場で淡紅

の馬つゝじを眺め。帰り路は湯の沢の溪を下山した。塚原卜伝と間庭念流の小天狗と木剣を交へた三夜沢の赤城神社を参拝してから、関東の大俠大前田英五郎の墓のある大胡町へ泊った。宿屋は、伊勢屋と言ふのであると記憶してゐる。

台洋燈の下へ、女中が晩の膳を運んできた。その時、何と言ふことなした、偶と、——酒を呑んでみようか——と、考へた。日ごろ、父がおいしさうに呑む姿を眺めてゐると、父は酔眼の眈を垂れて

私に、

「お前も一杯やってみるか」

などとからかふことがある。ところが、これを母がすかさず聞きつけて、

「飛んでもない——酒は子供の頂くものぢやない」

と、父と私をきびしくしなめたことが幾度かあつた。

だから私は、酒が飲みたいなどと一度も思つたことがなかつた。けれど、かうしてひとり旅の宿に夜を連へ、高足膳に対して見ると、一室の主人公と言つたやうな気がする。

「お前も一杯やってみるか」と言つた父の言葉が、頭の何処かを掠めた。そこで、たゞ何となく「呑んでみるか」と、軽く考へたのである。

「女中さん、酒一本持ってきておくれ」

誰憚るものがゐないのだから、私は大胆に注文した。すると、女中は、この子供がまあ呆れた、と言つたやうな顔して眼を睜る。

「嘘ぢやない、ふんどだよ」

たとへ、少年であつても俺は客だ、と言ふ氣でゐるから、私は人怖ちなどしない。

女中は微笑しながら起つていって、やがて酒壺と盃を持ってきた。この壺に正味一合入ることは、いつも徳利の大小について父と母との問答を聴いてゐるから、的確に判断がつく。

「ごゆっくり」

と、言つて女中がまた微笑して去つたあとで、私は眼をつむつて先づ一杯を啗へおとした。眼をつむると言ふのは、舌に感覺を与へまいとする用心なのだ。つまり酒は随分苦いだらう、と言う予感があつたからだ。ところが、苦いどころか甚だおいしい。眼をつむるなんて、近ごろの言葉で言へばひどく認識不足であると自笑した。

それからは眼を聞いたまゝ、グイ／＼と忽ち一本を平げた。手を叩いても、一本。さらに、も一本。都合三本を、手間ひまかけずに呑み干したのである。であるのに、少し肩の骨がゆるんだやうな氣がしてゐると、正面の襖が左に回転しかけて、また元の位置へ戻る運動を続けはじめた位で、別段苦しくも何ともない。いゝ氣持である。

——さすがに、俺は父の子である——

と、思った。生れてはじめて口にした酒を、正味三合べろりと酌んでしまったには我ながら驚く。面かも、呑み抜けていま酔態を演じてゐるとも考へぬ。

——俺は、酒の天才かな——

ひそかに、こんなことを感ずる。それから女中を呼んで、飯を盛らせて静かに食べた。

——酒場記の一部——

第五節 文献に表われた宮城村

○奈佐勝早著『山吹日記』

著者は本姓日下部。通称久左衛門。幕府の臣である。天明六年四月十六日に江戸を発って川越から藤岡へ出て、下野田から榛名へのぼり妙義、赤城と上毛三山をまわった日記である。その後足利にゆき、足利学校を参観し、館林へて鴻の巣、大宮をとおる五月二十三日に江戸へ帰着した。

その間に各地の伝説、史実、出土品など歴史への興味深く、また足利学校にも深い知識を見せている。

本書は単なる旅行記でなく、調査研究旅行記であった。したがって現在でも重要な資料として重視されているのである。

以下、昭和八年に豊国義孝主宰の上毛郷土史研究会発行『山吹日記』より抄出する。

建長三年四月あかきのたけ焼たりし事あつまかゝみに見えたるはこのたけにてやありけん。東に向ひていとさかしきいはねふみさくみつゝくたれば、観了もすさもとも待たたり。こゝにそ赤城明神はいますかりける。やしろのにしに小沼の浪あをく、けふの風にわきて遠く浪のうちよするいとをかし。いにしへにいらぬ沼ときこえしはこれらをやいひけんかし。今さることの伝へもあらねはそれとしるへきよすかなし。水のきよらなる榛名の沼とたかひあらず。この沼のなきさにおり立て手あらひ口そゝきて大神をかみたてまつる。夏山の梢のみとりふかく沼のおもの水のし

ら浪さやかにたちかさなれるは、おのつからなる青にきてしらにきてにまほりなされて、いみしう神さひたり。広まへにたひくぬかをつく。みやしろいといかめし。むかしはくろひのたけの中ほとはかりに宮のおはしましけるを、明暦二年この所に移し奉れりといへとも、国史にあかきの沼の神ともしるされたれば、よしや今の所ならずとも沼のあたりにごそ古はおはしけめ。黒ひかたけにましませしはなか／＼後の事にこそ有けめ。この社も明暦二年に造りしといへは、ことし天明六年まではやもよとせにあまれはやゝあれたる所々あり。御門をいつればすゝのしのやたてり。ゆきて見ればをのこひとりあり。是は朝きよめなとつかうまつれる成けり。寒さたへかたきにこのやのうちにてはたをりくふる煙もおのつから我を得かほなれば、この火のめぐりにまるとるしほころひて物たうへ酒のむ。これより泰玄観了ふたりはかへる。三夜沢のかたへくたればつゝしのあかき白きか咲つゝきてめてたきに、山吹にまじりてさくなむさのひらけたるもよしありと見るに、わきて我すむかたの草のゆかりの色はあはれと思ふを、紫の色にはさくなど誰かいひけんかし。溪あひをこえてむかひのをにのほれば、牛石となつて五六けんはかりもやあらん、そのかたちに似たるは、おほむかみのあつまのひなうちたまひしときこの山に牛に乗てのほりまし／＼けるに、其牛の石に成たるなりとなむ語りつたへたる。こゝはすへて砂山なればみちくえて踏へき方なきところ／＼おほかるを、籬を築あやふきを踏で過るに、麓のかた遙かに見おろしたるけしきしやうすのしわさにうちかすめあきたるやうなる見つゝをゆかんに、この道のこゝろつかひはたゝ足のたてとをのみまもりてあからめせずゆく程に、みちのわろさ足も七八寸もやあらんと見ゆる。うちうへはやう／＼砂くえ落て馬のたて髪のみまましたるうへ、甘間あまりやあらん。其下はちひろの谷なるおそろしさ限りなし。いてやみつから身をすつると聞えしその御事ならんは、よしやさはれよく人をころすてふこそうちつけのひんなさどわらひて、たゝあしもそらにすきはてつ。このいたつきにかたはらの磐かねの昔むしろになみあつゝ休らふ。けふはいたくつかれ給ふとこそ見ゆめれ、此しにも湯のさはてふ所もあればゆあ

みかであらよしやそこにもとたうしのいへは、なにそはさまてといふ。やくなし其つかれ足にてと聞ゆれば、いてそはむかひ火つけたまふか、それもけしうはあらず、焼津にはあらねとこの山にその大神のしつまりいませは、けにさることに哀れおのれもとて、火うちふくろとて、ほくそに火うつして烟なんふく。さるはかりに湯の沢にいたれり。谷あひに家ゐしてゆあみにくる人をやとせる成けり。この山川にしたかひてとゆきかくゆく道にいしいとおほく、行なやめるも郎那にあゆみをうしなひしこちして、たとるく河のむかひに移りて夏山の繁みかしたを過れば、三夜沢とそきこゆる。このさにもまた山ふきの咲たるはかた山陰のときしくの花なめり。こゝに里みやおはしませは、神人の家いへ軒をならへたり。かうぬし増田加賀藤原成宥ときこゆるやかたにやとりぬ。あるしえきもていて、みす。いにしへやまとたけのみこと吾妻のひなをうちしたかへたまはんとてくたせたまひしとき、此山をみそなはしめてさせおはしまして、このところに三夜とまらせ給ひしより三夜沢となんなつたるとそ。また或説に神主の記録をひきて、大君このおほむかみを始めていはひまつるみやしろのいてこしをみて、三日三夜とまるとまへりければしか名つきたりとするせしは、三諸別王御父の君豊城の命を祭りたまへるなめりといへる。けに事のさまうちあひていとをかしとおほゆ。天つかみくにつかみを祭り給ひしあまのひらかを納めしところを横石といひて、此さとより一町はかり山のかたにあり。今もその所をほればさる形したる物なん出る。御旗御矛のたくひをさめめし所をおろのたけといふ。是もいまにいたるまで猶まれにはこのたくひたつもの掘いつめり。いはつ野さゝのやそたましくしをとりけるところを鎌倉となつたり。後の磐余のわか板のみやの御世かのえねのとし、はしめてやしろをたて、あかめたてまつりてあかきの社ともふす。柏原の帝の御世みことのりありて今の所に遷し奉る。もとの宮ありし所はいま本三夜沢と呼て、是より一里はかり東のかたにあり。東の宮なかは日本武尊ひたりは大己貴命みきは少彦名命をまつりたてまつれり。西の宮中は豊城入彦命にて、拝殿二座ひたりは天照大神右は大山抵命になんまします。まつりの領五

十石をおほやけより賜はる。東みやは神ぬし橋原和泉つかさとる。西のみやはこのあるしのつかうまつれるなり。を
たはらの北条万松軒氏康と越後の上杉不識庵輝虎と常にたゝかひ有ける頃、いかなる故にてやありけん、このみやの
あれはこそ輝虎はこゝになれよしなして皆打やふらせけり。永禄六年の事也。これよりしばらく社なかりしを慶
長十一年にもとのことく造り奉りけるとなん。これら縁起に見えたるを摘とりかうぬしの語れをしるしぬ。またえき
の説に、とよきいりひこのみことこゝにしつもらしますすによりて、彦狭嶋命をも祭りける御はか群馬のこほり
の茂木村に有、いまそのとを皇隠嶋となつくといり。思ふに豊城入彦命はしきのみつ籬のみやのみかとの御子に
て、御はゝはとほつあゆまはし媛と申けり。其うまこひこさしまの王と聞え給ひし。まきむくのひしろの宮の御世
五十五年きさらきのはしめの五日に東山道十五国の都督にまけたまひしに、いく程なく御やまひしてかくれたまへけ
れば、此国にいたり給はす成にしことを、こゝの民らこれを悲しうかつはいとはいなき事に思ひて、ひそかにそのひ
つきをぬすみきて此国にをさめたてまつりけり。かくてあくるとしの八月に其御子御諸別王になり、ちゝにことよさ
せし国なれはいきてをさめよとみことのりましてければ、くたりおはしてあるへきことゝもいとるはしくおきてま
つりこちたまふ。なへてのたみくさみなかそへなきことうつくしみの風におしなへて靡きあひけり。其後に／＼の
えひすられいのねちけこゝろを起していみしくとよみけるを、やをら軍をゐておはしてうちしたかへたまひければ、
そのをさなるものともみなわか領したりける所をたてまつりて、ひたふるにまつろひければ、吾孀のかたすへておた
やかになりて、みこのつき／＼ひさしくをさめ給ひければ、其御すゑあつまにおほかり。かみつけの君しもつけの君
と聞ゆる氏みな此御すゑなりけりと日本紀にみえたり。かゝればみもろわけの王この国にくたりましてそのみおやの
神をこのあかきに祭り給けるなるへければ、後にいたりても上毛野君しもつけの君らの氏のおはすめり。また彦
さしまの王の墓はそのひつきを盗きてをさめまつりし所なるとは、いまはた思ひくまこそなかりけれ。さるをこのえ

きに事のもとすゑをたかへてしるしたるなるへし。このはかのこととしころそれとしらまほしかりけるに、こたひほど田のいしのひつきを見てもしくはそれと思たまひしを、中に薬師ほとけの御かたおはせしと聞しには、さはあらざりけり猶外にこそと思ひしを、こよひはしめてなん。かの石棺もこの御すゑの人たちの塚なるへし。皇隠嶋の御墓はいまもめぐりにいかきして所のひとらこよなくあかめたてまつる。いとれいにおはして馬の乗うちなととかめたまふとなん。このついでにまうてまほしけれとも又たちかへらんかくるしさに今はさてこそ思ひさためためれ、かねてしらすりしそねたきや。この神の御事すへてかくくまなく思はるけぬる中に、猶こゝろえぬ事こそあなれ。鎌倉石大臣の金槐集にかみつけのせたのあかきからやしろやまといかて跡をたれけん見えし。さる御神のおはさぬをなとしもかくはといとおほつかなし。しかはあれともすへて歌には何事をもそこはかとなくたゝこと葉によりてよめるためしとおほかり。朝恒の主か山へをさしてとよまれしたくひあまたあるへし。されはこのうたもろこしの天台はさしも名たゝる山なるうへ、さま／＼あやしきしるしも聞ゆるに、赤城の名ましてたかゝりければ、それをおほしなそらへてやまといかてと読たまひけるならし。此集のよしある家に伝し本にも夫木抄に載たるもともからやしろとかけり。いつれにつきてもをさ／＼たかひなきをや。

十九日みつのえいぬ、またきに起て里宮にまうつ。神王成有まほしさうそくしてあないす。まつ西のやしろにまゐる。神宝をとうてゝみせぬ。神境は八菱にて経四寸はかりうらにから草あり。是はこなた様ならぬもの也。いまひとつはまろくて経三寸はかり裏に鳥あり。これは我國のふるき鏡ならん。むかし小沼より出たりとかや。環めぐり五寸はかりもやあらん、黒くまろし。其形つやゝかにもあらずいとおもし。石のこと見ゆ。大磐若経二部あり。一かたは応永十八年とかけり。一かたは永正十七年の物にてともに法師の書たるなり。又紺紙に金泥もてものせしほくゑきやうあり。ひんかしのやしろにまうつ。二社ならひいます。このうしろの山のすそに高さ三尺はかりのふるき石塔ふた

つならへり。かたちむさしの大歳なる源帯刀先生の墓のしるしのことし。成ひろにとへは誰ともしれずといふ。また其家にて古き十一面観音の像をかむ。これはむかし高野辺左大将家成といふ人いますかりけり。このところにさすらへおはして延元元年にうせ給ひけるに、その十三年は北朝の貞和四年にてこの人の十三回の忌にあたりければ、そのほたたいそなへんとて十一面観音の像千たいをつくりてこのやしろに納めたてまつる。今もあまたおはします。この里人の家につたへもたるもおほかりとかたれり。立像はたけ八寸あまり下のかたに延元十三年と朱もてしるしたり。座像は五寸あまり、高野辺左大将の十三回忌によりてその菩提にすゝめんとしてつくりたるよしをしるせり。たかのへの左大将家成てふ人ものに見あたれることすへてなし。されとも延元十三年とするせしは其世の有様も思ひしられていとまめくしう哀れもふかし。延元元年は二月廿九日改元ありて、同じき十二月廿一日に後醍醐帝吉野に行幸ならせたまひてこの号三年つゝきたるを、みやこにては立かへりものと建武を用られけり。其後しはくよし野にても都にても改元ありけるを、此国はをさく吉野にしたかひたてまつれば其みかとの年号を用きて、かゝる乱れ世なればそのはやうあらたまりけるをしらて、猶延元十三年と書しにや、まことは正平三年になん有ける。かゝれば其頃すらよし野のみかとの御いきほひのふるはさりし事もしられにたり。彼東のやしろのうしろなる石塔は高のへ殿のはかするしにやあらん。みのころにも成ぬへし。苗か鳥を経て野辺にいつれば河あり。きのふゆの沢よりこなたのかたにたひくこまつる山河のすゑなり。道の左に塚あり、ふたかいはかりの松とひゝらきならひおひたる下にしるしたり。聖徳太子を安置すといへともまさしく古き墳なるへし。室沢の福寿院にしはし休らふ。上やまかみ村は治承のむかし足利又太郎忠綱か平家にかたんせし事をくひて詭か奥と聞えしあたりにもりゐたりけるよし東鑑にしるせしは、此所のうちに今もいひ伝ふるあとありとかや。右のかたに鶴かいと聞ゆるは赤城大神の旧蹟なるへし。山上の町を過ればこの南に騎城跡ありとそ。騎備中守宗次かすみし所なり。藤生沢は和名抄に見えたる藤沢にやあらん。左の

かたにをかあり。富士山と呼てうへに浅間のやしろ有。此所せた山田ふたこほりのさかひなるへし。

高山彦九郎『赤城行』

安永二年十一月十四日、故郷細谷村を出発し、赤城神社に参拝した後、白井宿、渋川町を経て伊香保温泉に遊び、野田、総社から大渡の関所を通り伊勢崎町を通つて帰郷十九日の旅行記。高山彦九郎は江戸時代後期の勤王家で寛政の三奇人の一人である。勤王運動のため北は青森県から南は鹿児島まで遊説し、久留米で自刃した。その間、京都三条大橋のほとりて皇居を拝したことは銅像にまでなり、著名。その記行文は高山彦九郎全集として四巻発行されている。

驢の次に月田村こゝに近戸大明神の石鳥居有、次に馬場村町並なす所なり、里中僅一尺余の小溝流る北は南也、次に苗ヶ嶋大なる水車あり、月田辺はこなたにハ小き水車ハ所々に多し、驢はこなたハ田方多して土地却てよろし、あいのや辺は驢迄ハ地甚たあしくミゆ、苗ヶ嶋にて暫く休ひ是は原山へ上る岳なし、月田馬場辺は南の方をふり返りミれハ東西共に山にて囲むかことし、我来る道も多くの山を経て来るが如し、苗か嶋は上る、原山はミれハ却て又山南になく行道すがら皆松の木なり、すこし下りて小沢あり、こゝにて道者小石を重ねるなり、これハ浮屠氏に習ふてサイノ河原に準るならん、又上れハ石鳥居あり六七尺廻り也、次に惣門有、是は社家あり、苗か嶋は是迄一里といふ遠し、大原は是迄五里といふ、西鹿田は武州旗羅郡台村のもの定次郎宗右衛門市右衛門といふ者と同行、苗か嶋は昔年手習朋友と同行す、是ハ太田浜田辺のもの也、是は都合七人にて三夜沢に着く、惣門を入れて暫わかる、台の人に叔父え恙なくこれまで着の事を伝言す、七ツ前御師杉下对馬守か宅へ着、其子を山城守といふ、石鳥居は神前迄九丁といふ、今日ハまつ休明朝参詣を定む、赤城山中の事なと語り甚楽しき事也、三夜沢ハ赤城高山の西のはづれの前なり、

是を自然上りに上ること甚し、膳村の道に石あり、上ること是までより多し、月田は、杯にてハ又よほと上り苗か嶋
が初て山に上る心ちするなり、然れ共なたらなること也、西の社社家數十人内神主二人東の社社家十六人神主一人、
赤城高山の次第西のはつれを鍋へり山其東角くしきを荒山といふ、此頂に社あり内宮といふ、東の社の持なり、半
腹に社あり外宮といふ、西の社の持也、其東の高き蜂を地蔵か嶽といふ、其東は高きを黒び山といふ、くろびと地蔵
たけの間に湖あり大野といり、湖中に八丁斗の嶋有となん、皆四ツの峯共に冬ハ至る事あたわす、我故に上らず、地
蔵か嶽の前に低き山有、前山といふ、此山上は一里に廿四五丁斗の湖有、小野といふとなん、前山の東に血の池とい
ふあり、別名がき堀ともいふ、前山西かくまんか淵といふあり、赤城山を大同といふことは昔大同年中に此山開初た
る故也、赤城大明神ハ人皇十八代

履中天皇の御宇に鎮座まします、十年斗已前

太神宮の号

京都より給へると也、これハ

女帝様御即位まします翌年也、此年より尽く仏の事去り唯一の神道と成といふ、是太神宮の神号給へるが故也とそ、是
迄ハ社僧あり、此年より一向に仏礼を廃ツ、京師のの

勅によつてなり、西の社の神主を杉下対馬守増田加賀守東の社の神主ハ奈良原出雲守といふ、社領五十石、湯の沢と
いふ薬温あり三夜沢の良の方一里斗、湯の沢の東滝沢といふ大滝ありこゝに不動堂岩の下にあるとそ、滝の落る事
凡十二丈これへも一里、荒山絶頂迄三里但三夜沢也、今日天気よく風もなく、赤城の神ハ大山すみの尊にて化現
の神

天照太神大己貴命合せて三神、化現とハ分神の事なりとそ、神人として四人斗社家の下ありとそ、これハ神事の時に社内

にて働く人なり、三夜沢中社家百姓共に四十軒軒斗、赤城の山中薬種多し、ワケて三枝五葉の人参あるよし、前橋様より薬種とりに来るといふ、三夜沢より沼田城下まで十里其道、そろきえ出てゆく、地蔵かたけを北へ下り沼田の砂川迄五里、地蔵たけとくろび山の間大野の湖へ、堅三里横一里斗中に八丁が嶋とて八丁の島あり、こゝに弁天の社あり、七月朔日別当より筏を浄め社へ渡、風あしけれへ往来間かゝるとなり、此湖北へ流れ沼田の砂川へ落沼田の城下へ出利根川と成るといふ、地蔵たけに地蔵堂あり依て号とす、堂へ絶頂なり、湖のハた赤城の社あり、こゝに番所在て毎日二人づ、前橋を来り番す是、ハ社の番地、此北巽にねり村といふあり、巽の名産なり、是も前橋の領分にて毎年蕨を上る、此所かの休み場也、村ハ大同といふ五十石斗の村とそ、地蔵か巽社共に前橋の新門寺別当也、天台宗也、黒び山ハはなわの辺おぎ原のぜん（今所）のふ寺の持也、小野の虚空蔵ハ田沢のわくまるのいかう寺の持也、荒山内外宮共にせんげんと成是ハ木草（本在湯野）さくや姫の神也とそ、三夜沢ハ大同迄三里也、黒び山へハ又三十丁斗のぼるといふ、三夜沢ハ湯の沢とて薬湯のふかし湯ある所迄一里斗大間々え三里東の方也、前橋え五里、赤城山中皆中古までハ神も仏道にせよめられしに近年漸々神道開け三夜沢荒山今ハ唯一の神道とそ、然れ共外皆別当あり、三夜沢も十年斗以前迄ハ社僧ありけるが、

太神宮の神号以来ハこれなし、終夜吾赤城山中の事を問社家も対にあく、御師に着て酒礼あり後飯夜に至りてうんとんを出す、我金百疋をおとし物として対馬守に出す悦へり、湯杯たて三夜沢の社因とて餅をつく、小豆の粉にて煮て出す、山中のことなれハ何事も山家めかしきこと也、座頭ひきかたりして道者の前を錢をとる、吾所へも五六人来る、たのしき事なり、

十五日、庚午、早に起き行水して礼服し神前に進む、西の社東の社とて並たてり皆南向也、西の社より拝し奉る、御酒を社前にて戴く、杉下対馬鳥帽子長袖にて案内す、西の社三間但五尺間也、神木二本大サ七かい斗廻る杉の木

也、東の社にも二本西程ハ太くなし、両社共に末社あり、西の社西脇に太ミ神楽殿あり、今日ハ西の社の末社天狗の社の祭也とぞ、両社共に祭る。東西の間石の小社あり、是ハ上野国の十二社也、西の社神拝事畢東の社を拝す、東にハ拝殿あり、社六尺間三間也、両社共に上りて拝す、東の社拝畢、西の方三丁斗上りて龍神の硯石とて三間四方斗、上に水ありいかなる早にも水ひることなし、雨乞の時にハ是を遺すといひり、此れにて雨ふらさることなし、西の社へ婦り御師へ帰る、両社共にこけらふき也、社前の鳥居に額あり赤城大神宮と有、社前に門に准したる処両社の後の山にひつ石平とてあり、是ハ上古カハラけを焼所也とぞ、今に祭の時にハこゝに埋りあるを尋出て遺ふとなり、ちよくの形の盃と(イセ)言へり、こゝに又異物有ま石にてすり作りたる矢の根に丸く平成珠子の如きものある(イセ)となり、何か詳かならざるもの也、婦り旅装して出ツ、止めハ一日留るへきにあまり好まざる体なる故に九ツ時分立て石の鳥居を出て二三丁斗大門通を下り右へ転し柏倉次に一ノ関滝久保小坂子、三夜沢を柏倉まで一里(イセ)にちかし、小坂子まで下りよほどなり、次に峯、次に小暮村、小坂子峯辺を(イセ)やうやく赤城山に遠さかるなれ共山つゝきなり、小暮村を南の方九里也皆目の下にミゆ、正道すから水車多し、小暮村の人家をすき南木(イセ)え並木の松あり大道に似たり、是前橋より大同へ行く道也とぞ、こゝをつききり西へゆき田嶋次に引田村次に米野宿、暮合にやとり着て是までもまた山にて里ミ目の下にミる也、赤城は是迄西少し南とさして来る也、こゝも勢田郡也、南北(イセ)え通る町並にて沼田街道也、沼田城下ハ是を乾の方にて七里半前橋ハ南にて二里半伊勢崎ハ巽の方六里半大湖(イセ)え三里半三夜沢は是まで四里半八崎へ是を乾一里半といふ、問屋へかゝりて宿る、問屋権左衛門宿ハ仁兵衛といふ、今日天氣よし、こゝを沼田へハミ(伊豆本)そろぞろ馬をつぐ一里半、赤城はこれ迄(イセ)な山路なれ共田島ハあしからず亦よしといふにもあらず、赤城ハ四月八日、六月十五日杯参詣多しといへり、

毛呂權藏著『上野国志』

著者の毛呂權藏は新田郡世良田の人で、歴史学者である。安永三年に編集を完了したものを明治四十三年に刊行した。当時の交通不便な時代に調査に歩き本書を編さんした。また『長楽寺記』の著書もある。神仏儒学に通じ、子弟の教育にもつくした。その墓は尾島町世良田の普門寺にあり、県史跡に指定されている。

赤城山 数峰群聚、總称赤城。黒檜山赤城最高峰也。神祠あり。此山を千眼と云ふ、千手千眼なり。別当は萩原の善応寺、天台宗なり。

荒山在地蔵嶽南。祭浅間大菩薩。又号小路嶽。三夜沢祝氏、奈良原氏家、有小田原北条制礼、其辞云、駿河富士浅間大菩薩、赤城山之内、号小路之嶽、地江御飛之由、数か度御神託無疑之段、三夜沢之社人、一同注進、尤可奉任神慮事、对参詣之道者、山内路次中、喧嘩口論、非分横合之儀、聊不可有之事、於町中、押買狼藉并国質等儀、一切可停止事、右此条々有違背之輩者、不嫌甲乙人可処其科者也、仍如件、永禄十二年閏五月廿三日朱印、これに依てみれば、当時参詣の者多と見えたり。

鍋割山 在荒山西南

地藏嶽 在大沼南、山上有小堂、安置銅像地藏、長二尺余、以銅釜為座

鈴嶽 在大沼の西

佐佐倉山 在鈴沼南、地藏沼西北

前山 在小沼南

和久土也山 在大沼北

鷹山 在鈴嶽東、地蔵嶽西北、多磐石躑躅在石間、山上平也

永倉山 在大沼西、和久土也山南

烏帽子石 在荒山東北、瀑布之上

大沼 在黑檜西、地蔵北、永倉南、語之中、約計東西十有余町、南北六町、沼中有洲、名小鳥島、東岸日障子返、神殿在東岸、記下下

名石垣沼 一記、石垣沼、倭名沼也、不詳。

△中略▽

小沼 在大沼東南、隔小山、南北六町。

祖母坂 在地蔵嶽西。

地獄谷 在永倉山西。

舟之鼻 在地獄谷西。

五偏峠 在黑檜西。

烏井峠 在黑檜山下山。

南雲沢 大沼西にあり。

瀑布 在小沼東南、直下十余丈、南流為糟川。

横枕

藤井谷 井瀑布之上の名なり。

不動堂 在瀑布南、糟河之旁、安銅像不動、此像甚神靈。人称角力。則小兒亦得攀之。若又欲量其輕重。則雖有力者。不能攀之。別当関滝興寺。真言新義なり。

温泉 三夜沢の北、不動堂西にあり、苗が島に属す、湯は石間より滴る。其気味微く硫黄の気あり。甚ぬるし。土人これを煖して浴に供ふ。治癒氣、打撲、四支、拘攣等、其效あり。在昔は三夜沢の祝氏に属し、神主奈良原氏に故記あり。乱世の時、逃亡の者多く、浴泉に託しここに逃る。速に迫出すべき旨、神主への書状あり。温泉沢の雨を太子沢と云。

○上野名跡考

高崎藩大河内氏の家臣富岡正忠の著書である。諱なは正美後に正忠と改めた。通称は藤九郎。先祖は邑栗郡大泉町小泉にあった小泉城主富岡対馬守秀高で、その八世の孫という。この著書は文化六年仲秋の完成で、著者五十歳の時という。その内容は簡明にしてよく要点を取っている。

久路保根呂

万葉十四

かみつけのくろほのねろのくす葉かたかなしけ兎らにいやさかりくも

按に黒保の峯呂、末詳ならず。此に赤木山あり、最高峰を黒楡山と云、今思うに久呂比・久呂保ともに、波比布倍保の音もて通へるなるべし。さて此の歌の意を思うに、葛葉の如くかなしき妹に遠ざかる事を、彼峯呂のいや高く遠にとりて挙げしものによ、猶、後人にとりうべし。

赤木山

夫木 万代にあかぎの山の白椿君がさかゆく如杖にぞきる

説人不知

東鑑云、建長三年四月十九日、上野国赤木嶽、為先例兵革兆之由、令彼国在庁等申也云々。山中の人むかしやけたる所は今の荒山にて、温泉はその余りなりといへり。承平の軍記に、相馬小次郎将門、土浦城を攻め、叔父国香をじし、下野の国を打なびけ、上野国へ打越て、高木山に陣を取る云々。按に今高木の地名なし、是も赤木の誤なるべし。今昔物語には、上野介藤原忠範が印鑑をうはふと見へたり。按に赤城は赤木共云ふ此山の總名にて、荒山又小路山ともいへり、鍋割山、地藏嶽、鷹嶽、佐々倉山、前山、和久土也、鷹山、水倉山、烏帽子岳等あり。

赤城神社

夫木集 上野のすだの赤城のからやしろやまとにいかて跡をたれけむ

鎌倉右大臣

按にから社といふ事、未詳ならず。或は韓(から)社は社号歟、韓国の神を祭るにあらざと云々。一説、赤城は赤色也、広輿記に、赤城山は天台山也、石皆赤色、壁立如城と云々。文撰天台賦に、赤城霞如立と見ゆ。卓氏漢林に、赤城有二、一は在平涼府崇信縣、一は在万全都司城北云々。今此歌、文撰などによられしものか、すだとは勢多也。延喜式、赤城神社名神大先代旧事本紀、金橋宮天皇用明帝時、盤詰男大神出現鎮座云々。一説、大己貴大神云々、覚満大菩薩と云説に付、縁起に妄説有り、爰にとらず。

旧事紀に、高皇産靈尊、更会諸神、選当遺於葦原中国者、命曰、磐裂根裂子、磐筒男、磐筒女所生之子、経津主命、是持佳云々。按に経津主神は、当国一宮とし、又国府惣社に祭る所、磐筒男、磐筒女、経津主の三神なれば、上古神代の時より、久しく此国に鎮座(しずまいます)神なるべし。

続日本紀、承和六年六月甲申、奉授上野国无位赤城神従五位下云々。今按に里宮は、赤城山下三夜沢に有り、圭田五十石、東の宮は神主奈良原氏、祀祠官十六人。西の宮は増田氏、祠官五人。

又、山上の社は大沼東に有り、社を大堂と云ふ。別当代田山法門院寿延寺、群馬郡前橋代田村に有り、前代田と云、寺は今柿宮村に有り、天台宗長楽寺末也。

○摂社 日神、月神、飛鳥社五社山神、稲荷、雷神、蛭神、水神。大塔寮社、鴨島弁天社、同盤宮、本地堂千手観音、開山堂、沼尻薬師、小沼虚空藏、地藏堂、午王堂等あり。

○勢郡温泉一、三夜沢湯

○按に赤城は背向（そかひ）に刀祢都を負ひ、山脈陸羽に陸奥出羽につづきて、東は斜に日光に境ひ、山勢険峻（さかし）く、郡中に秀出す、千早振神世の時、二荒今日光に作るとの中の湖中禪寺の湖也を争ひ戦ふと聞えたるも又久しき俗談なるべし。

富田永世著『上野名跡誌』

著者の富田永世は秩父に生れ、十三歳で藤岡の京屋の店員となり、支配人にまでなった人であるが、若い時から学問を好み、橋千蔭や清水浜臣らに師事して和歌に長じた。著書として本書のほか「北武蔵名跡志」がある。安永六年（一七七七）—安政二年（一八五五）本書は現地調査をしないで「上野名跡考」「上野国志」その他の著書の引用による。その赤城、石垣沼の項は省略する。

苗ヶ島村

伝説雜記ニ苗ヶ島ハ桃井播磨守住ト云

第六節 小説栄五郎の成長

大衆文学にしめる大前田栄五郎の位置

大衆文学の発生

大衆は生きてゆくうえで、満たされないものを、虚構に求める。つまり現実の不足部分を夢で埋めてゆく、そのいい例が国定忠治の岩鼻の代官松井軍兵衛を斬ったことであり、身売りされた百姓親娘を助けるため二足草鞋の山形屋藤藏を斬ることである。伝えられているところによれば代官松井軍兵衛も山形屋藤藏も実在しないという。だが大衆は国定忠治の話傳承する際に実話をすて虚構化することで、イメージを育てたのだ。それと同様のことが大衆文学の世界でも生まれる。

日本の大衆文学は、大正の末期、大衆社会の出現とともに成立した一種の商品文学であるといわれている。

大衆文学は作者の個性的創造であると同時に、すぐれた大衆作家は、大衆の意識の奥にひそむさまざまな欲望を具体化し一つの人間像をつくり出す。大衆文学が大衆とともにあるのはこの点をさすのではないか。だから大衆文学のヒーローやヒロインたちは、日本人の喜怒哀楽をどっぷりとしみこま

せた人物であるといえよう。そこに大衆の満たされぬ夢が作中人物に投影されているわけである。

大衆文学は、まず講談からはじまり、講談から書き講談へ、そして大衆小説へと、移っていった、とみるのがほぼ定説のようである。講談のいくつかをみよう。

立川文庫は、明治四十四年春から、大正末年ごろまでに刊行された二百数十巻ほどあるポケット版の講談本である。

(足立巻一著、「忍術」「大衆芸術の伏流」) 第一篇は「諸国漫遊、一休禪師」、いずれも書き下して、出版社は大阪の立川文明堂、いろいろな署名、例えば雪花山人などを使っているが、個人ではなく集団による創作である。定価は二十五銭、立川文庫誕生については、創作集団の一員だった池田蘭子の「女紋」(昭和三十五年刊)に詳しい。これはテレビで連続ドラマとして月丘夢路主演で放映された。

立川文庫はノーベル物理賞を受賞した湯川秀樹博士が愛読したことは、その回想記「旅人」に述べられている。また反体制の教授として名高い清水幾太郎も少年時代の愛読書のひとつだといっている。

立川文庫からは無数の英雄豪傑忍術使いが生まれた。猿飛

佐助、岩見重太郎、真田小夫判、真田十勇士、エトセトラ、エトセトラ……。

立川文庫の特徴は、侠客を一人もとりあげていないことが目録でわかる。この文庫の出現によってこれと同じスタイル、内容、主人公、筋等をまねた多くの出版社が続出した。同じ大阪から博多成象堂の「武士道文庫」岡本増進堂の「新著文庫」東京からは浅草の大川屋書店の「袖珍大川文庫」等々——侠客を扱っているのはこのうち「大川文庫」で題名は「侠客国定忠次」「天保水滸伝」のみである。

立川文庫の第一の人氣スターは「猿飛佐助」であり、次は「真田十勇士」のそれぞれであろう。この文庫のブームの背景にみのがしてならないことは尾上松之助たちチャンバラ活劇に支えられた活動写真の人氣を考えてみる必要がある。立川文庫の人氣は、関東大震災を契機にしたいにおとろえる。昭和期の講談社文化に継承されてゆく。

他に博文館で「長編講談」を発行しており、萩原進氏（群馬県文化財専門委員、郷土史家）の優れた遊民の研究「群馬県遊民史」（昭和二十五年）によればその第六十四編に「大前田英五郎」（編者浪上義三郎）が発行されていると述べており、他に上州の侠客として「国定忠次」「機名の梅ヶ香」（安中草三郎）があるといっている。

編者浪上義三郎とは悟道軒円玉に属していた講談の速記者である。講釈師二代目宝井琴波が明治二十七年二月から七月

まで館林の江戸屋虎五郎のところ世話になり、聞き出したものを、のちになって円玉が脚色を加えたものである。榮五郎は無口だったそうだが、虎五郎が琴波に語った事蹟は「榮五郎の伝をきいて居り、一部見て来たような嘘は嘘としてもその速記は割に確かである」と子母沢寛はいつている。しかし円玉は「清水の次郎長だの大前田英五郎だの、あれはみんな江戸っ子ではなく田舎ばくち打ちだ」といつていたという。（川口松太郎「風流悟道軒」）

悟道軒円玉は、講釈師であったが、肺浸潤にかかり声を出すことができなくなり、速記講談をはじめたので、速記とは名ばかり一種の創作であり、若いころ漢学をやったとかで文章もうまく大衆文字が出る前までの娯楽雑誌は速記講談が主な読み物だったし、円玉のは警句も多く、時世風刺などもあり、当時歓迎されたのである。彼の書き講談「伊達騒動」にヒントを得て、志賀直哉が「赤西惣太」を書いていることを考えてみると、円玉の書き講談がわが国の近代文字に与えた影響は決してすくなくない。

猿飛佐助は鳥居峠のふもとで生まれたといわれ、鹿沢温泉の近くの角間山の山頂には猿飛佐助修行の地と書かれたほんぐいが建っている。土地の古老の話によると、後日談として大阪夏の陣で傷をうけ、先妻と後妻の子供をつれてこの地のがれ、昼は山中にかくれ、夜、鹿沢温泉で傷の治療をしたという。伝説として聞くととき興味深い。

イを発表している。

「近代遊侠の中で、誰でも知っているのは、国定忠治に、清水の次郎長であろうが、二人が、すっかり、遊侠道無二の英雄になってしまったがために、その相手方の扱は、一通りではない。

上州切つての大親分といへば、大前田英五郎であつて、忠治なんぞは、入口で草履を脱がぬと入れぬ身分であつた、もちろん身分が低いから、人間も低いとはいわないし、英五郎は、一生の間、一度も刀を抜いたことがないのに、忠治は花々しく働いているから、談話になり、芝居になり、だんだん普及されるのはあたり前にしても、英五郎が上州一の大親分として一度の喧嘩もしないで、いわゆる、上州長脇差から、大親分としてあがめられ、誰一人、桶を突く者のなかつたことは、いかに、英五郎が大きかつたかということ物語つてしよう。

だが刀を抜かぬ親分なんぞは、面白くないものだから、人氣はすっかり、国定忠治に集つて、大前田英五郎の事績は誰一人書かぬが、長谷川仲氏や、子母沢寛氏は、一つ、こういう、人を斬らぬ遊侠の徒も、書いてもらいたいものである。

上州の人は、よくこのことを知つていて

「忠治と、英五郎とは較べ物になりませんや」

と、口を揃えていうが、一度の喧嘩もしなかつたという徳は人間として、忠治輩より、確かに、大きく、えらかつたら

しい。——（遊侠伝相得）」

直木は大衆文学の巨匠といわれ、その論法は、匿名批評がもつたのしさをするとく現すところに魅力があつた。「やくざ」の研究家であり、江戸時代の風俗考証者として名高い田村栄太郎（高崎市）は、「平井、林田、国定」（剣法夜話）で彼に論駁されている。史実とは別に国定忠治に関する事柄なので次に掲げておく。

「田村栄太郎氏が、国定忠治は、治が本場で、次は嘘だとか、その反対だとか、当時の調査に治と書いてあるから、治だとか、何とか云つていたが、調査を唯一の証拠にして、こういうことをいうのは、作家から見ると、称められない。役人が「次は次か」と云えば、忠治は（次で何んだらう）と思ひながら「はい」と答えたかも知れぬし、「治は治まるか」と云つても「はい」と答えて（俺ら、ちゅうじろだ、治まつたつて、次いだつて、どつちだつていいじゃねえか）と考えたかも知れない。当時の博奕打が一々治と次の区別なんかすることはないし「ちゅうじろ」なら忠次郎でも忠治郎でもどつちでもいい訳なんだ。栄太郎氏は、治と次とを挙げているが、この外に「忠二」と書いたものもある（子母沢氏の話）、これを挙げなかつたのは「二」とかいた本を知らないせいだろう。こんな遊人の名なんかを、調査を唯一の頼りとして断じたりするのは無用の業である。

その時、長谷川仲氏に「出役」を「でやく」でも「しゅつ

やく)でも、どっちでもいいと、やっつけられていたが、これは長谷川氏の方が正しい。この位の程度で大衆作家に教えようなどというのは少し身のほど知らずである。吾々は黙っているが、皆相当に知っているんだ。史学専門で、人をやっつけるなら、もう少し考え直してやっつけることだ。僕らも知らんことは多いが、田村氏程度からそう多く教えられようとは思わない。徳永直なんぞが、一々教えを乞うているなど――直君程度の無学にならないだろう。」

事実の底をさぐる文学的史眼というべきであろう。なお田村栄太郎は、昭和十年十月、木村毅、海音寺潮五郎、笹木真等と「実録文学研究会」をおこしていることを付記しておく。(十一年四月に解散)

子母沢寛と上州の侠客の出会い

大前田栄五郎を描いたかずかずの作品

直木が書いてほしい侠客として注文をつけた大前田栄五郎に子母沢寛を指名しているのは興味深い。子母沢寛ほど架空、実在を含めて上州の侠客を多く描いた作家はない。彼にスポットをあて、上州のやくざに關係した作品にふれることよって大前田栄五郎の小説に筆をすすめてゆこう。

子母沢は大正十四年、勤めていた読売新聞社会部長千葉電雄のすすめで固定忠治七十五年祭の取材(昭和三十六年/三十七年雑誌「銀座百点」連載「二丁目の角の物語」)に固定

村へ出張する。千葉は博文館発行の「長編講談」を愛読していた。このときの調査を子母沢は新聞に十日ばかり連載するが、これに興味をもって「侠客もの」に筆を染めるようになった、といっている。このひとつの動機が彼自身の作家的資質とからみあって、その後おおくの「侠客もの」を手がけるようになったのは、みのがせない事実である。子母沢はこのも何度となく、いや何十回となく上州の地の遊侠を現地調査して書く。彼の祖父、梅谷十次郎は、上野彰義隊の生き残りだ。さらに五稜郭のたたかいで捕われ、土窟を返還したかつての江戸の御家人たちだった。「小説のタネ」の(あとがき)で書いている。

「遊侠の源は、祖父がそんな風なものでしたから自然興味を持ちましたが、時には、ある親分から、牛肉屋の二階で話を伺っている間、うしろにひとことも口をきかず黙って座っている若い人が二人もいたことがあって、後できいたらこれが親分の用人棒で、異口にも一人いるというので、ぞうっとした事などもありました。それから或時はお話を伺っている中に地震があった。途端にかかって、顔がはずれて、そこから刀ががら／＼と落ちて来て肝をつぶした事もありました。」

こんな風に物騒ではありましたが一と昔前は、こういう人達の仁義がなか／＼堅くて誠に気持ちいいものでありました。近頃はこういう事になって磨りすか／＼一向に存じませんが



翁のさし絵の太郎彦

筋の通った人はやっぱり筋の通った生活をしていられるのだらうと思います。」

昭和六年八月から子母沢は「サンデー毎日」に十回にわたって「彦太郎笠」を連載する。彼は当時サンデー毎日の東京駐在員をしており、このころよく上州の妙義山へきた。この作品は、妙義山の東雲館という旅館の鯉こくがうまいので、ここに滞在しては書いた。「自分の書いた原稿を自分で東京へ持って出て来て、これをさし絵（小田富彦）さんに題して、また山へ帰るといふことも何度かやった。昔妙義軒と

いった頃の、建前に残っていた黒門なども未だに忘れないう。」（子母沢全集第二巻、あとがき）と述べている。「彦太郎笠」は碓氷、甘楽地方の地理を実に克明に調べていて、おどろくよりほかはないが、「振分けの荷物を肩に、幹な単衣の腕をまくって、三度笠を左手に、頭に髷製の手拭を水に浸して載せている。襦かみても横かみても、踵ね返りそうな小風のきいたやくざ渡世の猿島」（井戸端の意）といったふうの、従来のもにはついぞ見られなかった独特な扮装が、読者にはきわめて魅力的なものにうつたに違いない。これ以後この彦太郎に模した作品がうんと生まれてきて、いわゆる「やくざもの」「ブーム」を形成してゆく、ちなみに「彦太郎笠」は翌七年三月、新田郡蔵塚本町出身の片岡千恵蔵により、千恵蔵プロで、植垣清監督により、明治時代劇として製作された。この年子母沢ははじめての新聞小説である「国定忠治」を「大毎東日」紙上に十一月十五日から翌八年六月六日まで一七四回連載する。空井琴波や二代目伯門の創作談で世に知られた。「国定忠治」の事蹟を实地に調査して、名前も忠次でなく忠治郎と訂正。この作品を発表のち、数年たって彼がふたたび国定村を訪れると、村の古老の間に、「お光」が実在の人物のごとく信じられていて、作者子母沢をとまどわせたという。子母沢が実在の人物を小説として虚構化する場合、必ず現地や関係者を徹底的に調査して執筆するのは二十年近い新聞記者生活の「人様をおたすね

したり」「いいお話をきき出したり」する調れであろう。この年に子母沢は「近世 俠客ばなし」を文芸春秋に一月から五月まで連載する。ここにその一篇として「大前田栄五郎」が登場してくる。この作品は実録ものというべきかも知れないが、文学として昇華されており、小説的な想像力を十分に働かせながら、かたちとしては評伝にちかいかい実証的な行き方をとった小説―大衆小説とみるべきであろう。この作品は、かつての名横綱双葉山の名付親であり、双葉山をあれだけにしたといわれた双川喜一が群馬県内務部長をしていた昭和三年十一月、ただのやくざではなさそうな栄五郎に興味をもって調べ出し、風官をつれて各地を踏査したり、官舎へ大前田一家の生残りの身内を呼んで筆録した事蹟を子母沢がもらいこれにもとづき、彼自身何度か調査したものをまとめたものである。作家のゆたかなイマジネーションによつて支えられたこの作品は田村栄太郎の実録もの「やくざ」の大前田栄五郎とは実に対照的な作品である。久宮の丈八を斬り、のちに「天下の和合神」として大成するまでの生涯がゆつたりとした語り口のなかにエピソードをまじえよくまとめられている。(昭和三十年「俠客列伝」として出版されている)子母沢も直木三十五と同じように「上州へ行く」とよく『国定忠治は書かないで下さい。あれは盗賊ですから。その代り大いに栄五郎を書いて下さいよ』と云われる。」と述べていることが注意をひく。

参考までに目次を掲げておく。

一さて―二和太郎の最後／三長協差封印／四徳世十七年
／五天狗来る／六馬斬り幸松／七幸松自滅のこと／八恥を
知れ／九旅行法

同年三月、「英五郎ふたり」(映画の章参照)を发表。

同八年、サンデー毎日に「松五郎初旅」(映画の章参照)を
連載、栄五郎が主人公ではないが、脇で登場するので掲げて
おく。

同十一年八月「週刊朝日」(娯楽説物号)に短篇「栄五郎
初旅」を发表する。挿絵は木村荘八。
(ストーリー)

栄五郎十五才の時、大間々街道の父久五郎の鶴張りで埼玉
県仁手村の博徒清五郎が賭場を聞いているのを知って久五郎
が「手前話をつけてこい」といった。大胆にも栄五郎は無頼
で清五郎のところに行き「大前田久五郎の伴栄五郎だ。以後
見知っておくれ」といって帰ってくる。このことを久五郎に
話すのだが奥に引込んでしまった。これは清五郎へ斬
り込みをするつもりだと察した乾分の栄次が栄五郎をうなが
して清五郎の賭場へ行くと、さすがの清五郎もいち早く逃
げていない。待ちかまえていた用人棒を斬り、二人で旅に出
る。母のお駒と父久五郎が涙で見送る。

「栄五郎初旅」は若き日の栄五郎をかるくながした小説で
ある。「附記」として「高橋周棟著、近世上毛偉人伝」およ



はじめて小説になった大前田榮五郎(週刊朝日昭和11年8月1日号)

び「大湖町古老談」を注記している。

同十三

年十月、

短編「大

前田英五

郎を「日

の出」に

発表す

る。

同十九

年九月七

日から翌

二十年一

月三十一

日まで大前田榮五郎そのものを描いた長編小説「男の肚」を「毎日新聞」(戦時版)に連載する。

同二十年二月一日から十一日まで「初版以来」(「男の肚」の拾遺)を「毎日新聞」(戦時版)に連載する。ここにはじめて大前田榮五郎が長編小説として現われたわけだ。

すべてのものが戦争完遂に向っていた嵐の時代に、遊侠の徒でも「天下和合神」と呼ばれ、たたいいを好まなかった平和主義者大前田榮五郎がよく情報局あたりで許可になったであろう。あるいは親分、つまり天皇の命令とあらば「水火も辞せず」という遊侠の精神が時代の要請に合ったか、どうか。

榮五郎が田崎草雲に説かれ誠心隊を結成するあたりに相当筆をきいており「一家の若い奴らはどんな三下でも、義理と人情の爲めにはびくともせず突って死ねる。しかし日本国の槍石となる。上御一人の御爲めに死ぬのだ。」と勳皇の精神をいわせるところなどに戦時色と作者の配慮がうかがえなくもないが、全体の筋からは、別に無理はないと思える。かつて発表した大前田榮五郎に関する実録を敷衍し、さらにこれを解体、完全に小説化したものであり、従来発表されていなかった事蹟が数多くある。そのいくつか、

一、草雲が国定忠治を描いた画像はあまりにも有名であるが、天保八年鳥居峠において榮五郎も草雲の筆になっている。これは単に口説でなく、一家の中に確かにそれを見たという者もあって明治初年まで大前田にあったという。榮五郎四十五才忠治執筆に先立つ十六年、草雲若き日の作品だけに惜まれる。

一、初代前橋市長として前橋建設の功労者となった下村善太郎を滅めた話。もちろんこれは講談に出てくるが、作

者子母沢は兩子善右衛門に直接聞いていること。

一、草雲が忠治をはじめ見たのは吾妻郡坂上の宿、鳩の湯であり、草雲と忠治があわや争いにならうとするのを榮五郎によつて未然にふせがれること。榮五郎三十八才、忠治二十才。

一、榮五郎の聲義に草雲が泣いて連なつたこと、草雲五十七才。

一、その他

小説とはいへ子母沢は充分に調査して書くのは定評がある。一応注意する必要があると思われる。伝記資料としても参考になるものであろう。「男の肚」は暗黒時代とはいへ子母沢は真剣に書いた。その気魄は行間からにじみ出ている。そのときのことを次のようにいう。

「忠治の話はしたくないが、どうか榮五郎親分を書いて下さいよ」と、私は上州調査行の度に何度かいわれた。私はやぐざも榮五郎まで行きつけば、立派なものだとしみじみ思う。「男の肚」は戦争中に鉄砲を傷へ置きながら毎日新聞に書いた。あんな時だったが私はこれだけは気を入れて書いた。心の中では「ただのやくざ小説のつもりで読んでいた。き度くはないなあ」などと思いつつ。」（子母沢寛全集第二巻あとがき）

目次を掲げておく。

雨風／肚の虫／霧深くして／薄もみじ／花／道づれ／雑草

富士／歲月／月／山房客あり／草の風／開眼／白梅匂う／昆の月

「男の肚」は昭和二十年に発表された小説の中では傑作であり、数多い子母沢寛の作品でも代表作のひとつである。

「男の肚」は二十七年、単行本として出版されたとき「上州天狗」と改題された。

これ以後榮五郎に関することを「史談落穂」とでもいうかたちですでに発表した中にも含まれているものもあるが、断片的におびただしく逸話を発表する。

同二十二年十二月、「近世遊侠はなし」のうち「敗けてやるのが遊侠の仁義」雑誌「遊侠源」

同三十年一月、「やくざ槍寅の一生」雑誌「小説と読物」

同三十年、「続ふところ手帖」のうち「榮五郎の生涯」の一篇「週刊説苑」

同三十七年一月／九月、「おもちゃの長脇差」「榮五郎新助の出会い」「刃物を持つは恥」「十年六居首となる」「週刊朝日」（「よろず覚え帖」）

数多い時代作家のなかでも、さきに述べたように子母沢はど、上州の遊侠の徒を描いた作家はあるまい。わけでも大前田榮五郎ほど小説になりにくい遊侠の徒はない。それをみごとに小説化したところに彼の凡庸でない作家的資質がある。彼はまた固定忠治だけでも長短編あわせて十作以上書いている。「旅の忠治」「忠治百土産」「秋風赤城の山」「赤城の

雁一等一

「設法渡世のしがたない旅のやくざものたちに、あたたかい眼を向けた彼の気持のなかには、人の世の明暗と、浮き沈みする人生を股にふれてきた共感があったのであろうか。彼の作品は、維新もの、戦後ものに大別されるが、その維新ものは一貫して幕府側に力点をおいて描いている。彼は長谷川伸とならび称せられる時代作家であるが、長谷川の作品は、やや感傷的で随うつであるのに対し、子母沢は武士を描いてもやぐざっぽい武士になる。気取りがなく、長谷川に較べて線が太く感傷がない。巧みなストーリー・テラーである。」

子母沢寛 明25・2・1 / 北海道石狩郡厚田村大字原田一六番地生。本名梅谷松太郎。厚田小学校をおえ、序立函館商業学校に進んだが、のち小樽市の乙種商業学校に転じ、また札幌の中学校に移り、大3明治大学法学部（独法）卒業。同4札幌にかえって銅路毎日新聞社に入社。まもなく札幌木材株式会社に移籍。同7再上京して京橋角の朝の気商會に勤めたが、同商會の解散により読売新聞社に入社、社会部勤務、社僚の千葉魚雄、沢田撫松らと親しむ。昭元・2東京日々新聞社社会部に転籍。同3・7新選組に関する数年間の調査をまとめ「新選組始末記」と題して処女出版のさい、筆名を子母沢寛と定める。同6サンデー毎日東京駐在員。同8・10新聞社を退いて文筆専業となる。同37・2「逃げ水」「父子義」「おとこ鷹」など幕末維新を背景として一連の作品によ

り第一〇回菊地富賞受賞。同43・7・19歿。

榮五郎にふれた作家の雑事あれこれ

海音寺潮五郎の博徒名字説

海音寺の書く時代小説は「重史主義」（中沢平夫説）といわれる。「僕は歴史文学に於ては、史学が（文字）に先行するものと思っている。正確な史学の知識の上に立っての勝負が歴史文学の勝負だと思っている」（歴史文学覚書）

こういふ言ひ方は理論でなく、作家の心構えであろうが、文学と史学は先行も追尾もない。いわば、そういうことにかかわらず文学として昇華される作品を書くことが作家の第一義の道であろう。――閑話休題――彼が上州の侠客大前田榮五郎、国定忠治等をあげながら「文学的名字説」とでもいう史談があるので次に掲げておく。

「発生当時から源平時代までの武士とはくち打ちとは、いろいろな点で実に似ている。」

先ず名前呼び方だ。国定ノ忠治、笹川ノ繁蔵、大前田ノ英五郎、清水ノ次郎長、黒駒ノ勝蔵という呼び方だ。必ず住所を冠して呼んでいる。これは武士の名字とその起原において全然同じだ。藤原秀郷は下野（栃木県）田原に居住していたから田原ノ藤太（藤太は藤原ノ太郎の意）と呼ばれていたし、平将門は常陸（茨城県）豊田郡に住んでいる頃は豊田ノ小次郎と呼ばれており、相馬郡にいる頃は相馬ノ小次郎とい

われていた。熊谷（埼玉県）ノ次郎直実、海老名（神奈川県）ノ源八季定、秦野（神奈川県）ノ次郎延景、金子（東京都）ノ十郎家忠、千葉ノ常風、三浦ノ荒次郎義澄、和田（三浦半島にあり）ノ小太郎義盛、等々、みなそうだ。つまり住所を示すために呼んだのが、やがて固定して名字になったのだ。だから、本当は必ず「ノ」の字をつけて呼ぶべきであろう。

名字を持つのは民の特別な資格の一つで、一般には持てないことになっていった時代であったので、ばくち打ちのは、名字として固定しなかつたのであろう。

だから講談では、ばくち打ちがたがいに呼び合うのを

「固定の」

「おお、大前田の」

といった具合にやらせているが、源平時代頃までの武士も

「やあ、熊谷の」

「おお三浦の」

といった調子で呼びあつていたと思われるのである。（武士と博徒）

なお、海音寺に「固定忠治」を描いた短編がある。このなかで大前田栄五郎を下野の河越五郎としているが、これは羽合問堂の「赤城録」によつたものと思える。

尾崎秀樹のやくざ発生説

マンガから中国問題まで手がける市広い文芸評論家尾崎秀

樹は、大衆文字を歴史的に理論づけようとしている特異な存在であるが、上州のやくざにふれて彼に次のようなやくざ発生説とでもいうのがある。

「近世やくざの発生は貨幣経済の発展と、交易路の整備にともなつておこっている。のちに勤王学者となつた加島屋長次郎（日禰英行）が讃岐金比羅の出身であり、また街道筋の大親分といわれた清水次郎長が清水港に縄張りをもち、上州の大前田英五郎、館林の虎五郎、大胡の団兵衛、高崎の源太郎など、いずれも金のおちることの多い交通の要衝から育っていることを考えあわせると、そのこともうなづける。しかもやくざの発生に関しては、物質と人馬の往来がはげしい街道筋だといふだけではなく、もう一つ天領や旗本領で取締の目をかすめやすいということも条件にくわつていた。関東とくに上州が長協差の本場のようにいわれたのも、天領や旗本領がいりくんでいて、詮議の目を逃れやすかつたことが一つにはあつたのだ。

天保の飢饉以後農村の経済は危機に瀕し、農家の次・三男は、一生冷飯食いの身分にしばられることにたえられず、離村して無宿者となるか、ギャンブルにうつつを抜かずやくざ渡世に足をふみこむケースが小なくなつた。これは封建的な農村経済の破綻と貨幣の流通がうんだあぶくのような現象だつた。しかし憂き世を浮世とする彼らの生き方は、法の外に生きることによつて封建的な身分制や階級性に抵抗する

意味ももたれていたのだ。」（勤王やくざ）

和田芳恵が「鉄火質」に関心を持つこと

「樋口一葉」の和田芳恵さんが、どこからか日本の質屋というものの研究を依頼されてやっている中に「鉄火質」というものがある事を知った。「あれは栄五郎がはじめたものだというのが本当か」と筆者へ訊かれた。「栄五郎もやったが、別に元祖という訳ではないですよ」とお答えした。では、とにかく調べて来ようかといってわざわざ上州へ行ったが、これは詰りは早くから「ばくち場」で必要上行なわれた「質」の事である。（雑事あれこれ）

（子母沢寛、よろず覚え帖より、和田芳恵氏は作家であり、近代文学研究家。著書に「塵の中」「一葉の日記」など。直木賞受賞）

推理作家笹沢左保の隨筆

栄五郎の子分「旅鴉、小諸の武吉」

大前田栄五郎の子分でも「四天王」とか、「八人衆」とかいわれたもの、江戸屋敷五郎、大胡の団兵衛など貸元を称するような人間は比較的知られているが、名もなき子分に関して推理作家笹沢左保氏に「旅鴉、小諸の武吉」という隨筆がある。昭和三十九年二月七日号のアサヒグラフの「空想御先祖さま」の間に発表しているので全文を掲げておくことにする。

ばくの家の家系を辿って行くと、面白い人物にぶつかる。初めて、笹沢という姓を名乗った人間である。もちろん苗字帯刀を許されていない男だから、笹沢と名乗ったといっても、いわゆる通称だったのだ。

一言でいえば、三度笠のよく似合う旅鴉だったらしい。笹沢の武吉という通称であったと想像出来る。武吉は千八百二十三年（文政年間）に生まれた。信州は小諸の米屋の四男坊だったようだ。幾つ頃か分らないが郷里を出奔、その後武吉は群馬県勢多郡宮城村というところで、土地の豪農の娘りつと夫婦になった。りつの年令は不詳。それくらいだから美人かどうか分からない。当時武吉はすでに旅鴉だったようである。それが、大親分大前田栄五郎のところに、わらじを脱いだという寸法（寸法）のようだ。だが、そこが居心地がよくて、つい滞在をのばしているうちに、りつと知合うて結婚したというわけだ。大前田栄五郎が仲人だったといたるところだが、彼は八十二年の人生の大半を他国で過ごしたというから、多分上州勢多郡大前田にはいなかったらう。

あるいは、武吉は大前田栄五郎より三十も年下だから、その頃栄五郎親分は自分の家にデンと構えていたのかも知れない。いずれにしろ、武吉は宮城村には長くは留っていないかったようだ。彼はその後、妻と三人の子を宮城村に残したまま、主として武州、甲州、信州あたりを流れ歩いてきたという記録が残っている。四十に近くなつて武吉は妻子を連れ、

故郷の小諸に帰って来た。足を洗った際に、笹沢を笹沢と改めたのだという。笹栗と書いて、ササグリと読ませるくらいだから、笹沢でもいいわけである。

一八九九年、武吉は、七十五才の長寿を全うして病没した。武吉は、ぼくの祖父にあたるのだろうか。

左保氏のこの短文はこれだけで終ってはいない。この作品の延長の上に武吉らしい人物を投影させて「小説現代」昭和四十五年四月号にはじめての時代小説、股旅もの「見返り峠の落日」という小説を発表しているからである。主人公は「北風の伊之助」という二十七、八才信州の旅鴉であって、時代は嘉永三年の十月、忠治が玉村の宿で取調べを受けて大戸の関所へ護送される状景描写などがあり舞台は下仁田、その外れの西牧川と南牧川の合流点、そこから入る山道は四ツ丸山、鹿兵、物語山の中腹を二里ほど北へ行くと山頂に出る。山頂からは北に荒船山、西に物語山が見える。ここを見返り峠と呼んでいる。この地形の点綴の描写、下仁田近郊の状景描写は的確である。下総の富里で十二人斬った伊之助は下仁田の金丸屋という旅籠に宿をとる。富岡、下仁田一带は鎌田の仁助の縄張りだ。仁助は栄五郎の幹部である。仁助の子分五人は土地の富豪の娘、八重を凌辱する。八重は自殺を図るが伊之助にすくわれる。その後二人の間にそこはかかない感情がたまたま。八重の父娘の前に性こりもなく現われる子分たちを見て伊之助は子分たち五人を斬って旅に出ようとするが、

役人のために鉄砲で殺されてしまう。

題名が西部劇調なのと、ヒーローが死んでしまう結果がアッ・ハッピーエンドなところにこの股旅小説の新らしさがあるといえなくもない。氏はこの作品の発想にあたって、小諸の武吉のことが念中であり、武吉に小説的想像と脚色を加えて、上州の風土の中でドラマを構築、かつ展開したかったのではなからうか、氏の心象風景の中には三度笠をかぶり、旅から旅を渡り歩く小諸の武吉の孤獨な姿があったのである。後世、笹沢左保の文字を研究するとき、隨筆「旅鴉、小諸の武吉」股旅小説「見返り峠の落日」は、彼の小説を分析する重要な鍵である。

笹沢左保氏は戦後高崎市に疎開していたリルケ研究者であり、詩人である笹沢美明氏の長男として生まれ、高崎の高校を卒業した。電電公社にしばらく勤めていたが、推理小説家としてしだいに知られるようになった。「六本木心中」で直木賞候補になり、ひところは月産二千枚をこなしたという伝説の持主である。

栄五郎の子分の子孫がある一時期群馬県に移り住んで（草鞋をぬいで）一人は詩人として群馬詩壇に少なからぬ影響を与え、（日本詩壇の一方の旗、親分として）一人は今をときめく流行作家になった、なんて考えると奇妙な思いがする。

おわりに

文学に現われた大前田栄五郎は、一種の大家文学論になっ

た感があるが、そこから出発しなければ大前田榮五郎の小説にたどりつくことはできなかった。大衆文学の研究は未だはじまったばかりであり、その人物論もようやくスタートしたばかりである。大衆小説はインテリにいやしめられ、しかも反面では一般大衆から、絶えることなき歓迎をうけている。これはいったいどうしたことか、という切実な問題があるわけだが、大衆社会と文学の本質への執拗なアプローチを積みかさね、また積みかさねて探っていくかに解答の道は見いだせるのではあるまいか。子母沢寛の描いた大前田榮五郎に関する作品がどのように評価され位置づけられてゆくか、今後の研究に待たねばなるまい。

政治家にも遊侠にも必読の書

子母沢寛作「上州天狗」(書評)

鶴見俊輔

罪とがの明かでないものをも、気分しだいで切りまくる国定忠治の一代記は、歴代の講師師によって語りつがれ、そのたびに誇張の度がくわわって、大へんな英雄の像ができあがったが、大前田英五郎の名は、国定忠治伝の背景にもちいられるだけだった。剣術の場面の少い大前田を主人公として、講談説物を書きおろす決心をした子母沢寛は、チャバラもの流行の今日、チャンバラぬきのチャンバラものとして、珍しい本を書いた。

作者は、遊侠を政治家として捉えることによって、この独自の道を開いた。大前田英五郎は、身のたけ六尺、笠を髷にあてて歩いて地におとすことのない足早さで、日に四十里をらくに歩いた。血氣にまかせて、賭場のあらいから久官の丈八親分を切ったのが十八の年。その後殺生に縁をたつて六十四年八十二才の天寿を全うして明治七年二月二十六日に死んだ。生涯の大半は、丈八親分殺しの兇状持ちとして八州取締りに追われ、大道を歩くことができず、上州一円を抜け道から抜け道へと逃げ廻った。その間刀をぬかず勝負をきめる工夫をし、後には刀に封印をし、さらに後には木刀をさして歩いた。

俠客として英五郎の方法は、第一は目と体でおどす、第二はめっぽうかい早い逃げ足、第三は仲裁の術である。親分同士のけんかをおさめることに一階級ずつ上って、おたずね者の身分にあつて、しかも群馬県一円の陰の内閣の統治者となり、二足のわらじをはく多くの親分たち(遊侠であつて官僚の二重人)をその影響下におくようになった。やがて地上に出て、幕末の変動期に出会った。大義名分を旗印としておしり強直する武士たちにたいする地方自治組織をつくった。さらに、大勢のおもむくところを先んじて見とおし、水戸藩の武田耕雲斎ら天狗党の旗あげに際しては、大道を連軍しては無用の殺生をすることをさとして、関八州の抜け道、うら道をしるした地図をわたし、かくて、維新の義軍を助けると

ともに、民衆への迷惑をへらした。理財の術にも長じ、ブルードンはだしの人民銀行をつくった。大前田の賭場で発行された駒札は、一組千二百八枚、その日のきまりで一枚一分とか、一枚一両にきめられたが、これは何日のパタチの一両の札と云えば、上州の商人はそれで酒でも煙草でもうってくれる。英五郎のところに行けばすぐにお金とかえてくれたから。

逃げまわっていた時代に霜鏡のため足の指が半分なくなつたが、五体に刀きす一つなかつた。ひきぎわはきわめて立派で、もうろくしたと思つたらすぐ引退して、あとめを指名することもなかつた。政治家にも遊俠にも、必読の書。(中央公論、昭和三十一年一月号)

映画に描かれた大前田榮五郎

上州は昔から賭博が盛んだ。いきおい博徒も多い。そのなかで特に名高いのが大前田榮五郎と國定忠治。むろん貫録は榮五郎の方がはるかに上だといわれている。

大前田榮五郎は、日本一の俠客とよばれ「忠治の兄貴分」「忠治の親分」として人間的にも偉かつたと信じられていた。

國定忠治と比べてみると、その生涯が物語るように、斬つた、張つた、女とのからみがないために小説と同じく映画

には全く不向きの実像であり、劇的起伏にとほしい。榮五郎を主人公にした映画は少ない。

忠治は俠客として榮五郎より劣るといわれるが、大戸の關所でハリツケになるまでの一生は破乱万丈であり(いつでも弱い庶民の共感に支えられ)ドラマチックでさえあって、あまりにも映画や講談、大衆文学的である。彼はまず百本以上の映画が製作されており、ヤタザの世界ではトップの製作本数をはこる。「海道一の親分清水次郎長」でさえかなわない。この記録はまずもって今後もやぶられそうもない。昭和二年、日活で伊藤大輔監督による「忠次三部作」(甲州殺人篇、信州血笑篇、御用篇)は、唐沢弘光の流麗なカメラ、ワートと大河内伝次郎の名演技によって、わが国で映画が製作されて以来の傑作と批評家に折紙をつけられ、戦前、戦中、戦後の最高の作品といわれている。

幕府との闘いに傷ついた忠次が、風に舞う落葉のように後姿を吹かれながら落ちていく物語であった。ここでの忠治像は、今まで講談や浪花節で語りつがれてきた遊俠の徒などではない。宿命のままに旅から旅へと追いつたてられてゆく、多感な、そして逆境にある青年の姿にほかならなかった。カット・バックや移動撮影をふんだんにつかかって力感あふれたシーンは大きな力に追われて身のおきどころもなくつたすっ裸の青年の実感、息づまるような韻律がそこに詠いあげられた。ここでの忠治は、時代の波にはんろうされながら、その

波間をさまよう芸術家の心理を反映したものであり、のしかかってくる宿命に抵抗する若き伊藤の姿でもあったろう。

侯客を主人公にした映画は股旅映画といわれる。ここでそのジャンルにいづらかふれておく必要がある。もともと博徒、遊侠の世界とは、封建社会のなかで庄制のために社会の秩序からはじき出された多くは貧賤出身のはきだめとして生まれた特殊な世界である。旅鴉が、一宿一飯の仁義をきりながら街道から街道へと自由なさすらしい旅をつづけるという設定は、何となく自由にならない、という狭く行き詰まりきみの職場にとじ込められている大衆にとつては無限の可能性をもった世界として受けとめられるのである。一般大衆は日ごろ社会や権力への反感をいっばいもっている。しかしみずからお上にたてつくようなことはできない。そうしたいつも一歩ひいた地点で事態の推移をながめてきた大衆の代弁者として、悪徳役人や十手取繩をあずかる二足草鞋の親分と結びついて、庶民をいじめる悪玉を旅鴉がたたつ斬るといふのが股旅物の多くのストーリーである。

これを支えるのは、ほんとうは自分がやりたいことを、自分 hands を下さないで自分とは関係のないほかの人に仮託してかわりにやってもらうという、代理の思想とよぶべきものであろう。

ではいつたい「大前田栄五郎」が映画に登場したのはいつからであろう。(映画ははじめ活動写真とよばれ後に映画と

いわれるようになったがこの稿ではすべて映画で記述する) 明治四十四年十一月、エム、パテーで作られたのが最初である。津田助直という役者が大前田栄五郎を演じている。

「題名大前田英五郎―旧劇十一場、十一月十五日東京大勝館封切」(『日本映画作品大鑑』)未だ映画製作初期の段階であり、本格的な映画会社と呼べるようなものではなく福宝堂やエム・パテーといった小さな会社や商會が作っていた。スターはなく名もないような芝居の役者を使った。脚本は全くなく製作者が撮影現場で指図をし一日位で作った。

つづいて大正四年に姿をあらわしてくる。日本活動写真株式会社(略称日活)で日本映画の父といわれたマキノ省三監督のメガホンにより栄五郎を「目玉の松ちゃん」の愛称で親しまれた尾上松之助が演じている。尾上松之助といっても、今日では五十才以上の人でないとはほとんど知らないが、大正十五年九月に五十二才で亡くなるまで、十八年間一千本の映画に出演した現在のカケ持スターでも足もとも及ばない空前にして絶後の記録をもつ。日本映画の黎明期にすでに栄五郎が映画のなかに現れた歴史的な意味で注目される。

ストーリーは不明であるが、この時代は脚本のない時代であり、メモ程度によって撮影をすすめたのであるから、まず講談と思えばまちがいはあるまい。

その後しばらく姿を消すが、大正十五年、帝國キネマ演芸株式会社(略称帝キネ)に姿を現わす。

題名「大前田英五郎」

脚色 松本 繁吉

監督 塚越 成治

—主要役割—

大前田英五郎 尾上紋十郎

久保の丈八 実川十七三

聖天伊之助 小島 陽三

おさよ 柳 房江

その他

梗概

義骨漢大前田英五郎は上州長陽彦久富の丈八の横暴を見かね、ついに彼を侍し、浜松の親分新兵衛宅に草鞋を脱いだ。乾分伊之助は、救った茶屋娘おさよに恋慕したが、彼女は駿、遠、三の大親分で暴烈な源六の乾分平吉を想っていた。伊之助は嫉妬に燃え平吉を斬った。英五郎は恩義ある新兵衛の後難を慮り、涙を振って伊之助を斬った。源六の怒りは新兵衛にかかり、英五郎の哀願も何の効なく、遂に英五郎は忍耐の輪を抜き、飛鳥の如く活躍の幕は切り落された。のち関八州にその名をとどろかせた大前田英五郎の若き日の一挿話である。(キネマ旬報大正十五年二月一日号)

この作品が当時どのような受けとめかたをされていたか、同時代者の代表として「キネマ旬報」(大正十五年二月廿一日

号)「誌上の評をあげておこう。

俠客伝としては幾分かの人間味を持って居る物語である。伊之助が恋の爲め心が狂って平吉を侍す辺りもその点で好いと思った。そして全体が乱闘本位から少しく脱して居るので多少見耐えがあったけれ共談話趣味の臭味が全然取れて居るものとはいひ難い。—映画評論家山本桂葉—
(封切、大正十五年一月二十二日神戸相生座)

この作品は英五郎物としてはじめて映画批評の対象にのびたのであり、まず水準の映画といえよう。興行価値として、「殺伐な内に涙がある俠客劇だし、帝キネ映画としては好い方だ」と業界からいわれた。

同年十二月、日活旧劇部でも製作された。

題名「大前田英五郎」

原作並びに脚色者 松本 英夫

監督 高橋 寿康

撮影 出口 昌方

—主要役割—

大前田英五郎 大河内伝次郎

高崎の和太郎 浅見勝太郎

芸妓お浪 川上 弥生

時雨の長太郎 久米 譲

その他
うたい文句として「それは関八州にてその俠名をうたわれ
た伊達大前田英五郎が若き頃の一幕話である」と広告され
た。

梗概

男子の意気地止み難く、上州勢多郡の故郷で近郷切つての
大腹分久宮の丈八を斬り、国越へした英五郎は御用の声に
追われながら東海道を西へと逃れて行った。途中路上に出
合った半行馬子松太郎を救つた因で駿府にその名を知られ
た大万田の清兵衛の恨みを買ひ、再び抜くまじと誓つた刀
に手をかけねばならなくなつた。富士の秀麗を背景に三保
の松原に義によつて起つた男の中の男英五郎の英姿、乾分
の働き、孝の為に身を浮川竹に沈め、男一匹を相手に万丈
の気を吐く芸技もあり、好んで罪人の名をかたる馬鹿者あ
り。悲喜交々大俠客英五郎が流転の日の物語である。

(キネマ旬報大正十五年十二月十一日号)

この作品には二年後に国定忠治を演じ「セイは丹下、名は
シャヤン」こと丹下左膳で一世を風靡した大河内伝次郎が英
五郎に扮しているのが注目をひく。大河内は京都嵯峨野に現
在もある観光コースのひとつ大河内山荘の住人であつた。

その後しばらく姿を消すが、昭和になつて二年に姿をあら
わす。阪妻太宰映画(阪妻三郎プロダクション、スターの

独立プロのはじまり)で古海草二監督で、また日活で高松謙
監督でそれぞれ制作されているが、二作品とも題名は「大前
田英五郎」日活映画は脚色、スター、ストーリーいずれも不
明、古海監督の作品はストーリーはわからないが、批評があ
るので紹介しておく。

原作並びに脚色

沢田 晩紅

撮影

高城 泰策

大前田英五郎

梅若礼三郎

(封切、昭和二年十月二十一日浅草電気館)

広告として「大前田英五郎を主人公としての俠客物語り」

彼の交き日に取材して脚色も相当面白く運び、監督も悪
いものではないが、つまりは相変らずの俠客物である。梅
若氏の英五郎を初め、俳優諸氏皆よくやっている。

—映画評論家芳原薫—

(キネマ旬報昭和三年一月上旬号)

興行価値として「中堅どころの揃つた配役に、俠客物。地
方館向きのよいトリであろう」といわれた。この年、新田郡
藤塚本町出身の片岡千恵蔵本名植木正義がマキノ映画に入社
した。

昭和三年十月、英五郎が直接の主人公でないが、上州の俠
客といわれ、これもかなり名高い観音丹次を主人公にした

「異説観音丹次」松竹京都作品に重要な役柄で登場しているので紹介しておく。

原作並びに脚色

監督

撮影

—主要役別—

観音丹次

上州屋利兵衛

大前田英五郎

英五郎妻お光

その他

梗概

上州屋利兵衛はある夜雪崩の松蔵一味に惨殺された。乾分達は主人の仇を討とうとして怒りざわめき、定観和尚に預けてある上州屋の件丹次を今こそ自分等の若主人として頂きたいと囁願した。けれども血なまぐさい生活を恐れた上州屋夫婦の頼みにより丹次は僧侶として育てて来たのである故和尚は乾分等の願いを聞き入れなかった。若い丹次ははじめて自分の素性を知り彼の血は俄かに湧きたち和尚の手を振り切つて乾分たちと共に父の仇を討つべく立つた。しかし血気の勇に過ぎ散々な目に逢い、大前田英五郎の許へ落ち延びた。かくて三年、彼は一心に武芸を磨ん

だ。そして漸く許しを得て故郷へ帰った。彼は先ず近江屋伊兵衛親娘を苦しめていた仇の片割忠の重吉をこらした。彼は昔馴染のお仙に会い喜んだがお仙の兄寒雀の幸次への悪企みに計られて窮地に陥ちようとしたが、既に昔の丹次ではなかった。故に昔の乾分達も立って雪崩の松蔵一味と大乱闘の末丹次方は凱歌を挙げた。そしてお仙をつれて遠く故郷を後にしたのであった。

この年は、マキノ正博が監督した「浪人街第一話」に前橋出身の根岸東一郎が赤牛弥五衛門で主演した。この映画は昭和三年度のキネマ旬報ベストワンに輝いた。

明けて昭和四年、三月日活で「大前田道中記」が製作される。

原作

脚色

監督

撮影

—主要役別—

大前田英五郎

火の玉啓助

その妹お静

小間物屋善助

服部 秀

西京 太郎

山川 正和

井車 英一

葛木 香一

尾上 華太

板井 京子

若葉 馨

万年猿金五郎

上田吉次郎

その他

梗概

上州伊香保町の町端れ、雨の夜の辻堂で井筒屋お加代の祖父義平が幼いお綱をつれて二百両の金を懐に、お加代を尋ねて行く途中、火の玉啓助の毒刃に斃れて金を奪われた。一足違いで其処に來させたのは、関八州に仁義の名も高い俵骨大前田英五郎であった。彼は御用金斬盗の嫌疑で故郷を追われて旅に出たのであった。断末魔の義平からお綱とお加代の身の上を引受けた。その時そこに落ちていた煙草入れによって啓助の犯行を知ったので、翌朝啓助の宅に赴き金を取り返し、啓助の為に監禁されていたお加代を救った。これより先、啓助は新町源原の出入りで英五郎の為、ひどく凹まされたことがあるので、益々うらみを深く呑んだ。それに引きかえ妹お静は英五郎の男らしい姿に小さい胸をとぎめかした。その夜啓助のため、お加代を奪われたお加代の情人善助は啓助に復讐すべく忍び込んだ。そこで啓助からお加代には英五郎という情夫のあること、英五郎はお尋ね者であることを聞かされ、啓助の奸計とも知らず英五郎を訴人した。それを知ったお静は驚き急を告げんと大前田英五郎の許へ走る途中、かねてよりお静に想をよせていた浪人村上左伝の為に斬られた。然し英五郎を想う一念は傷ついた彼女に力を与へ、よるめきつつも英五

郎の許へ急を告ぐるべく馳せつけ難を脱れしめたのであった。

(キネマ旬報昭和四年四月十一日号)

この作品で小間物屋善助に扮した若葉馨は前橋市の出身であり、本名須田庄一、明治三十一年生れ、開成中学中退後、南部國彦について修業、名古屋帝國座に初舞台。のち佐藤蔵三一座を経て、大正七年向島に入社。十一年に松竹に転じたがまもなく復帰した。出演作品に、ふみのや染吉、暴風雨の夜、二つの愛、人間苦等がある。また昭和七年日活で現代劇「魔の沼」の原作ならびに脚色にあたっている。

この年根岸東一郎はマキノ正博による「首の座」に出演、首の座はまたもその年のベストワンに入賞している。

その後栄五郎はしばらくスターリンから姿を消すが、昭和七年二本登場する。一本は阪妻プロ、他は東活に――

阪妻プロ。新興

題名「英五郎二人」

原作

子母沢 寛

脚色

大國 狂助

監督

神 博文

撮影

吉田 英男

――主要役柄――



英五郎を演じた阪東妻三郎

(キネマ旬報、昭和7年4月1日号)

大前田英五郎

馬場村の政吉

久宮村の丈八

万場鶴右衛門

女房

その他

阪東妻三郎

浪野 光夫

堀川浪之助

岩見 柳水

環 光子

梗概

襦袢に盆を敷かれ、男の顔をふみにじられた遺恨から、久宮村の丈八はじめ主立った十三人の冤分を斬って旅に出た大前田英五郎―やがて木曾路を美濃にはいってここ鶴沼の宿。泊り合わせた布袋屋では、大前田英五郎歓迎で他の客には見返りもなかった。この處待組の客の中にあ

った本物の英五郎は、今宵の立役者にせ英五郎に引合せて買うと、それは隣村馬場村で三文博突をうっていた怪師屋の政吉という職人であった。がそしらぬ悪徳で新太郎と名乗って旅の酒興に冤分の面まで買った。あくる日地蔵堂の日待博突にゆく道で英五郎は、遂に政吉の尻尾をつかんで放り出し主客転倒するが、合渡身内の手前、にせ英五郎がやはり本物として賭場へ乗り込んだ。ここへ土地の代官で賭場荒しの万場鶴右衛門夫婦が現われ、荒療治になった果句にせ英五郎引くに引かれぬ破目に陥り、狸の本態曝露した。ここにおいて愈々本物英五郎の活躍となり、鶴右衛門たちをこらしめる。(キネマ旬報昭和七年四月一日号)

「英五郎二人」は原作をもとにしたたった一本の映画であるが、それほどの出来映えではなく、批評の対象や話題にもならなかった。原作者子母沢寛がのちに本県内務部長友川喜一のすすめにより、英五郎の事跡を調査したのは小説の項で述べたとおり。阪東妻三郎は当時の最高人気スターであり、一般に阪妻とよばれ土師清二の小説「砂絵呪籠」でこの作品の脇の人物、ニヒルな剣士森尾重四郎に扮しあまりにみごとなマスクと演技によって原作者土師清二がその後の小説の筋を変えたといわれるほどの影響力をもった俳優スターである。

東活映画

題名「英五郎旅姿」

原作並びに脚色

監督

撮影

—主要役割

大前田英五郎

高崎の和太郎

福田屋の栄次郎

久宮の丈八

左官長兵衛

一子長太郎

丈八情婦お駒

その他

梗概

三村伸太郎

宇沢 義之

小樽京之助

阿部九州男

片岡千代太郎

小酒井 健

矢野伊之助

楠武 夫

赤崎千鶴子

小川 雪子

上州久宮の親分丈八のために、女房を奪取られた江戸の左官長兵衛は、一子長太郎を背にしてはるばる上州までお駒の後を追ってきたが、丈八に心を奪われたお駒の薄情な仕打に世を停んで死を選んだ。そこへ折よく取りあわせた大前田英五郎は、長兵衛の哀れな身の上に同情し、無道な丈八を斬ってしまった。だがそのために国を売らなければならなくなった英五郎は、美濃路へと草鞋をはいた。

その道中、中津川の宿で自分の名を騙る男に出合おし、面白半分はその男の乾分となつて愉快な旅をつづけた。一方

丈八を失った久宮の一家では、親分の仇を討つべく乾分殺三とお駒の二人が飯州の伝八をたよつて旅に出た。同じ美濃路を長兵衛も江戸への帰途にあつた。その頃英五郎は合渡の政右衛門の家に草鞋をぬいでいたが、土地の悪代官大沼藤九郎の虐政を知り、そして久左衛門親子の危難を救つて、再び旅をつづけた。美濃路は今にも事の起りそうな雲行だ。(キネマ旬報昭和七年七月一日号)

この映画シナリオライターとして幾多時代物の名作をのこした三村伸太郎によるだけに栄五郎が久宮の丈八を斬つた動機にストーリーの新しきがある。いままでの英五郎映画のなかでは格段の違いがある。三村は同十年日活で「固定忠治」の脚本を書いている。この作品は彼の代表作のひとつ。この時代の代表的映画評論家村上久雄は次のごとく批評した。

「俠客物としては、主人公大前田英五郎が国を売るにいたる発端から道中で偽大前田に逢つて乾分となる件りや、悪代官を懲らすことや、悪人一味を討ち果すことや等々ちやんとお圖立は揃っているし、英五郎と久宮の丈八の争闘の快談や、偽大前田によるコメディ・リリーフや、クライマックスの活劇における大殺陣と、かなり面白いところもあるが、ただこれだけのものが揃い、これだけの面白さが点出されているというだけで、その面白さも講談本を読む以上に上に出ず、人間大前田英五郎そのものを描出する何物もな

かったのは、この映画を単なる俠客物とし終った。

宇沢道之も無難であるに止まる。英五郎の活躍に気持のよいスピードが感が味わわれなかったことや、最後があまりにお芝居じみている——登場人物が偶然によって一堂にあつまるという——ことなどは脚色、監督者の責任であらう。

阿部九州男は先ず良い。この映画がとにかく俠客物らしい感じを観客に与え得るのは彼のマスクと演技とによる。とはいえ、これは「大利根の暁」のときの如くには好演技ではなかった。助演者は小川雪子、都賀静子、楠武夫何れも芳らぬ凡技であった。(キネマ旬報昭和七年八月一日号)

阿部九州男は当時の小学生ファンに「キウシユザン」とよばれかなりの人気があったという。

この年、知的な風格をもつといわれた片岡知恵蔵映画は、いまや第一級の時代劇として、インテリに愛され、旅と、自然と、人情の世界を描く福垣清や、高級なニューモアのなかに時代の批判精神を描く伊丹万作と組み「国士無双」「弥太郎笠」「開港渡世」等、かずかずの名作を発表した。

これ以後、彼を主人公にした映画は昭和三十三年まで製作されない。勿論次郎長もの、あるいは天保水滸伝などにはしばしば顔を出すことはあったが、それもワンカットないしはワンショット程度である。

そういう映画を昭和九年三月に寛プロで製作された作品と昭和三十一年東映で製作した「任侠清水港」にみてみよう。

題名「松五郎鴉」(寛プロ)

原作 子母沢 寛
脚色 鏡 二郎

監督 並木鏡太郎

—主要役習—

松五郎 嵐 寛寿郎

大前田英五郎 嵐 瑞徳

清水次郎長 小金井 勝

百性長兵衛 嵐 徳三郎

その他

梗概

じれて焦こって命がけ行列の中突っ走って数百の供待に包囲された郁造は？はた又岡村屋一味の毒刃に取り巻かれた愛しいお鶴お夏や長兵衛は而して夫の男立てたさに人獄女街に身を売ったお常の其の後は譲らず此処天竜川の急流に躍る小舟あり、その中にお鶴親娘に長兵衛がいましめられて無念のがみこの時「娘さん方はあつしがしばらく預るぜ」と声かけたのは余人ならず、船頭に身をかくした松五郎だった。かくしてチ、ット許り冷たすぎる、天竜川の水雑炊を岡村屋一味にたらふく馳走して三人を救った松五郎は

今度はお金を救う金の算段、引返して岡村屋に駒のすくよ
うな味阿の兩金を絞りとると一先ずホトボリを避けて早春
の東海道を一路江戸へ——一行六人の楽しい旅が続く一方
腹違いの弟正次郎探し出す途はと心に誓って相思の人お八
重との婚約も延ばしていた大野正太郎は巾着切の長太郎か
ら松五郎が正次郎なりと教えられ行方探しに長太郎を旅立
たせた。その頃芝長心寺裏の三軒長屋に空しく待機中の松
五郎の許へ来月十日掛川宿の柏屋が代目披露を兼ねて聞く
花会に浜松を放れることを極端に怖れていた乙吉もよんど
ころなく出席するとの急報が都造から伝えられた。斯くし
て一行六人再び街道を逆に勇躍秋葉の火祭で振る掛川宿へ
——天運尽きたか岡村屋乙吉親張の土地と違つて用人棒も
助っ徒の数も少かつたしかて加えて松五郎の心意気を賞
揚して東海の顔役今売出しの清水港の次郎長へ大前田英五
郎が助勢の一役買って出て遂にお鶴親娘の悲願は達せられ
た。靈峰富士の遙か見える峠道、探しあぐねてぐつたりと
茶店に憩う正太郎とちび長の前をちらりと素通した旅人一
人。どうやら松五郎らしい。ねぐら定めぬ旅勢にも等しい
股旅者の松五郎……(昭和九年四月十九日、浅草公園電氣
館ニュース一四一号)

大前田英五郎を演じた嵐璃徳は前の年八年「遊俠三下気
質」でやはり同じ役割に扮している。この作品は、伊勢崎の

俠客伊勢崎栄左衛門一家の出入りを扱った映画である。
この年、九年、片岡千恵蔵は稲垣浩と組んで子母沢寛原作
による「国定忠治」三部作(旅と故郷、流浪転変の巻、舞れ
る赤城)に出演した。

「任侠清水港」(監督松田定次)は主人公は清水次郎長
(片岡千恵蔵)。この映画は次郎長が暴力否定の思想を抱く
ようになる、人生の転機を描いたものだ、とうたっている。
次郎長に暴力否定の決意をさせるのは大前田英五郎だ、とい
うふうに描かれる。栄五郎は市川右太衛門が堂々たる貫録で
演じているのがみものであった。

昭和二十年八月、戦いは終つた。戦争のために映画を作ら
されていた監督や製作者たちは右往左往した。民主主義、自
由主義、平和主義などの合言葉(カギ)を口々に叫んで見苦しいまで
の熱意ぶりをみせる演出者たちもいた。同年二十二日の「映
画演劇の製作方針に関するマツタア・サー司令部発表」によ
って剣戟時代劇の製作は禁止された。義理人情や忠義のため
の剣戟は、その映画化を不適當と命令された。「忠臣蔵」な
どは絶対不可能であった。

昭和二十六年、講和条約の締結により、占領状態が解消、
自由に剣戟時代劇映画が作れるようになった。

昭和三十三年二月、新東宝で大前田英五郎を主人公として
製作された。

題名「関八州喧嘩陣」